

永久保存（10—5）

兵庫県文化財調査報告 第74冊

戸井町坪1号窯

1990.3

兵庫県教育委員会

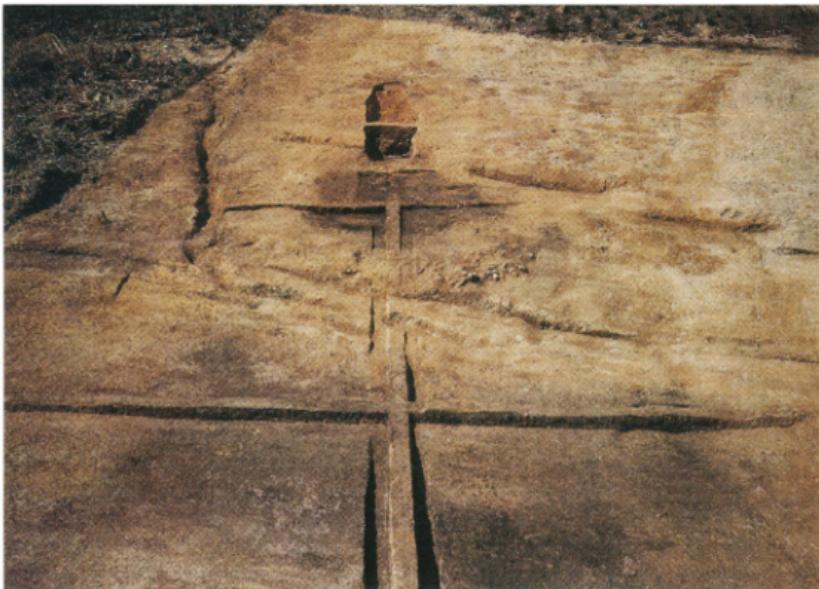
戸井町坪1号窯



新段階床面出土遺物

1990. 3

兵庫県教育委員会



戸井町坪1号窯全景



戸井町坪1号窯出土遺物

例　　言

1. 本書は、兵庫県加西市倉谷町字戸井町坪に所在する「戸井町坪1号窯」ならびに「戸井町坪遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、近畿農政局加古川西部水利事業所が計画した倉谷・千ノ沢造成工事に伴って実施したもので、費用の分担割合は農林水産省79%、文部省21%である。発掘調査ならびに整理作業とも同様で、農林水産省79%分については、近畿農政局加古川西部水利事業所の委託を受けて兵庫県教育委員会が主体となって調査を実施した。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、確認調査は社会教育・文化財課技術職員　藤田　淳・加西市教育委員会主事　永井信弘が、昭和62年10月19日～22日の4日間を費やした。全面調査は社会教育・文化財課技術職員　渡辺　昇・村上泰樹が担当し、平成1年3月7日～31日の23日間を費やした。
4. 本書で示す標高値は、近畿農政局加古川西部水利事業所が設定したB. M. を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真は調査員が撮影した。気球写真は関西航測株式会社に委託して撮影したものである。図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。
6. 整理作業は、平成元年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
7. 執筆は、本文目次の通りで、遺物写真は渡辺が撮影した。
8. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。



加西市の位置

本文目次

例　　言

I.はじめに	渡辺	1
1. 調査に至る経緯	1	
2. 確認調査の経過	2	
3. 全面調査の経過	2	
4. 整理作業の経過	5	
II.位置と環境	渡辺	6
III.確認調査の結果	藤田	10
(戸井町坪2～5号窯の調査結果)		
IV.戸井町坪1号窯の調査	渡辺	21
1. 位置	21	
2. 遺構	21	
3. 遺物	29	
4. 小結	45	
V.戸井町坪遺跡の調査		69
1. SK01 (A I地区)	渡辺	69
2. SK02 (A I地区)	渡辺	69
3. SK03 (A I地区)	渡辺	70
4. SK04 (A II地区)	村上	71
5. SK05 (D地区)	村上	72
6. SK06 (E地区)	村上	74
7. SK07 (F地区)	村上	75
8. SK08 (F地区)	村上	77
9. 小結	村上	77
VI.炭窯の調査	村上	79
1. 位置	79	
2. 遺構	79	
3. 遺物	81	
4. 小結	83	
VII.おわりに	渡辺	87

挿図目次

第1図	調査地遠景	1
第2図	確認調査風景	2
第3図	調査風景	3
第4図	調査風景	4
第5図	整理作業風景	5
第6図	玉丘古墳	6
第7図	戸井町坪1号窯の位置と周辺の遺跡	7
第8図	後藤山古墳	8
第9図	倉谷石仏・石棺	8
第10図	殿原廃寺金堂礎石	9
第11図	確認調査トレント配置図	11
第12図	2・3号窯地形測量図	12
第13図	4・5号窯地形測量図	13
第14図	2号窯出土土器	14
第15図	ヘラ記号拓本	14
第16図	4・5号窯出土土器	14
第17図	2~5号窯糸切痕拓本	15
第18図	2~5号窯出土土器	15
第19図	4・5号窯出土瓦(1)	16
第20図	4・5号窯出土瓦(2)	17
第21図	A地区地形測量図(調査前)	22
第22図	戸井町坪1号窯地形測量図	23
第23図	戸井町坪1号窯第1次床面実測図	24
第24図	戸井町坪1号窯第2次床面実測図	25
第25図	窯体横断土層図	26
第26図	前庭部土層図	26
第27図	第2次床面遺物出土状況	27
第28図	第1次床面出土土器	28
第29図	第2次床面出土土器	29
第30図	窯体出土土器	30

第31図	前庭部出土土器（1）	31
第32図	窯体出土土器糸切痕拓本	32
第33図	前庭部出土土器糸切痕拓本	32
第34図	灰原出土土器糸切痕拓本	33
第35図	表面採集土器糸切痕拓本	33
第36図	ヘラ記号拓本（1）	34
第37図	ヘラ記号拓本（2）	35
第38図	工具痕拓本	35
第39図	前庭部出土土器（2）	36
第40図	前庭部出土土器（3）	37
第41図	前庭部出土土器（4）	38
第42図	灰原出土土器（1）	39
第43図	灰原出土土器（2）	40
第44図	灰原出土土器（3）	41
第45図	確認調査出土土器（1）	42
第46図	確認調査出土土器（2・灰原部分）	43
第47図	表土出土土器・表面採集土器	44
第48図	戸井町坪1号窯調査風景	68
第49図	SK01実測図	69
第50図	SK02実測図	70
第51図	SK03実測図	70
第52図	SK04実測図	71
第53図	D地区地形測量図	72
第54図	SK05実測図	72
第55図	E地区地形測量図	73
第56図	SK06土層断面図	73
第57図	SK06実測図	74
第58図	F地区地形測量図	75
第59図	SK07実測図	75
第60図	SK08実測図	76
第61図	A-II地区造構配置図	79
第62図	A-II地区地形測量図	80
第63図	炭窯土層断面図	81

第64図	炭窯実測図	82
第65図	瓦実測図（1）	84
第66図	瓦実測図（2）	85

表 目 次

第1表	戸井町坪2～5号窯遺物観察表	18
第2表	戸井町坪1号窯遺物観察表	47

図版目次

- 卷頭図版 (上) 戸井町坪 1号窯全景
(下) 戸井町坪 1号窯出土遺物
- 図版 1 戸井町坪 1号窯周辺空中写真 (国土地理院撮影)
- 図版 2 (上) 調査地遠景 (北西から)
(下) 調査地全景 (気球写真)
- 図版 3 (上) 戸井町坪 1号窯 全景 (東から)
(下) 戸井町坪 1号窯 調査地全景
- 図版 4 (上) 戸井町坪 1号窯 全景 (気球写真)
(下) 戸井町坪 1号窯 全景 (気球写真)
- 図版 5 (上) 戸井町坪 1号窯 土層堆積状況
(下) 戸井町坪 1号窯 土層堆積状況
- 図版 6 (左上) 戸井町坪 1号窯 窯体縦断堆積状況
(左上) 戸井町坪 1号窯 窯体横断堆積状況
(右上) 戸井町坪 1号窯 前庭部堆積状況
(右上) 戸井町坪 1号窯 灰原堆積状況
- 図版 7 (上) 戸井町坪 1号窯 全景
(下) 戸井町坪 1号窯 窯体全景
- 図版 8 (上) 戸井町坪 1号窯 第2次 (新段階) 床面遺物出土状態
(下) 戸井町坪 1号窯 第2次 (新段階) 床面遺物出土状態
- 図版 9 (上) 戸井町坪 1号窯 窯体全景
(下) 戸井町坪 1号窯 窯体断面
- 図版 10 (上) 戸井町坪 2～5号窯 遠景
(中) 戸井町坪 3号窯
(下) 戸井町坪 4号窯
- 図版 11 (上) 戸井町坪遺跡 E・F地区全景 (気球写真)
(下) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 全景
- 図版 12 (上) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 全景 (南から)
(下) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 全景 (西から)
- 図版 13 (左上) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 全景
(左上) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 断面

- (右上) 戸井町坪遺跡 SK 0 6 突出部
(右上) 戸井町坪遺跡 SK 0 5
- 図版14 (上) 戸井町坪遺跡 SK 0 7・SK 0 8 全景
(下) 戸井町坪遺跡 SK 0 7・SK 0 8 全景 (気球写真)
- 図版15 (上) 戸井町坪遺跡 SK 0 7
(下) 戸井町坪遺跡 SK 0 8
- 図版16 (上) 炭窯 遠景
(下) 炭窯 全景
- 図版17 (左上) 炭窯 土層堆積状況
(左上) 炭窯 奥壁
(右上) 炭窯 焚口部
(右上) 炭窯 焚口部
- 図版18 戸井町坪 1号窯 第1次床面出土土器
- 図版19 戸井町坪 1号窯 第1次床面・窯体出土土器
- 図版20 戸井町坪 1号窯 第2次床面出土土器
- 図版21 戸井町坪 1号窯 前庭部出土土器
- 図版22 戸井町坪 1号窯 灰原出土土器
- 図版23 戸井町坪 1号窯 灰原出土土器
- 図版24 戸井町坪 1号窯 出土土器
- 図版25 戸井町坪 1号窯 確認調査・表土出土採集土器
- 図版26 戸井町坪 1号窯 表土出土採集土器・ヘラ記号
- 図版27 戸井町坪 1号窯 ヘラ記号
- 図版28 戸井町坪 1号窯 ヘラ記号
- 図版29 戸井町坪 2~5号窯 出土土器
- 図版30 戸井町坪 2~5号窯 出土土器
- 図版31 戸井町坪 4・5号窯 出土土器・出土瓦
- 図版32 戸井町坪 4・5号窯 出土瓦
- 図版33 炭窯 出土瓦
- 図版34 炭窯 出土瓦

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

戸井町坪窯跡群は、昭和51年度の倉谷地区県営圃場整備に伴う確認調査の際に、調査を担当した兵庫県教育委員会 松下 勝・山本三郎内氏によって確認された窯跡群である。ただ、地元では当該地域を対象とした第2次世界大戦後のタバコ栽培などを目的とする開墾によって、多数の須恵器が出土しており、よく知られた遺跡であったようである。周知の地点は、戸井町坪1号窯周辺で、2号窯などは知られていなかったようである。昭和51年度に採集された土器も戸井町坪1号窯の土器と考えられる。その土器については兵庫考古第5号に『加西市倉谷町出土の須恵器』と題して深井明比古氏によって報告されている。

また、戸井町坪窯跡群の立地する大将ヶ峰山麓には、南側に西ノ池窯跡群が、西側に札馬窯跡群が存在し、一大須恵器生産地として著名である。周辺でも窯跡を構築するのに適したところには窯跡が多く認められる。加古川市域では詳細分布調査によって多くの窯跡が確認されている。また、加西市域では加西市教育委員会永井信弘氏による分布調査によって窯跡が増加しつつある。他の窯跡群の構成を見てみると、谷の対岸を主として複数の窯が営まれている可能性が高い。そのため、戸井町坪1号窯以外にも複数の窯跡が存在するものと想定されていた。

戸井町坪1号窯の存在する箕ヶ池から奥の谷部を対象として、近畿農政局加古川西部農業水利事業所によって、千ノ沢・倉谷農地造成工事が計画された。また、この地域は東播用水主幹線の終結部分としても重要な位置を占める工事部分である。そのため、窯跡の存在は知られていたもののその数・規模について未知数であったことから、確認調査を実施することとなった。昭和62年10月に確認調査を行い、窯跡・土壌などを検出し、6カ所の要調査地点が上げられた。その後も数箇所で確認調査が行われたが、遺構・遺物は認められず、要調査地点は6カ所となつた。

その後、調査方法などについて近畿農政局加古川西部農業水利事業所と兵庫県教育委員会の両者によって協議が続けられ、戸井町坪2~5号窯の位置するB・C両地区については工事対象外となり、保存されることとなつた。残り4地点について全面調査を実施することとなり、昭和63年度末に調査を行つた。



第1図 調査地遠景

2. 確認調査の経過

戸井町坪1号窯の位置は漠然と理解されていたものの、全体像については不明な点が多かった。さらに、工事対象面積は広く窯跡群の規模・基數など調査に必要なデーターはもちろんのこと、工事の全体計画を立てる上に支障をきたすので、早急な確認調査が望まれた。しかしながら、兵庫県教育委員会においては昭和62年度の全体計画は固まっており、調査を行う余裕が見出されなかった。そのため、加西市教育委員会に調査の依頼が行われたが、加西市教育委員会も圃場整備事業に伴う確認調査に追われ、調査計画を練り直すことは出来なかつた。前述したように、当該地域は農地造成と東播用水主幹線の終結部分という二重に重要性のある地域であることから年度内の調査が必要とされた。近畿農政局加古川西部農業水利事業所と兵庫県教育委員会・加西市教育委員会の三者によって協議が行われ、急を要することから、確認調査は近畿農政局加古川西部農業水利事業所の直接執行とすることになった。そして、兵庫県教育委員会と加西市教育委員会から各々1名調査員を出して調査を実施することになった。調査は、昭和62年10月19日～22日の4日間実施された。

しかしながら、未買収地などの未解決部分が残っていたことから、工事予定地全域の調査が終了したわけではなく、その後伐採の進捗状況に合わせて補足の確認調査が行われている。補足の確認調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課主査池田正男を担当者として行われた。

2度の確認調査の結果、A～F地区的6地点の要調査必要地点が挙げられ、調査範囲・方法・日数などについてもほぼ確定した数値を得ることが出来た。



第2図 確認調査風景

調査の組織

調査は近畿農政局加古川西部農業水利事業所の直接執行とし、調査員を兵庫県教育委員会・加西市教育委員会から派遣して実施した。

(調査担当)

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 技術職員 嶋田 淳
加西市教育委員会 社会教育課 主 事 永井信弘

3. 全面調査の経過

当初、全面調査は確認調査終了後、すみやかに年度内に着手する予定であったが、調査期間・

経費などの点から次年度に送られることとなった。

その後、数度にわたって協議が行われ、確実な窯跡である戸井町坪2～5号窯の存在するB地区・C地区については予定地端部であることから、現状保存が可能であることから、工事対象外として保存されることとなった。確実な須恵器窯跡は、戸井町坪1号窯だけとなり、他の3地点(D・E・F地区)では須恵器生産に係わる工房跡の可能性が考えられたが、窯跡である3地区と比べると調査量は寡少である。

調査は上半期に予定されていたが、種々の問題が生じたことなどから、何度も遅れ、実際に着手したのは年度末に近い平成1年3月7日からである。3月31日までの23日間を調査に費やした。年度末であることから、土曜日・祝日も調査を余儀無くされた。幸い天候は味方し、暖冬であったことも調査をスムーズに進める上では幸いした。

調査は国庫補助事業でもあることから、調査区を分けている。A・D・Eの3地区は農林水産省費用分で、F地区は文部省費用分である。

調査の組織

農林水産省負担分については、近畿農政局加古川西部農業水利事業所の委託を受けて兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。

調査事務　　社会教育・文化財課

課長　　中根 孝司

文化財担当参事　　日野 和広

副課長　　高坂 隆

課長補佐 兼
埋蔵文化財調査係長　　大村 敬通

管理係長　　山口 幸作

調査担当

主任　　渡辺 昇

技術職員　　村上 泰樹

作業委託　　㈱菱重興産高砂営業所

現場代理人　　藤田 敏彦



第3図 調査風景

国庫補助事業調査参加者

浜田省三・池田哲也・常峰克洋・竹本茂貴・金鹿一茂・藤沢慶一

藤田美紀・森井信江・永井弘子・森 洋子・大寺由美

調査日誌抄

1989年3月1日(水)～3日(金)

調査対象地ならびに排土置き場周辺伐採作業を行う。

3月6日(月)～10日(金)

伐採木など片づけ作業。D地区から始める。調査区を縄張りし、地形測量を行う。7日から人力掘削開始する。焼土壙1基確認する。全景写真とともに遺構写真撮影する。調査区南壁土層断面実測。E・F地区も縄張りし、人力掘削開始する。A地区内の杉・檜伐木する。

3月13日(月)～18日(土)

A地区 伐採木片づけ、調査前の状況の撮影。地形測量を行ったのち、縄張りし掘り下げ開始する。窯体ほぼ位置確認する。北側に土壙2基検出。灰原は地形に即して北側に流れるよう広がっている。窯体主軸延長上に写真用足場設置する。

D地区 遺構平面図ならびに遺構面の地形測量実施する。

E地区 大型の焼土壙検出し、灰原状に炭・焼土含む層が下方に存在する。アゼを設定して掘り下げる。灰層は薄く、土器も僅かしか含まない。窯跡と思われた遺構は火葬墓ではないかと考えられる。アゼ及び南壁土層図作成。全景写真撮影する。

F地区 遺構面まで下げる作業を行い、一部遺構面清掃する。

3月20日(月)～25日(土)

A地区 窯跡検出状況を写真撮影する。窯体主軸に綫断のアゼを設定し、横断のアゼも5本設定する。窯体を6区に前庭部を2区に灰原を4区に分けて調査を行う。全体的に掘り下げる。灰原は大きく3層に分けられる。当初予想した時期より新しい糸切り底の楕数点出土する。窯壁は比較的軟質である。

E地区 火葬墓は群集する可能性があるので、東側に調査区拡張する。遺構面清掃するが、遺構確認されなかった。

F地区 土壙確認する。十字にアゼを残して掘り下げる。E地区で確認した土壙と同種の遺構と思われる。2基確認する。全体図作成。全景写真撮影。

24日にアドバルーンによる空中写真撮影する。垂直と斜め方向から撮影する。

3月27日(月)～31日(金)

A地区 窯跡掘り下げ継続。アゼ実測・撮影後、順に除去していく。全体に清掃し、写真撮影。窯体内遺物出土状態も実測。窯跡断ち割りを行う。窯体焚口部付近は3面の床が認められる。断ち割り後断面撮影。



第4図 調査風景

戸井町坪1号窯(A地区)南側からも須恵器が採集されることから、南側にもトレンチを設定し、確認調査を行う。その結果、窯体状の造構を確認したので、調査区南側に拡張し、A II区とする。窯跡と想定したが、調査の結果炭窯と思われる。撮影後、実測も行う。

全体に後片づけを行い、器材魚住分館へ搬出し、調査終了する。

4. 整理作業の経過

一部戸井町坪窯跡群の発掘調査事務所で実施したが、本格的には平成元年度に行った。水洗い・ネーミング作業は主に魚住分館で、後合作業から報告書刊行に至る作業を兵庫県埋蔵文化財調査事務所において実施した。8月の約1ヶ月を魚住分館で前記の作業を行ったのち、9月5日から兵庫県埋蔵文化財調査事務所で作業を引き継いだ。魚住分館では兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所主査岡崎正雄の、兵庫県埋蔵文化財調査事務所では同主査吉識雅仁の指導のもとに下記嘱託員が担当した。

調査事務 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

所長 大江 剛

副所長 兼 調査第二課長 村上絃揚

整理普及課長 松下 勝

総務課長 小池英隆

調査担当

主任 渡辺 界

技術職員 村上泰樹

嘱託員

(魚住分館)

西原美知代・光澤鈴子・米澤礼子

伊藤ミネ子・衣笠雅美・川上啓子

長谷川洋子

(兵庫県埋蔵文化財調査事務所)

石澤真理子・伴 悅子・八木和子



第5図 整理作業風景

II. 位置と環境

戸井町坪1号窯は、加西市倉谷町字戸井町坪に所在する須恵器窯跡である。南側に位置する大将ヶ峰山は加西市と加古川市を分ける市境であるが、大きな障害にはなっていない。遺跡(須恵器窯跡)を中心に見た場合、大将ヶ峰山南側の加古川市域の西ノ池窯跡群や南北方向に位置する札馬窯跡群などと有機的に強く結び付いている遺跡と考えられる。

現時点では、戸井町坪窯跡群は5基で構成されている。西ノ池窯跡群をはじめとする野尻周辺で20基、札馬窯跡群で65基以上と戸井町坪1号窯周辺は一大窯業地帯である。窯業地帯を総称して志方窯跡群や中播(磨)窯跡群などと呼ばれている。時期は、奈良時代を中心とする窯跡群である。その1支群と考えられるものである。

戸井町坪1号窯の位置する加西市は、播磨中央部にあたり盆地状の地形を呈している。市域は、加古川の支流である普光寺川・万願寺川・下里川によって形成された盆地である。河岸段丘も発達しているものの、比較的平坦な水田地帯である。ただ、瀬戸内海式気候であることから降雨量が少なく、盆地内には溜池が目立っている。周辺の山塊は、北側がやや急峻であるが、市川町・八千代町・西脇市への道が峰越えで延びている。他の方向は160~270mの山並みが続いている。東側は青野ヶ原台地が小野市域へと広がっている。四方をこれら山塊・丘陵によつて各々境界とし、市域を画している。ただ、中国縦貫自動車道が通過している東西方向はほとんど起伏がなく、谷を開いているようである。盆地周辺の各市町へと道が延びている交通の便利の良い所である。盆地地形であるが、文化を途絶し、特殊な文化を持つのではなく、周辺との繋がりは深く、周辺市町と有機的に関連している。戸井町坪1号窯の大まかな位置は、東経134°51'10"、北緯34°51'20"である。

盆地とはいうものの、高い山塊に囲まれた隔絶した地域というのではなく、むしろ周辺との関係が深く歴史的にも単独では考えられない。特に、古墳時代の玉丘古墳群の築造までは周辺と同一の視野が必要である。

旧石器時代の遺跡は、当地域が早くから分布調査が行われていたことから、遺跡の稠密



第6図 玉丘古墳



- | | | | |
|------------|-------------------|------------|-------------|
| 1. 戸井町坪窯跡群 | 2. 有舌尖頭器出土地(大池遺跡) | 3. 烧野古墳 | 4. 後森山古墳 |
| 5. 倉谷石仏・石棺 | 6. 三口・中倉遺跡 | 7. 三口・稻所遺跡 | 8. 三口・市場遺跡 |
| 9. 西笠原遺跡 | 10. 西笠原古墳群 | 11. 大谷窯跡 | 12. カワラケ谷遺跡 |
| 13. 上の池遺跡 | 14. 新池北窯跡 | 15. 中津倉窯跡群 | 16. 札馬窯跡群 |

第7図 戸井町坪1号窯の位置と周辺の遺跡

地帯として期待されていた。しかし、発掘調査では成果を挙げられず、表面採集資料が知られるだけである。それでも30個所以上の遺跡が確認され、兵庫県の旧石器時代の遺跡の高率を占めている。大半は溜池から採集されている。近くでは、南方の七ツ池から国府型のナイフ形石器や削器などが出土している。



第8図 後藤山古墳

加西市内では、玉丘古墳群内の逆池からナイフ形石器11点をはじめ翼状剥片や削器・チョッピング・トゥールが採集されている。北側に立地する善坊池からは、ナイフ形石器・削器が採集されている。次の縄文時代早創期では、戸井町坪1号窓の西側の倉谷大池（駒ヶ池）からは、木葉形の尖頭器が出土している。同じく尖頭器が南側の七ツ池からも出土している。前記の逆池からは縄文時代の石器も出土しており、満久遺跡でも石器などが出土している。しかし、縄文土器はほとんど確認されていない。小谷遺跡で晩期の突堤土器が出ている程度である。当然、縄文時代の遺構は検出されていない。今後、採集された石器があることから、遺跡は近い将来確認されるものと思われる。

弥生時代の遺跡も確認されている遺跡は少数である。最近まで早くから知られていた女鹿山遺跡・西笠原遺跡など数個所の後期の遺跡が挙げられるだけであった。だが、隣接する市町では、加古川市は当然のことすべての地域で弥生時代の遺構が検出されていることから、加西市内においても遺跡が確認されるものと思われた。最近の圃場整備に伴う調査で遺跡が確認されつつある。前期の遺跡は未確認である。市内の弥生時代の在り方は、今後の調査に委ねられるものである。

古墳時代になると、前代とは異なって『玉丘古墳群』で代表されるように多数の古墳が見られるようになる。最初に集落跡から見てみると、中国自動車道に伴って調査された北条町の小谷遺跡で前期からの住居跡が検出されている。古式須恵器もあり、陶邑からの搬入品である。殿原町には尾根上に築かれた殿原辻井遺跡があり、越水町には殿原辻井遺跡と同じ立地の満久遺跡が確認されている。年々さらに遺跡は増加している。

古墳発生を考える上に貴重な資料として、周遍寺山1号墳（墓）がある。県下で唯一の四隅突出墳の可能性がある墳墓である。

前期古墳は、上野町の早塚古墳がある。径16mの円墳で竪穴式石室を主体部とし、鏡・刀剣・玉類・土師器が出土している。ただ、



第9図 倉谷石仏・石棺



第10図 殿原庵寺金堂礎石

一部では時期が下るのではないかとも考えられている。中期になると、玉丘古墳で代表されるように多数の古墳が築造される。玉丘古墳は全長105mの前方後円墳で3段築成の周濠を有する典型的な前方後円墳である。主体部には流紋岩質凝灰岩製の長持形石棺を保有している。石棺蓋石には格子状の文様が彫りこまれている。盗掘によるものなので、主体

部の構造は明らかでないが、石材が少ないことから石棺直葬かと考えられている。2基の陪塚も遺存している。玉丘古墳を盟主墳として前方後円墳3基、大型円墳5基から成る玉丘古墳群を形成している。短甲・肩庇付舟・鏡などを出土した龜山古墳や多数の鉄器を出土した北山古墳や帆立貝式のカンヌ塚古墳などから構成されている。針間鶴国造の奥津城と考えられ、玉丘古墳は『播磨國風土記』記載の針間鶴国造許麻の娘根日女の墓と伝えられている。玉丘古墳群の西方の山伏峰には長持形石棺の蓋石が石棺仏に転用されており、他にも中期古墳の存在が予測される。

後期になるとほぼ市域全域に古墳は築造されるようになる。戸井町坪1号窯に近いところでは北東方向の後藤山に後半の横穴式石室を主体部とする円墳が築かれている。大型石室で、特殊な家型石棺を持っている。石室から出されているが、当墳のものと考えられる。四柱式でくり抜きの特殊なタイプのものである。終末期に近いものであろう。特殊な古墳として剣坂町に石棚のある剣坂1号墳や西横田町所在の石櫃戸古墳がある。石櫃戸古墳は、終末期の古墳で石材を縦積みにしており、1枚の切石の板石で構築している。

歴史時代には、早い段階で寺院が建立されている。玉丘古墳群の時代同様優勢勢力が存在していたものと思われる。加古川市の日岡古墳群から寺院へと繋がるのと似通っている。繁昌庵寺・殿原庵寺・吸谷庵寺の3ヶ寺が築かれている。白鳳時代からと早くに構築されている。繁昌庵寺は当初四天王寺式と考えられていたが、調査の結果塔は1基しかないが、薬師寺式の伽藍配置を探っていることが判明した。

須恵器窯跡は数個所で確認されている。古墳時代の窯跡は河内町や野上町・越水町で数基確認されている。また、奈良時代の窯は倉谷町に近い南部の谷部に築窯されている。しかし、加西市よりも加古川市志方町との関連が深いものと思われる。

III. 確認調査の結果

1. 確認調査の方法

確認調査は昭和62年10月19日～同年10月22日に実施した。調査は第11図に示すように、事業地内の山裾および山腹に幅1mのトレーニングを設定し、バックホウにより表土をめくるように進めていった。灰原や窯体が確認された場合には直ちに手掘りによる精査を行い、必要に応じて新たにトレーニングを設け、窯体の数と規模、灰原の広がりの把握に努めた。

この結果、A～Fの6地点で5基の窯跡と焼土、炭化物を埋土とする土壤を確認することができた。A地点では1基の窯跡（1号窯）と土壌を確認した。B地点とC地点ではそれぞれ2基の窯跡（2～5号窯）を確認した。D地点～F地点ではそれぞれ焼土や炭化物を埋土とする土壤を検出した。D地点・E地点は当初、その立地から窯跡に伴う灰原ではないかと考えられたが、遺物がほとんど含まれておらず、窯体も確認できなかったことから窯跡ではないと判断した。

既述のように戸井町坪1号窯を含むA地点および、D地点～F地点は全面調査が実施されたが、B地点とC地点は現状保存されることとなった。

以下では、B地点の戸井町坪2号窯・3号窯と、C地点の戸井町坪4号窯・5号窯の概要と出土遺物について述べる。

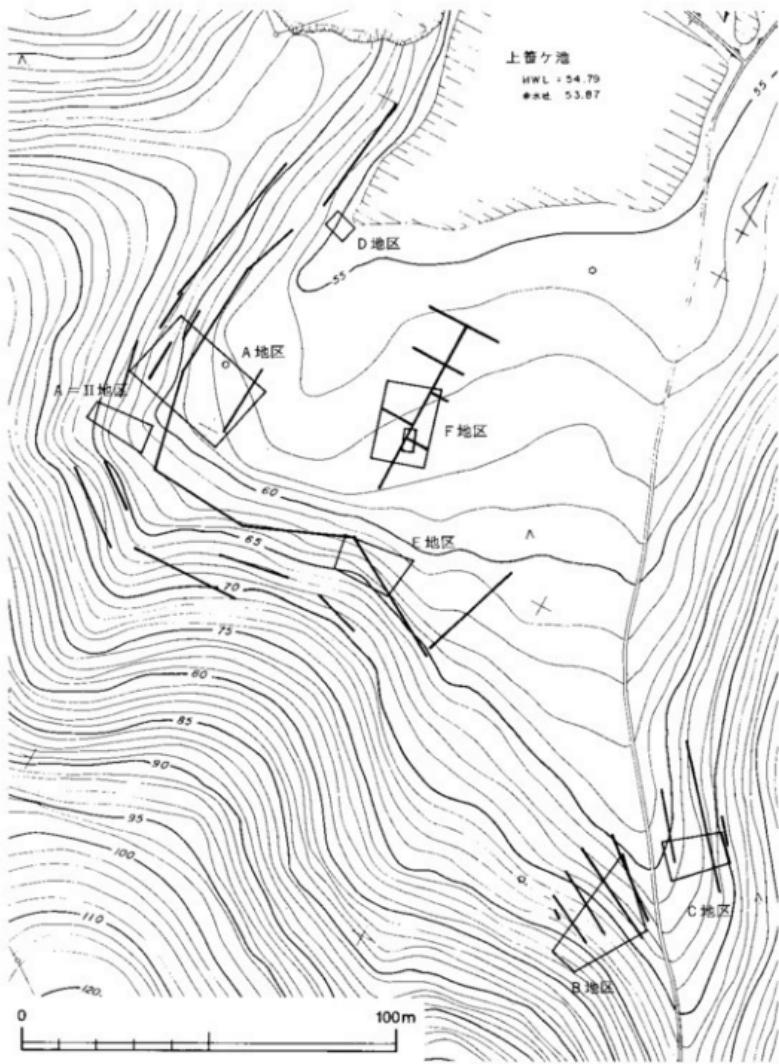
2. 戸井町坪2号窯・3号窯

戸井町坪2号窯・3号窯は谷の奥部の北向きの斜面に横に並んで構築されている。窯の標高はおよそ69.5m～71.5mである。斜面の傾斜は約20°をはかる。斜面に向かって右側の窯を2号窯、左側を3号窯と呼ぶ。いずれも表土を剥いですぐに焼成された窯の輪郭を確認した。2号窯は全長約6m、幅約2mをはかる。トレーニングは、ちょうど焚口付近にあたり、黒色の炭化層がみられた。焚口付近の側壁は良く焼成されており、その輪郭は明瞭に識別できた。

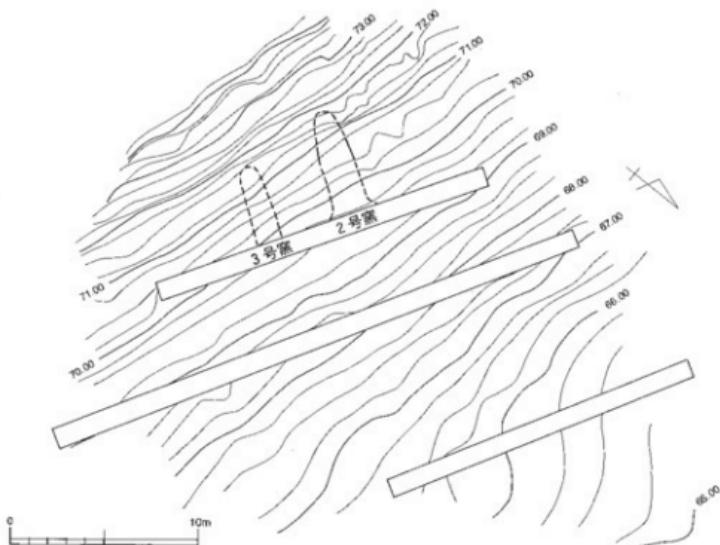
3号窯は2号窯から約3m離れており、全長約4m以上、幅約1.2mをはかる。2号窯よりもやや、規模が小さいようである。

3. 戸井町坪4号窯・5号窯

戸井町坪4号窯・5号窯は谷の奥部の南向きの斜面に横に並んで構築されている。2号窯・3号窯とはほぼ向かい合う位置にある。窯の標高はおよそ66.0m～69.0mで、斜面の傾斜は約22°



第11図 確認調査トレンチ配置図



第12図 2・3号窯 地形測量図

をはかる。傾斜は焚口下方で急に緩やかとなり、傾斜の変換点付近に焚口を設けていることがわかる。斜面に向かって右側の窯を4号窯、左側を5号窯と呼ぶ。いずれも表土を剥いで若干掘り下げたところで焼成された窯の側壁の輪郭を確認した。

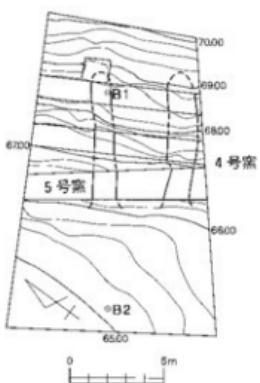
4号窯は全長約7m、幅約1.6mをはかる。焚口付近にあたったトレーニチでは、黒色の炭化層がみられた。焚口付近の側壁は良く焼成されており、その輪郭は明瞭に識別できた。

5号窯は4号窯から約3m離れており、全長約7m以上、幅約1mを測る。

4. 出土遺物

戸井町坪2～5号窯の調査目的は、窯の確認調査であって、灰原と窯体の上面を検出した段階で止め、灰原と窯体内はまったく掘削を行っていない。このため、当窯で製作された遺物の全容を把握できたものではない。また、図化が可能であった資料は表面採集資料が大半を占めるため、多少の遺物の混亂が生じている可能性があることをことわっておきたい。

調査で得られた遺物には、須恵器では蓋、环、椀、小皿、片口鉢などがある。瓦は4号窯・5号窯からのみ出土しており、2号窯・3号窯には認められない。これ以外に、土師器の鍋が出土している。須恵器・土師器については第1表に遺物観察表を付している。



第13図 4・5号窯 地形測量図

第14図は2号窯周辺から出土した遺物である。遺物には須恵器の蓋、壺、小皿、椀がある。1～3は灰原から出土したものであるが、4～6は出土位置が不明確なものである。

1は須恵器の蓋であるが、焼き歪みが認められる。天井部は低く、口縁部との間に段を生じている。つまみ部は欠損しており、有無は確認できない。

2・3は須恵器の壺である。平底無高台のもの(2)と有高台のもの(3)の両者がある。底部はいずれも回転ヘラ切りされている。

4は須恵器の小皿である。底部は回転糸切りである。

5・6は須恵器の椀である。平高台を有し、底部は回転

糸切りされている。また、底部内面には凹みが明瞭に認められる。

第16図は4号窯・5号窯周辺からの出土資料および表面採集資料である。遺物には須恵器の壺、小皿、椀、片口鉢および土師器の鍋がある。これらのうち、9が窯体から、18・20が窯体上面から出土した以外は、すべて表面採集資料である。

7・8は須恵器の壺である。7は平底無高台で、底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整されている。

9は須恵器の小皿である。底部は回転糸切りされている。

10～18は須恵器の椀である。底部から口縁部までがそろっている資料はないが、体部は内湾気味に上外方へのび、口縁部で直立気味に立ち上がるものの(10～12)と、口縁部がやや外向きにのびるもの(13)が認められる。底部はいずれも低い平高台で、回転糸切りされており、内面には凹部をもつ。

19は須恵器の片口鉢である。体部は内湾しながら上外方にのび、頸部は「く」字状に屈曲する。

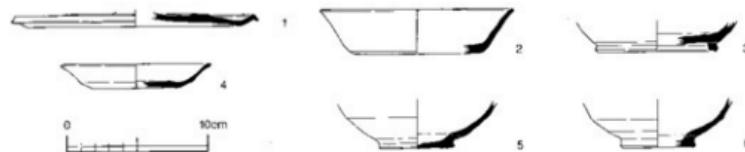
20は土師器の鍋である。先述のように窯体の上面から出土したものである。体部には縱方向の平行タタキが施されている。

第18図には2号窯～5号窯周辺において表面採集された須恵器を示す。

須恵器の蓋、壺、椀以外では壺(31～36)が認められる。

第19図・第20図には4号窯・5号窯周辺で検出された瓦を示す。これらは大部分が表面採集資料である。瓦はほとんどが平瓦で丸瓦は極めて少ない。

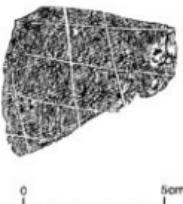
第19図1は玉縁式丸瓦である。破片資料であるため法量は計測可能な部分が少ないと、玉縁



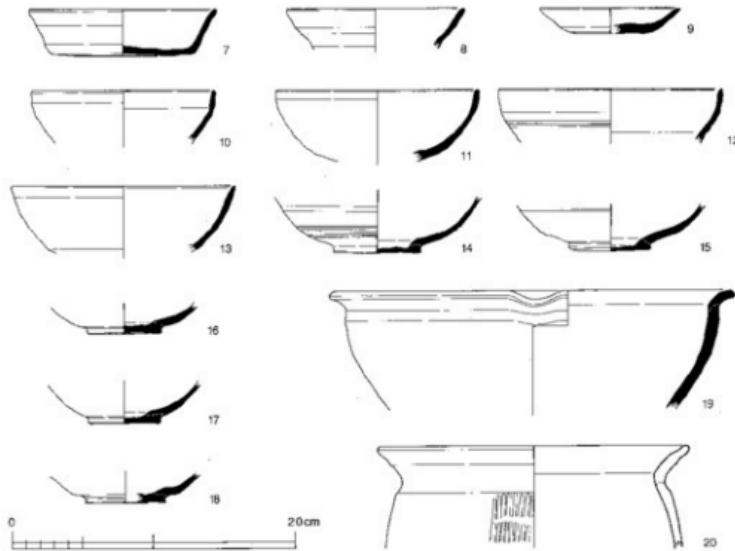
第14図 2号窯 出土土器

長4.7cm、筒部径9.2cm、厚さ2.2cmを測る。後述の平瓦に比べ焼成は良好であり、青灰色を呈する。凹面は筒部から玉縁部に連続して布目压痕を残す。凸面にはナデ調整が施され、叩き目が磨り消されている。筒部の側面はヘラ削りされているが面取りは残存している範囲では認められない。

第19図2～第20図6は平瓦である。完形の資料は存在しないが、側面と端面がほぼ直交することから、平面形は長方形に近い形態をとるものと推定される。法量は完形に近



第15図 ヘラ記号 拓本



第16図 4・5号窯 出土土器

い2では、全長31.8cm、幅22.8cm、厚さ1.3cmを測る。焼成は悪く、黄灰色を呈するものが多い。凹面は3のように布目压模を残すものもあるが、ほとんどの資料では繩目叩きが施されている。凸面には凹面と同様の繩目叩きが施されているが部分的にナテ調整により叩き目が磨り消されている。側面と端面はヘラ削りによって整形され、凸面側、凹面側、凹凸両面を面取りするものが多い。ただし、面取りは必ずしもその面の全面にわたっては行われていない。

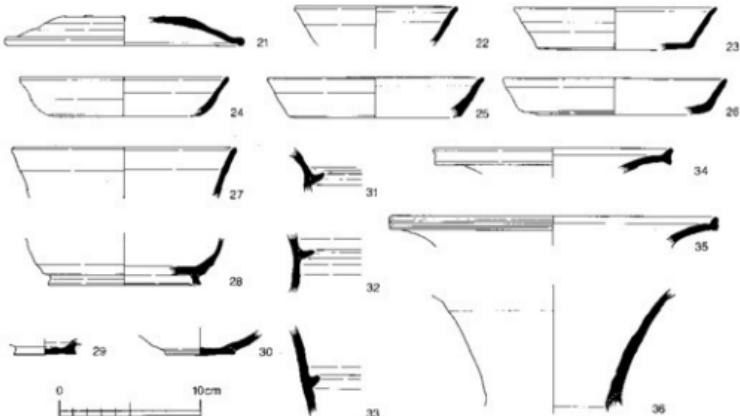
以上、2号窯～5号窯の遺物を概観してきた。戸井町坪古窯址群に近接する古窯址としては札馬古窯跡群がある。報告書¹¹⁾では、I期～III期に編年されているが、4号窯・5号窯の遺物の主体を占める椀については、札馬III期に比定されるものであろう。また、2号窯にみられる坏は札馬II期に比定されるものと考えられる。4号窯・5号窯の瓦についても類例があまり知られていないものの、製作技法からみてほぼ11世紀ごろのものと思われる¹²⁾。これは須恵器から想定した時期と大きくは矛盾しない。

注1) 加古川市教育委員会 1982年『札馬古窯跡群発掘調査報告書』

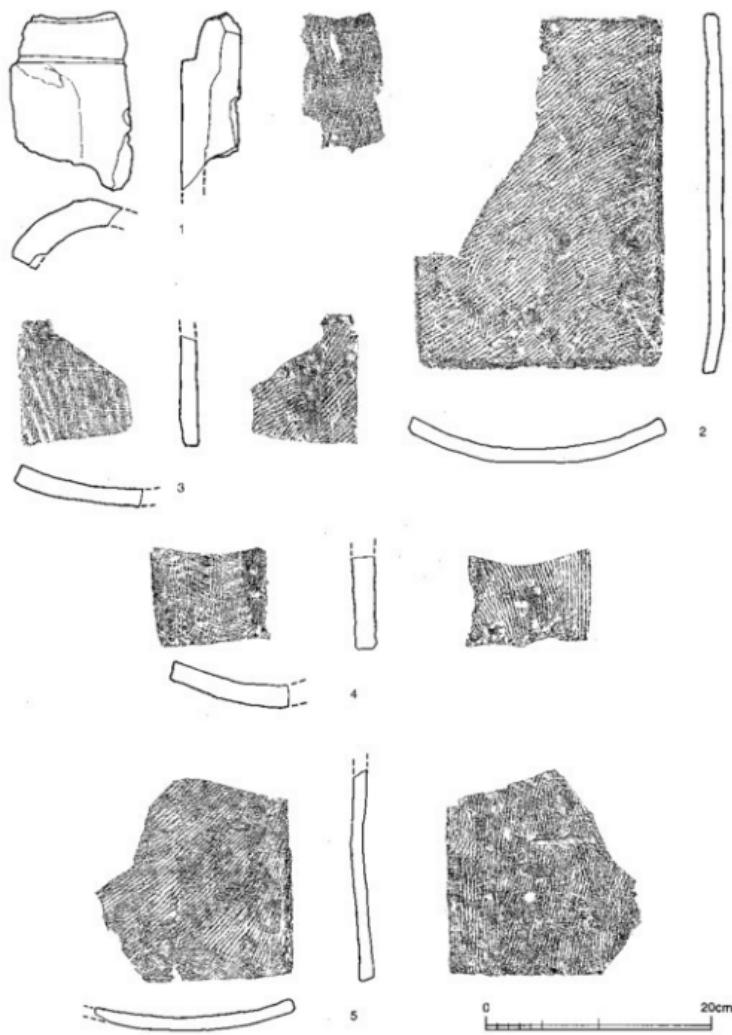
注2) 京都大学文学部博物館助手菱田折郎氏の御教示による。



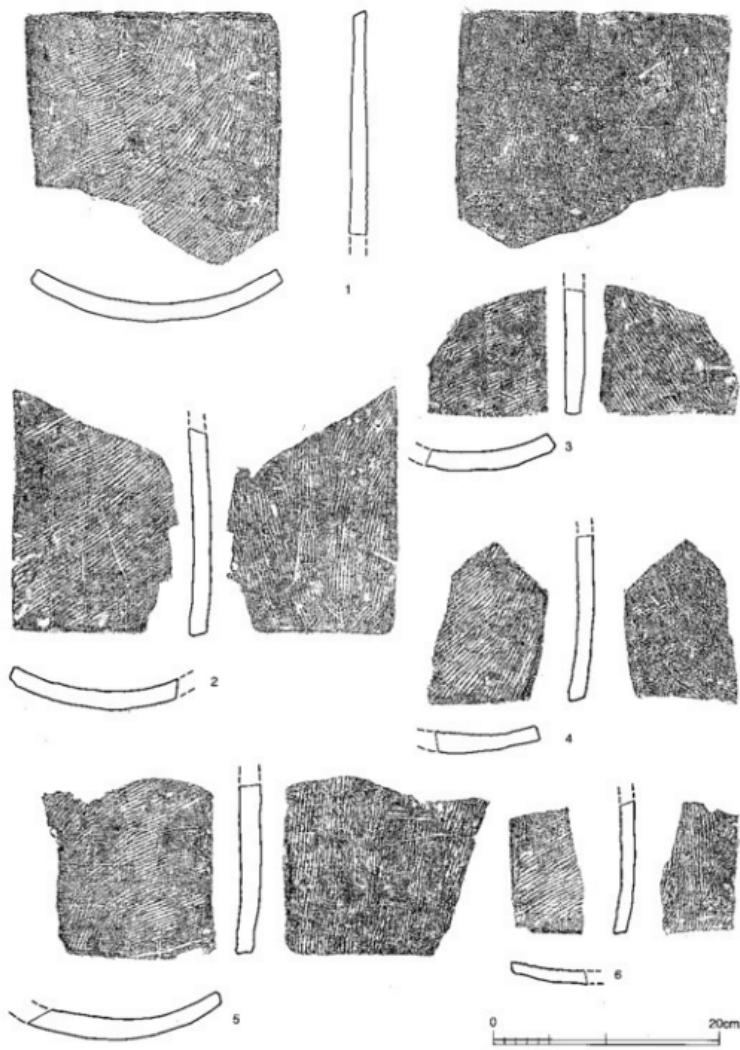
第17図 2～5号窯 瓦切痕拓本



第18図 2～5号窯 出土土器



第19図 4・5号窯 出土瓦(1)



第20圖 4・5号墓 出土瓦(2)

第1表 戸井町坪2～5号窯出土土器觀察表

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口徑	器高			
1	蓋	(17.6)	(1.0)	天井部平らで低く、口縁部との間に段を生ず。口縁端部は外側に屈曲せん。	天井部回転ヘラ切り。その他は回転ナナ調整。	内面へラ記号「ハ」あり。焼み込みあり。つまみの有無不明。
2	杯	(13.6)	(3.2)	体部まっすぐに外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り。	
3	杯 (底部)	底径 (8.2)	(2.1)	底部平らで中央やや開き、底端部に「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの後ナナ調整。	
4	小皿	(10.3)	1.75	体部低く外上方へのび、口縁端部外反し丸くおさめる。いわゆるベタ高台で唇部は薄い。	回転ナナ調整。底部回転糸切り。	外面灰かぶり、一部自然釉。
5	碗	底径 5.4	(3.35)	体部内側しながら外上方へのびる。底部内面には凹部をもつ。平高台。	回転ナナ調整。底部内面仕上げナナ、外削回転糸切り、高台側面未調整。	
6	碗	底径 (5.0)	(3.5)	体部内側気味に外上方へのび。底部内面には明瞭な凹部をもつ。平高台。	回転ナナ調整。底部回転糸切り、高台側面ナナ調整。	外面ひだすき板。
7	杯	(13.1)	3.4	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切りの後ナナ調整。	内面ひだすき板。
8	杯	(12.6)	(2.9)	体部外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナナ調整。体部下半強いナナ調整。	内外面灰かぶり。
9	小皿	(9.9)	1.9	体部低く外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部いわゆるベタ高台。	回転ナナ調整。底部回転糸切り。	
10	碗	(12.8)	(3.8)	体部外上方にのび、口縁部で直立気味に丸くおさめる。	回転ナナ調整。	
11	碗	(14.2)	(5.15)	体部内側しながら外上方に立ちあがり、口縁端部丸くおさめる。	回転ナナ調整。	内面ひだすき板。
12	碗	(15.8)	(3.9)	体部外上方へのび、口縁部で上方に立ち上がり、底部はやや尖り気味におさめる。体部に2条の沈線道る。	回転ナナ調整。	
13	碗	(15.8)	(4.8)	体部内側気味に外上方へのび口縁端部や外向きに尖り気味におさめる。	回転ナナ調整。	
14	碗	底径 (6.3)	(4.1)	体部内側しながら外上方へのび、底部内面には凹部をもつ。体部下半には5条の沈線道る。	回転ナナ調整。底部回転糸切り、高台側面ナナ調整。	

法量の()は復原径・残存高

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
15	椀	底径 5.9	(3.4)	体部ゆるやかに内側しながら外上方へのび、底部内面には凹部をもつ。平高台。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台侧面未調整。	
16	椀	底径 (5.3)	(2.3)	底部内面には凹部をもつ。底部平高台。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台侧面ナデ調整。	外面灰かぶり。 焼き垂みあり。
17	椀	底径 (5.2)	(3.0)	底部内面には浅い凹部をもつ。底部平高台。	回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ、外側回転糸切り、高台侧面未調整。	
18	椀	底径 (5.8)	(2.1)	底部内面浅い凹部をもつ。底部平高台。	回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ、外側回転糸切り、高台侧面未調整。	
19	片口鉢	(28.3)	(8.5)	体部内側しながら外上方へのび、頸部は「く」の字状に開曲する。口縁端部は平坦。	回転ナデ調整。	
20	土師鍋	(21.8)	(7.35)	体部ゆるやかに内傾しながらのび、「く」の字状の頸部をもつ。口縁端部丸くおさめる。	ヨコナデ調整。体部タキ。	
21	蓋	(16.5)	(2.1)	天井部なだらかに口縁にむかって下り、口縁端部丸く折りこむ。	天井部回転ヘラケズリ、その他回転ナデ調整。	口縁外面に自然釉、重ね焼き痕。
22	杯	(11.2)	(2.8)	体部外上方へのび口縁端部や外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	外面自然釉、重ね焼き痕。
23	杯	(14.2)	(3.05)	体部外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。口縁部強いナデ。	
24	杯	(14.7)	(2.8)	体部外上方へのび、口縁端部外向きにやや失り気味におさめる。器壁やや厚い。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りか。	外面ひだすき痕。
25	杯	(15.2)	(2.9)	体部まっすぐ外上方へのび口縁端部外向きに失りながらおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	ひだすき痕。
26	杯	(15.6)	(2.6)	体部短く外上方へのび口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後不定方向のナデ調整。	ひだすき痕。
27	杯	(15.8)	(3.65)	体部はまっすぐ外上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
28	杯	底径 (10.9)	(3.45)	体部内側気味に外上方へのび、底端部に「ハ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。高台は不明。高台貼り付けの後ナデ調整。	外面自然釉。
29	椀	底径 (4.3)	(1.1)	平高台。底部内面に凹部をもつ。	底部内面仕上げナデ、外側回転ヘラ切りのあとナデ、高台侧面ナデ調整。	

No.	器種	法 量(cm)		形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高			
30	椀	底径 (4.45)	(1.8)	平高台。器壁はやや厚い。	回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ、外唇回転条切り、高台側面未調整。	
31	突唇 (壺)	—	—	突唇をもち、体部はその上で内側しながら内上方へのびる。	回転ナデ調整。突唇は貼り付けナデしている。	内外面灰かぶり。
32	突唇 (壺)	—	—	わずかに内側した胴部に突唇を這らす。突唇は器壁を裏めに丸くおさめる。	回転ナデ調整。突唇は貼り付け、ナデしている。	やや灰かぶり。
33	突唇 (壺)	—	—	体部やや内上方にまっすぐのび、突唇を這らす。突唇端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。突唇は貼り付けナデ調整。	外面自然釉。
34	壺	(16.6)	(1.8)	頸部低く外反し、口縁端部上に丸く、下は尖り気味に引き出す。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。
35	壺	(22.9)	(2.25)	頸部外反し、口縁端部を上方へ丸く厚めに引きあげる。壺面に2条の沈線あり。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり、自然釉。
36	壺	—	(8.7)	頸部つけ根から口縁にかけて「ハ」の字型に窪く。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり、一部自然釉。 外面自然釉。

IV. 戸井町坪1号窯の調査

1. 位置

大将ヶ峰山から周辺寺山にかけての主尾根から北へ派生する支尾根が幾つか見られる。南側に比べて北側の方が支尾根が長く延び、谷が深くなっている。また、地形的にも南側の方が比較的急峻な地形を示しているのに対して、北側は谷に向かって比較的緩やかな傾斜を示している。その北側の谷に向かった緩傾斜面に戸井町坪1号窯は位置している。

周辺の窯跡の立地条件と共通する立地を選んでいる。谷部の入り口には上笹ヶ池・下笹ヶ池の溜池が存在する。灌漑用として一帯で多く見られる溜池であるが、窯跡との関係も当然考えられるものである。

両笹ヶ池から南へ谷が延び、さらに南西へ続く小さな谷と南南東へ続くやや大きな谷に分岐する。その分岐点の西側の斜面に占地している。谷底から緩やかに上がり、やや急な斜面となって尾根上方へと続いている。そのやや急斜面となった地形変換点より上の部分に位置している。地形変換線上に里道があり、窯体と灰原を区分していた。窯体部分の斜度は約19°である。

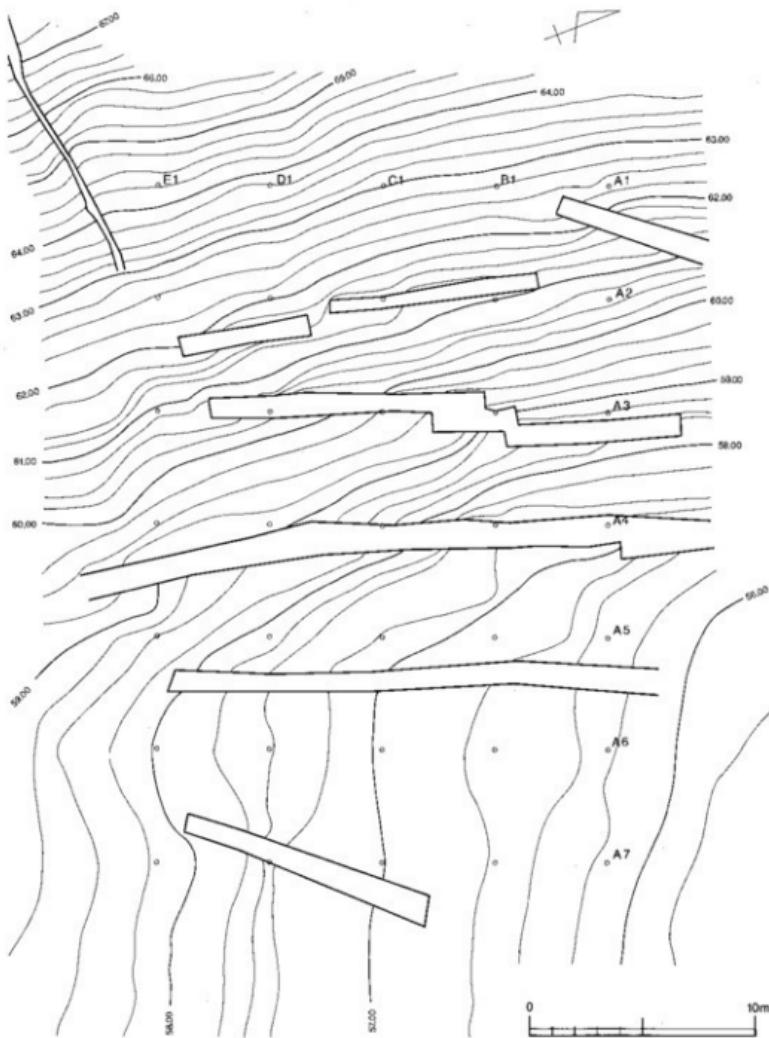
戸井町坪1号窯からの眺望範囲は狭く、北側が開けているだけである。立地は斜面であることから、遠景は望めない。千ノ沢の集落とさらに北方の田原町が望める程度である。

2. 遺構

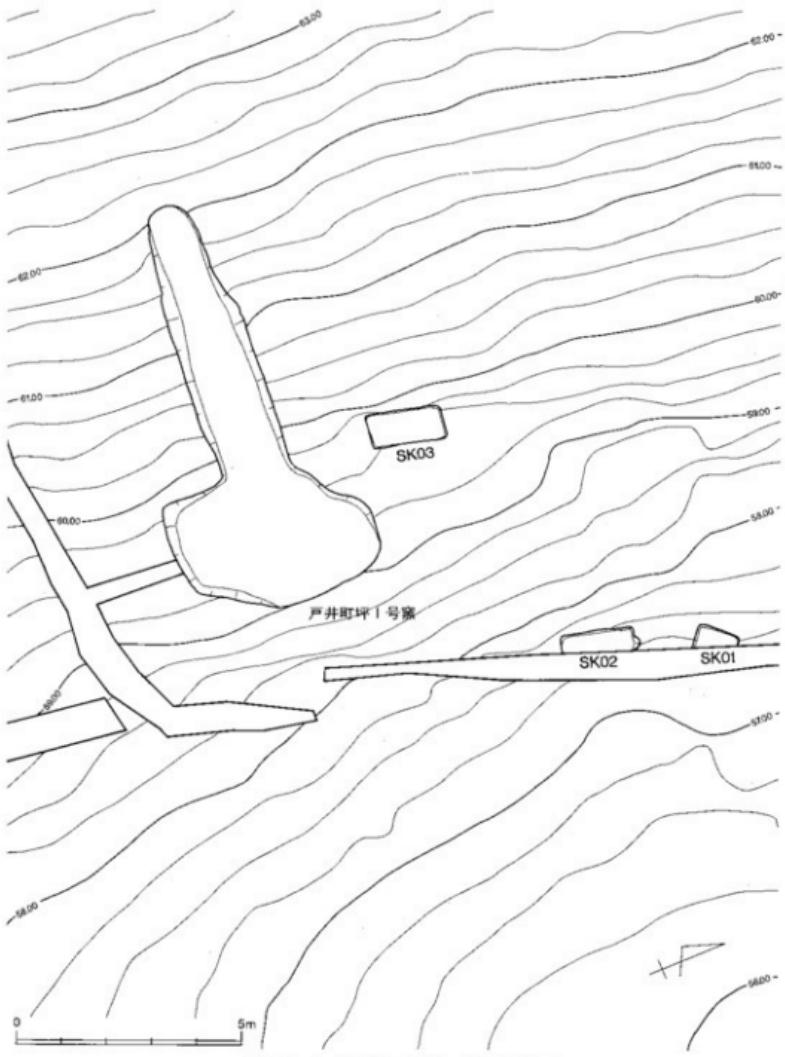
調査手段階（前）においては、灰原は想定出来たが、窯体については東向きの斜面であることしか判らなかった。また、地形も窯跡を示す痕跡は残していなかった。調査を実施しても明瞭な外部施設は検出されなかった。南側に開墾時の溝が確認され、調査前の地形測量の結果でも窯に伴う溝と重複している可能性も考えられた。しかし、窯体に伴う排水溝の役目をしているものなら、北側にも存在するはずであるが検出されなかつたことから、顕著な溝は有していないかったものと思われる。後世の改変もあるが、調査段階には外部施設は検出されなかつた。

窯跡の残存状況は普遍的な状況であった。天井部は残っていないが、床面はほぼ完存していた。前部なども、開墾によって一部削平を受けているものの、旧状を復原できる程度である。

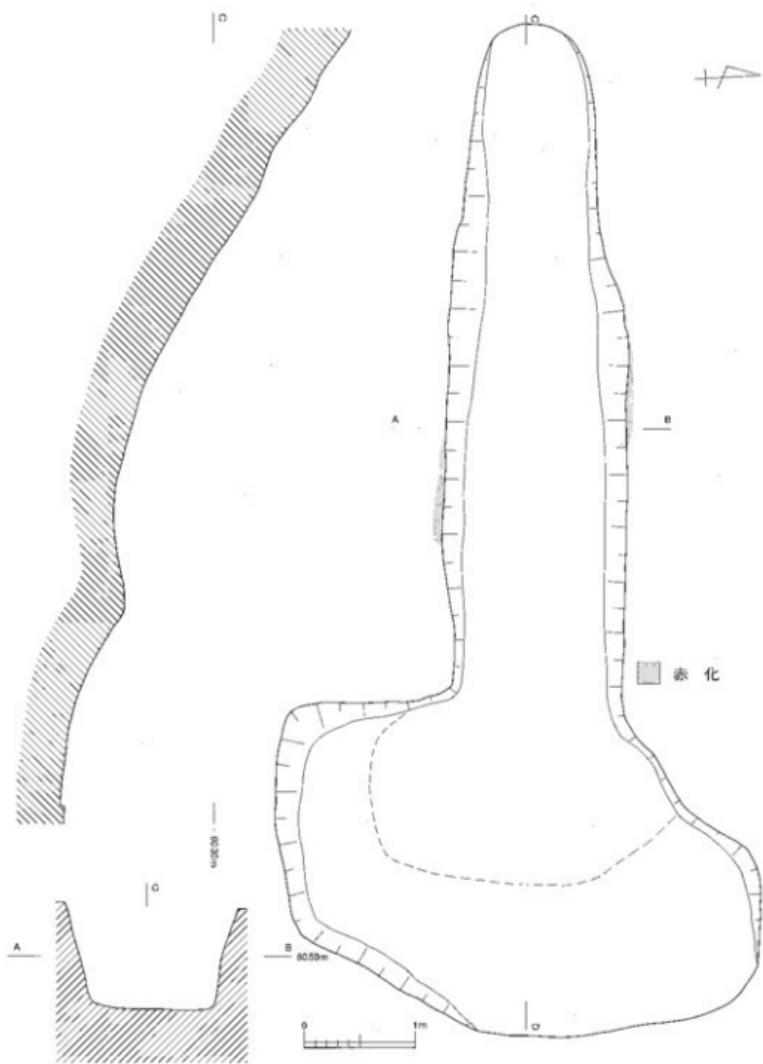
窯は、2時期にわたって操業している。その間が150年以上間隔をおいている。これが、戸井町坪1号窯の大きな特徴である。古段階の窯は、保存状態が良好とは言えない。床面も完全に残っておらず、部分的に新段階の窯によって損壊を受けている。床面に密着した土器も認めら



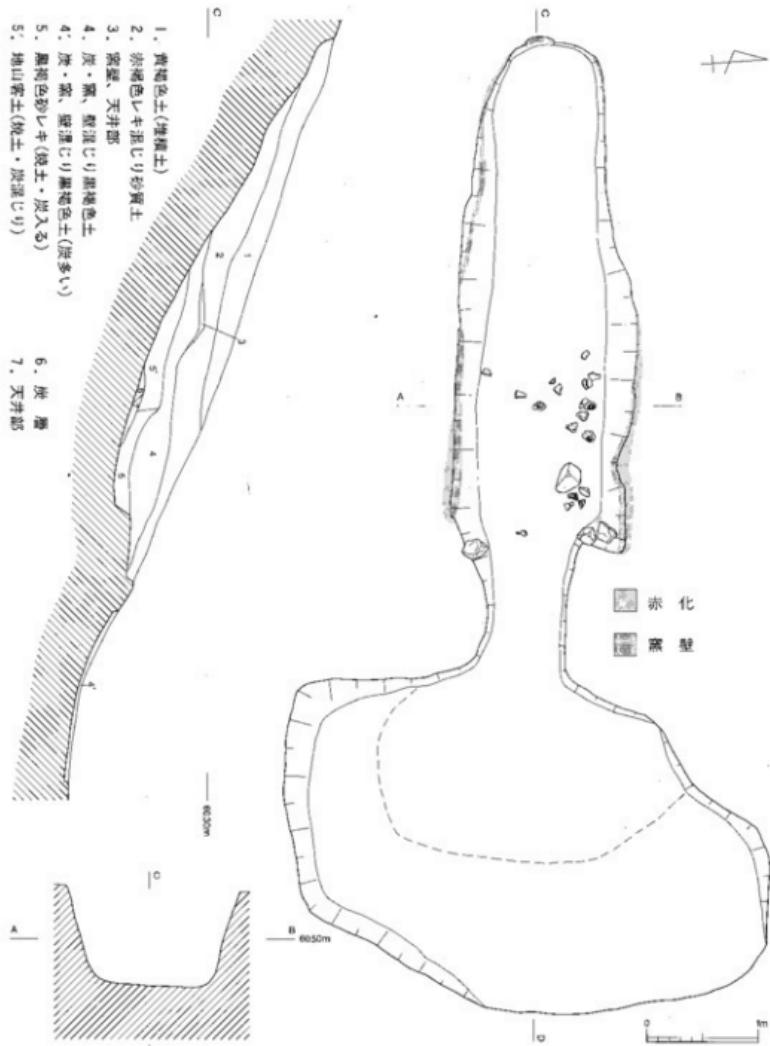
第21図 A地区 地形測量図(調査前)



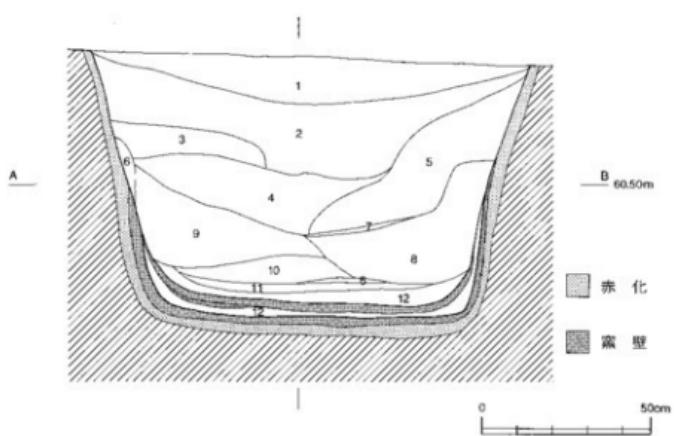
第22図 戸井町坪1号窓 地形測量図



第23図 戸井町坪1号窯 第1次床面 実測図

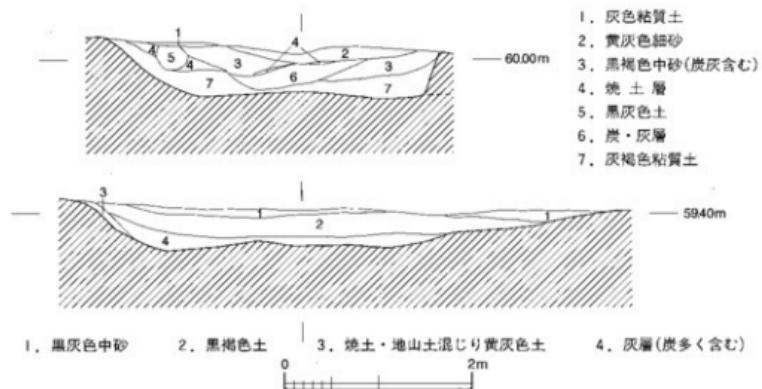


第24図 戸井町坪1号窯 第2次床面 実測図

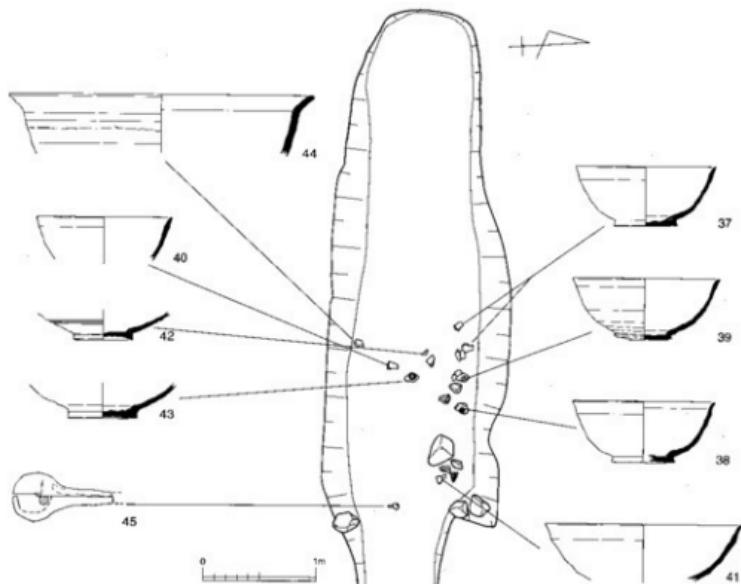


1. 黄褐色土 2. 窯壁・焼土混じり赤褐色土 3. 2層と同質だが窯壁大きい 4. 天井窯壁
 5. 暗赤褐色粘質土 6. 風化した窯壁・黄色粘土 7. 烧土 8. 哈黄褐色粘質土
 9. 風化した窯壁(焼土・炭含む) 10. 炭層 11. 炭層 12. 烧土・地山土混じり黄灰色土

第25図 窯体横断土層図



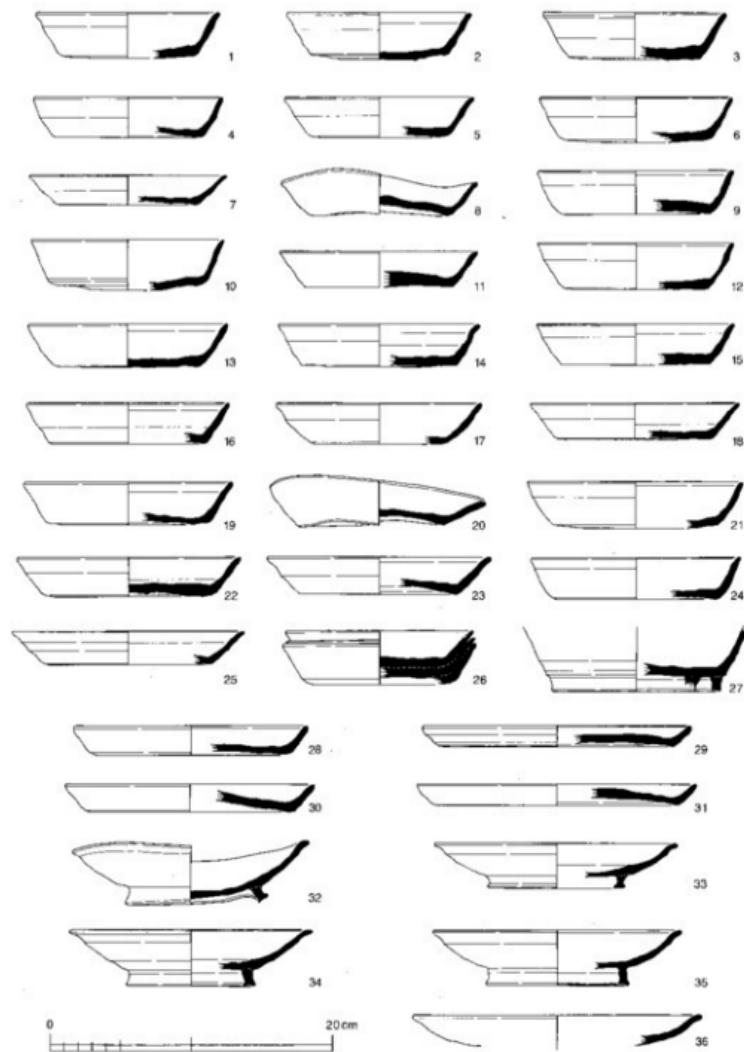
第26図 前庭部土層図



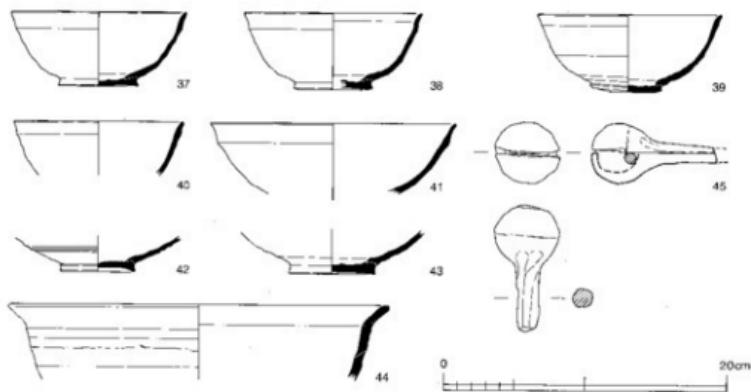
第27図 第2次床面 遺物出土状況

れなかった。新段階の床面の間の埋土から出土した土器だけである(第28図)。古段階の窯体は、平面距離で6.5m・斜距離で7.15mの全長を測る。床面の復原勾配は約24°である。一般的な窯と同じく焚口に近い部分で舟底状を呈している。焚口が狭まらないずん胴の平面プランをしている。煙り出し部の上部は欠失しているため、不明である。前庭部も同様に幅広く開くプランにはならず、僅かに開く程度である。焚口より2.9m広がったところで4.5mを測る。そして、自然に灰原へと続いている。灰原は大きく2層に分けられ、下層には古い段階の遺物しか見られないことから、下層が広がっている部分については確実に古段階の灰原と考えられる。

新段階の窯は、古段階の窯を縮小するように手を加えている。また、熱効率の変化によるもののか窯の平面形態も少なからず変わっている。窯入口部をすばめて、窯体と燃焼部を明らかに分けている。燃焼部は礫を使って補強している。人頭大から拳大の礫を使用している。古段階の床面が舟底状であるのに対して、大きく変化しない斜面であるが、その分斜度は急となつており約28°を測る勾配である。煙り出し部も内側に入っており、その分窯体は短く、そして斜度が急となっている。煙り出し部は約0.4m短くなつておらず、窯体の全長4.4mとなっている。焚口の幅も狭くなつておらず、0.6mである。場所によって異なるが、修復は多い個所で3回行って



第28図 第1次床面 出土土器



第29図 第2次床面 出土土器

いる。焚口付近が主で、煙り出し近くはほとんど補修は行っていない。赤化した部分は明瞭であるが、還元状態の青化した個所は確認出来なかった。また、天井部の落ちた痕跡も確認している。

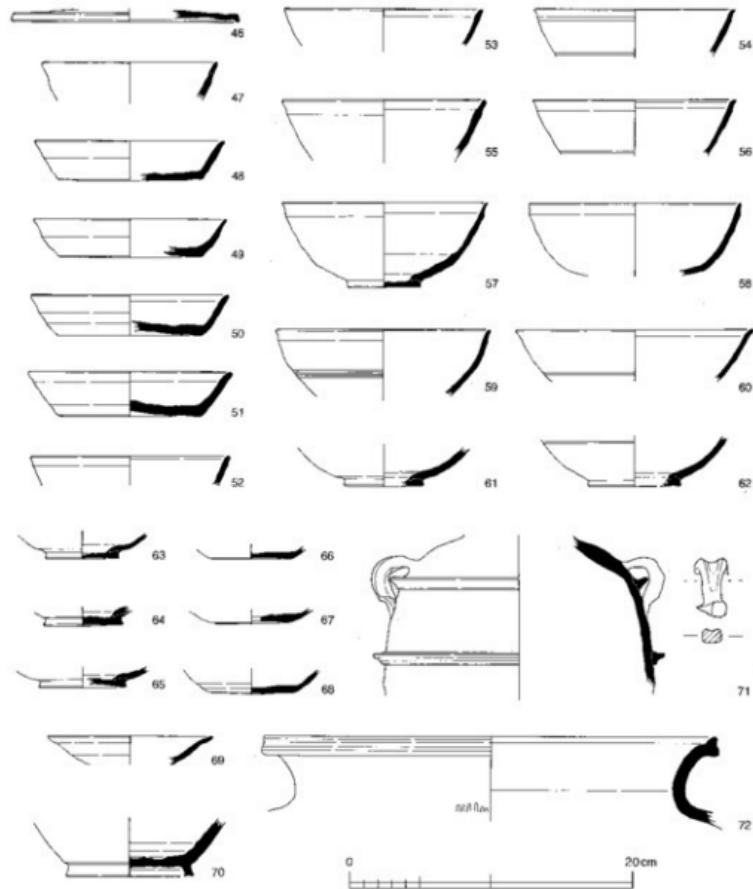
遺物は、2時期ともあるものの、古段階は片づけられた状態であり、焼成時の状況ではない。新段階の床面では焚口付近で遺物が確認された。ただ、器種は椀と甕に限られており、他に鉢が1点出土している。新段階の床面も出土状況から窯詰めされた状態とは考えられない。

3. 遺 物

出土遺物は、新段階床面から出土した土鉢以外はすべて須恵器である。器種は、杯・椀・皿・蓋・甕・壺・鉢である。図化した点数は329点で、その内訳は杯137点、椀61点、皿36点、蓋29点、甕5点、壺40点、鉢12点である。個々の詳細は観察表に譲り、簡単に記すことにする。実測図は出土位置によってレイアウトしてある。しかし、ここでは窯の操業時期が2時期あることから、2時期に分けて略述することとする。確実に混ざっていない資料は、各床面出土の土器である。

1) 古段階の土器

出土総数の大半は古い段階の土器である。床面出土土器は第28図で36個体図化している。機種は、杯・皿に限られる。(26)(27)は重ね焼きの状態で複数の個体が付いている。(26)は3個体、(27)は2個体の同型の土器が付着している。杯・皿とともに高台の有無で大別される。当然口径の大小や壠部の形状で細別可能である。特殊な器形としては、金属器を模倣したと言われる稜椀も出土しており、特記されよう。図化したものは2点でごく少量しか焼成していないが、

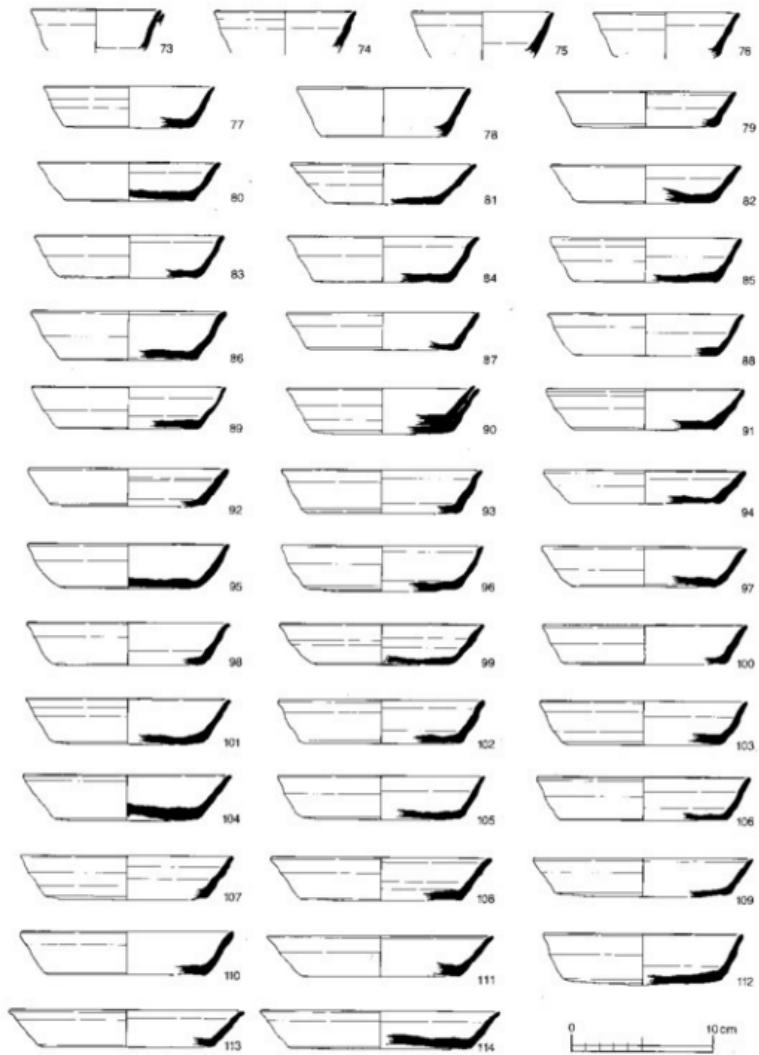


第30図 窯体 出土土器

札馬窯跡群や投松窯跡群と周辺で焼成されていることから一つの分布圏が考えられよう。また、ヘラ記号は古い段階に限られている。文字は「大」「小」だけである。

杯（第28図1～27、第30図47～51、第31図73～114、第39図125～134、第42図182～198

第45図246～249、第45図260・261、第46図272～288、第47図298～309）



第31図 前庭部 出土土器(1)



第32図 窯体 出土土器 組切痕 拓本



第33図 前庭部出土土器 組切痕拓本

杯は大きく分けて、2つに分けられる。高台の有無によって分類するものである。率的には高台のない杯Aの方が多い。第1次床面では図化した30個体のうち28個体が杯Aである。前庭部でも図化した54個体の杯のうち44個体が杯Aである。口縁端部が丸くなるもの、尖りぎみになるもの、やや外側に肥厚するものなど個体差を指摘出来る。同様にプロポーションにおいても体部が直線的なもの、やや外溝するものと変化はあるが、個体差と考える方が妥当かと思われる。体部から底部への屈曲点が稜線をなすものとばけたものがあるが、これも底部の状況などとともに同様に個体差と思われる。



第34図 灰原出土土器糸切痕拓本

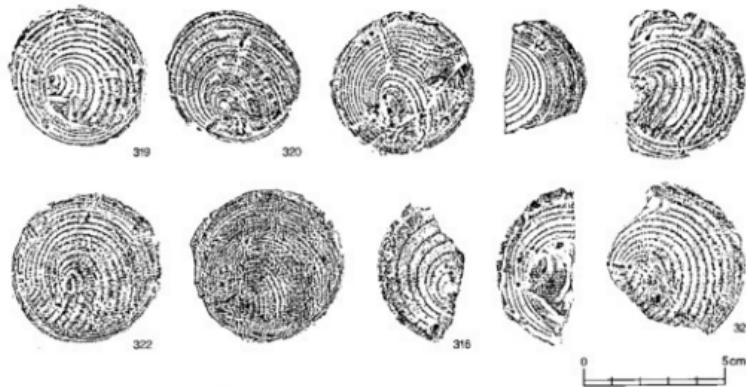
ら、小型の(125)、直線的な体部を持つ(128)、大型の杯で直立ぎみな体部が外湾する(130)に分けられる。

高台のある杯Bは量的には少量であるが、やや大型のものが多く、作りも杯Aに比べると丁寧である。杯部も深いものが大半である。高台は輪高台を貼り付けている。輪高台の上に体部をのせているようで、体部の方が接点周囲が下がっているものが認められる。また、高台は踏ん張りぎみに内外へ肥厚するものと断面台形のものに大きく分けられる。図化した土器は、第1次床面で2個体、前庭部で8個体である。前庭部で分類するな

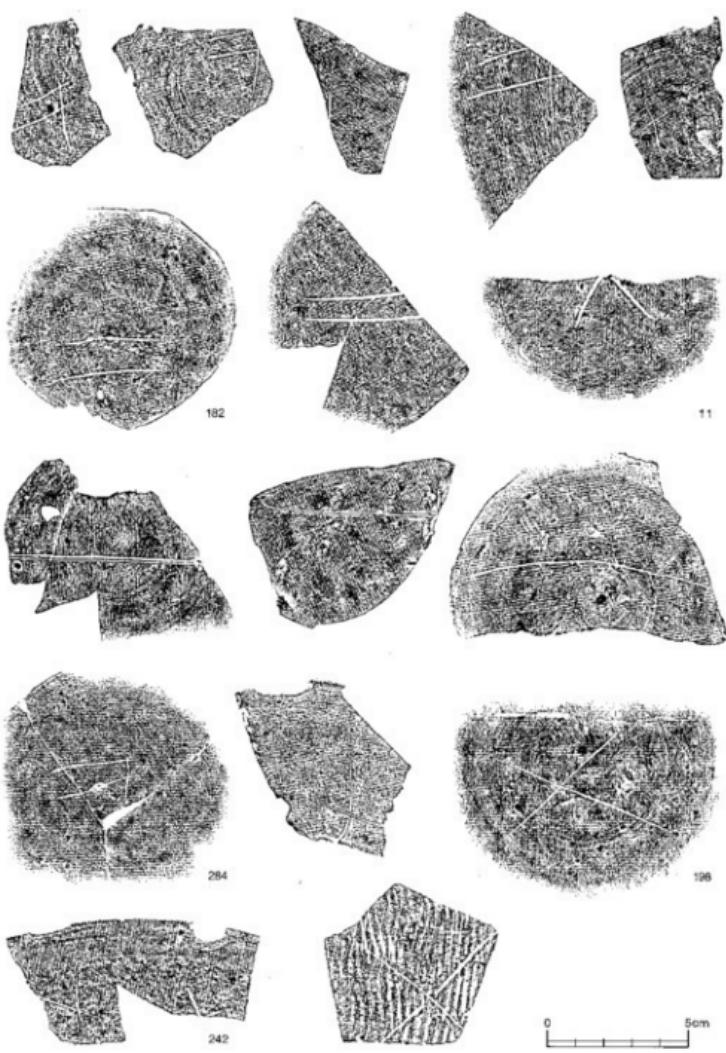
III (第28図28~36、第30図52・69、第39図136~144、第42図201~208

第45図263、第46図289・290、第47図310~314)

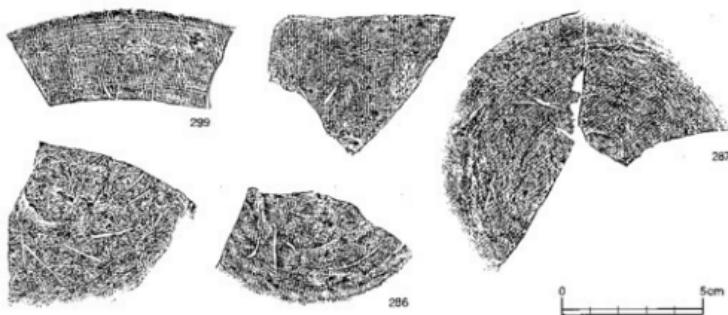
大型のものと小型のものに大別される。特に小型のものは、(69)(310)の2個だけである。口径は22.5cmを最大とするが、ほとんどは16~19cmである。高台を有する皿(皿B)には20cmを



第35図 表面採集土器 糸切痕拓本



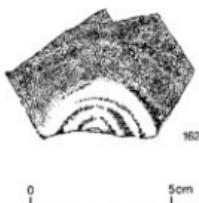
第36図 ヘラ記号 拓本(1)



第37図 ヘラ記号 拓本(2)

越えるものはない。口縁部のタイプは直線的に延びるものと湾曲するものの二者がある。高台を有さない皿Aには両者があるが、皿Bは湾曲するタイプだけである。皿Aは逆に直線的なものがほとんどで、湾曲するものは大型の口径20cmを超えるものに限られている。直線的に延びるものは、直線的に外方に短く広がるタイプのものが主である。

図化した中での内訳は、皿Aが12個、皿Bが22個、小皿が2個である。

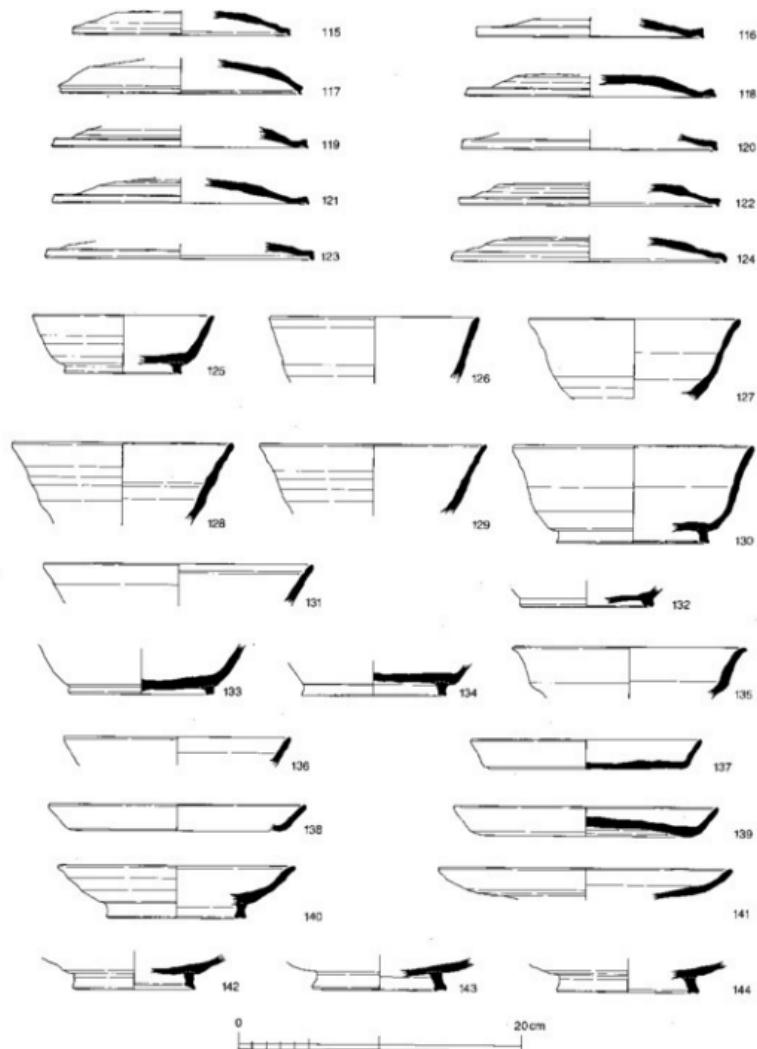


第38図 工具痕 拓本

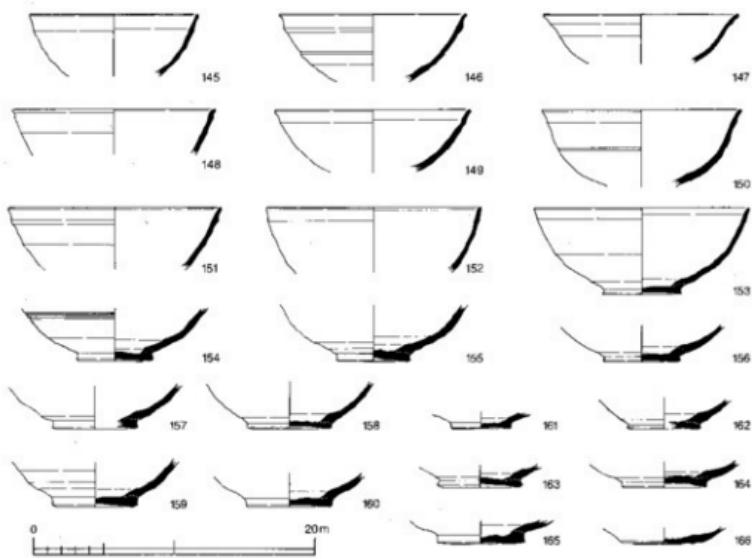
蓋(第30図46、第39図115～124、第42図175～179、第45図259、第46図265～271、第47図293～297) 灰原出土の1点(179)だけが壺用蓋と器種の違う蓋で、他は杯の蓋と思われる。大型のものと小型のものにも分けられるが、端部の違いによっても分類可能である。(271)は口径23.5cmと大型であるが、16～19cmの口径の蓋がほとんどである。形態からは鉛直方向に直線的に延びるものと屈曲して延びるものに分けられる。つまみ部が残っているものは少ない。平べったい形状であるが、ボタン状までは退化していない。

穂挽 (第39図135、第42図199・200)

出土点数は3点と僅かであるが、特殊な土器である。すべて胎土は精選されており、焼成も良好である。3点とも口縁部であるが、高台が付くタイプである。端部近くでやや外反している(135)、端部近くで大きく外反する(199)、全体的に外反する(200)と形態は僅かに異なっている。



第39図 前庭部 出土土器(2)



第40図 前庭部 出土土器(3)

壺 (第30図72、第44図242~245、第46図292)

全体像が想定出来るまでに復原された土器はない。図化した点数は6点と少ない。大型の壺で口縁端部は内外面に肥厚しているが、内面に強く肥厚するもの(242)(243)と外側に垂下するよう伸びるもの(244)と内外面に肥厚するもの(72)(245)と内面に肥厚しているもの(292)に分けられる。

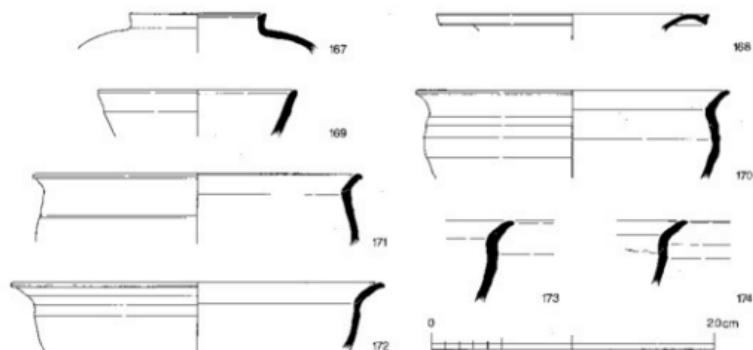
内面に強く肥厚するもの(242)(243)は端部近くで水平になり、そこに明瞭な稜線を持っている。タタキメの種類には2種類ある。縱方向のタタキメ(244)と横方向のタタキメ(243)がある。口縁部の破片だけであるが、肩は張らず、体部は球形になりそうである。

壺 (第30図70・71、第41図167・168、第43図209~231、第44図232~237・240・241、

第45図257・258、第46図291、第47図323~326)

大型と小型に分けられる。全体像がわかるものはなく、すべて破片である。壺と一括しているが、突帯壺・無頸壺・短頸壺・直口壺・長頸壺(瓶)に分けられる。

鉢 (第41図169~171、第44図238・239、第45図264、第47図327・328)



第41図 前庭部 出土土器(4)

口縁部のタイプからは3つに分けられる。くの字形のものと内溝するものと片口のものの3種である。くの字のものと片口のものは基本的に同じプロポーションであるが、用途・外形から分類した。くの字のタイプはさらに、口縁端部の形状から細分可能である。外側に肥厚するもの(171)、外反ぎみになるもの(170)、水平に外側へ短く広がるもの(327)、そして内外面に肥厚するもの(328)に分けられる。内溝するものは1点だけである。(238)で、焼きはやや甘く、生焼け状態であろうかと思われる。だが、胎土は精良である。伏鉢と呼称される鉢である。

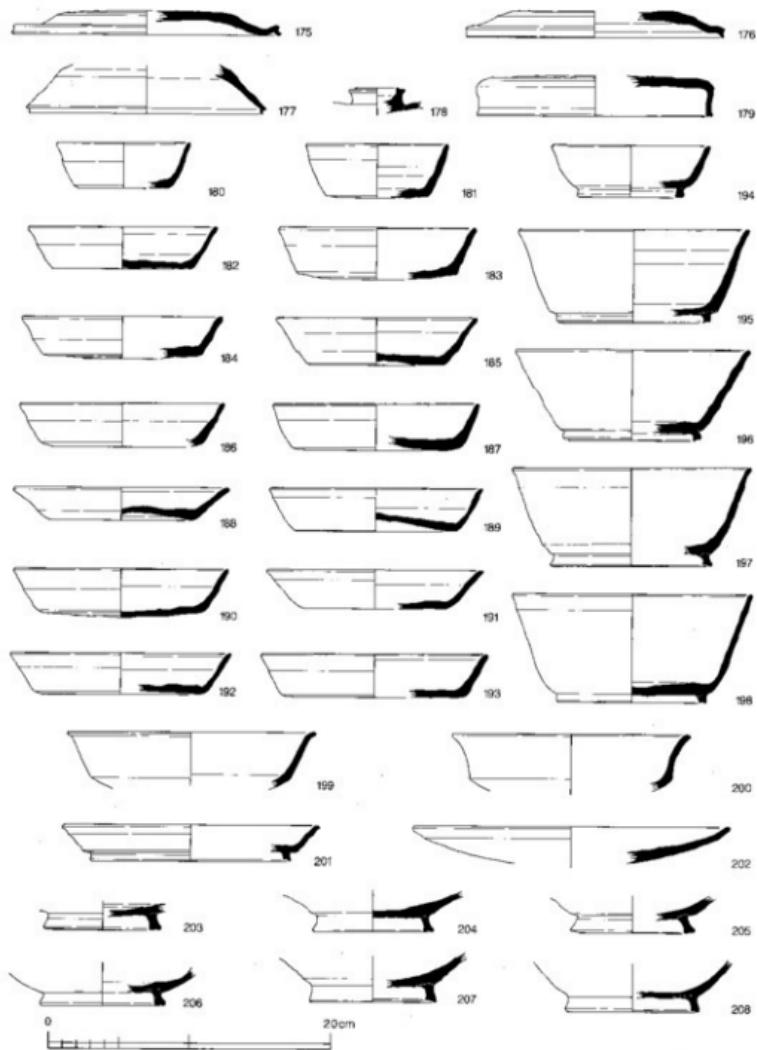
(2)新段階の土器

量的には少量で、器種も限られている。今のところ椀・鉢・鉢だけである。前述したように甕についてはいずれの時期か決しがたいので、(古)段階にして扱っている。

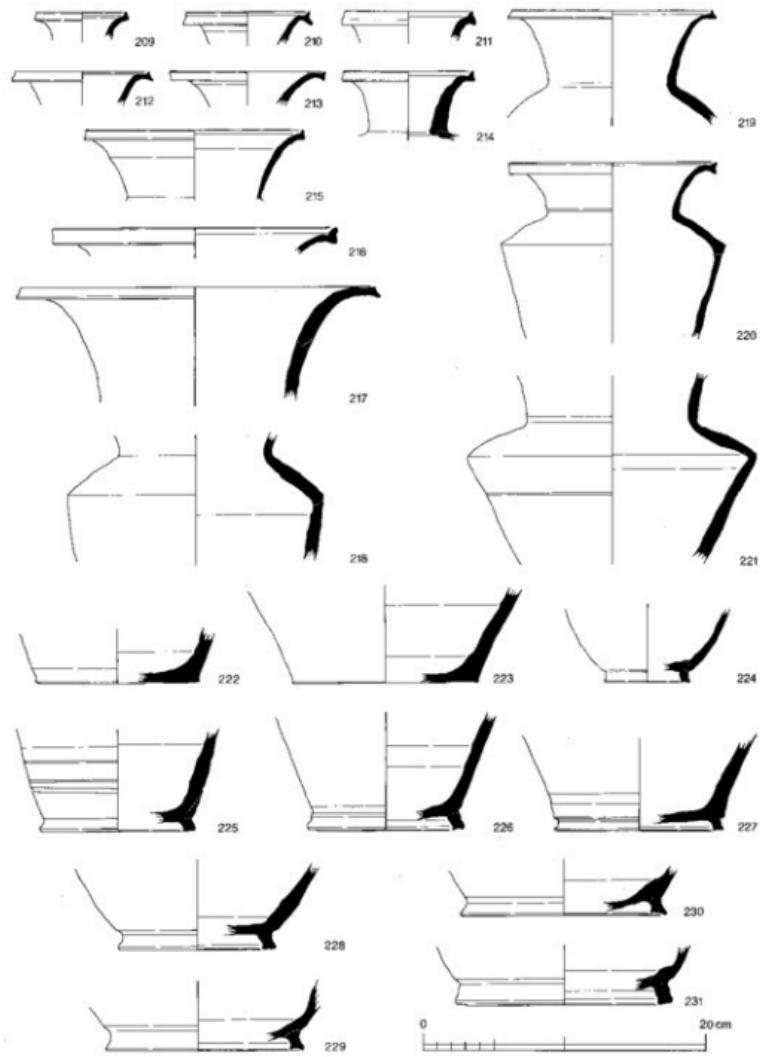
椀 (第29図37~43、第40図145~166、第45図250~256、第47図315~322)

糸切り底の椀である。口縁部の形状や器高指數から細分は出来るかも知れないが、大きくは1タイプである。体部に凹線を有する(56)(59)(154)があり、特徴的である。床面出土土器にも1点だけ(42)凹線を有している。余り例を見ない技法で、戸井町坪1号窯の土器として最も抽出しやすいものである。凹線を施す土器は体部の丸みが欠け、やや直線的なプロポーションを呈している。(42)は凹線の位置が低く底部に近い部分に認められる。明瞭な凹線ではないが、外面に稜線を施して同様の外見的特徴を示そうとした土器もある。

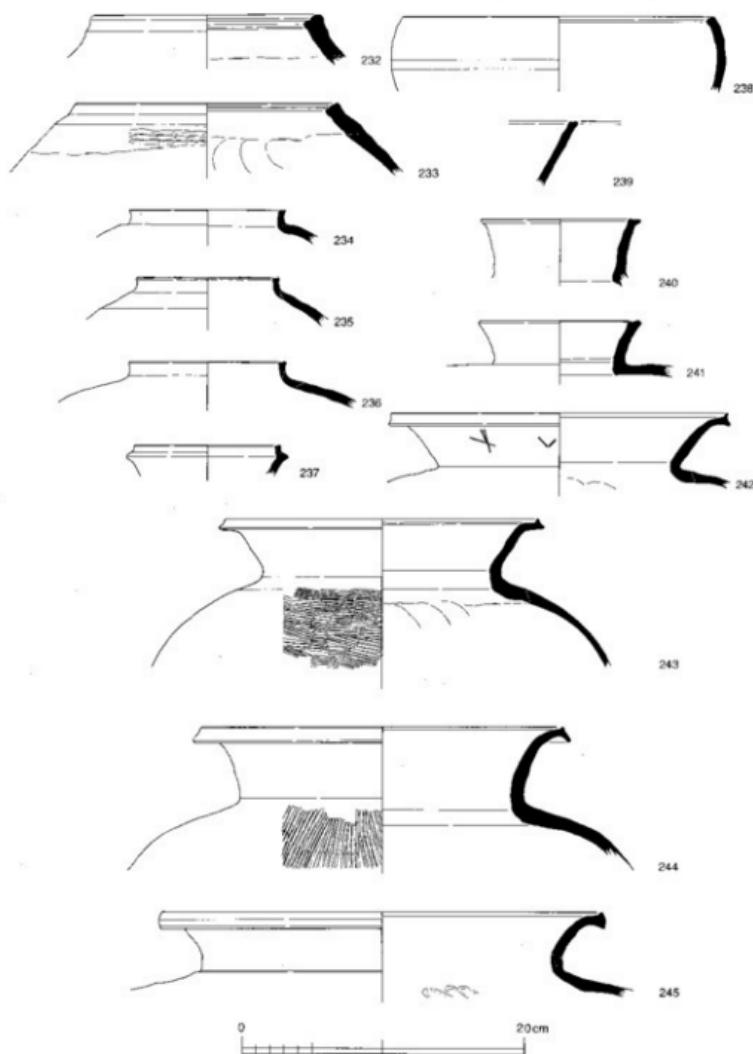
他のこの時期の椀は、やや深めで底部から外方へ張り出しひみに大きく渦曲している。丸みを持った半球状の椀である。端部は個体によって異なっており、丸く納めるものと外方に尖りぎみにやや細く納めるものがある。端部近くのプロポーションもやや外反するものとそのまま



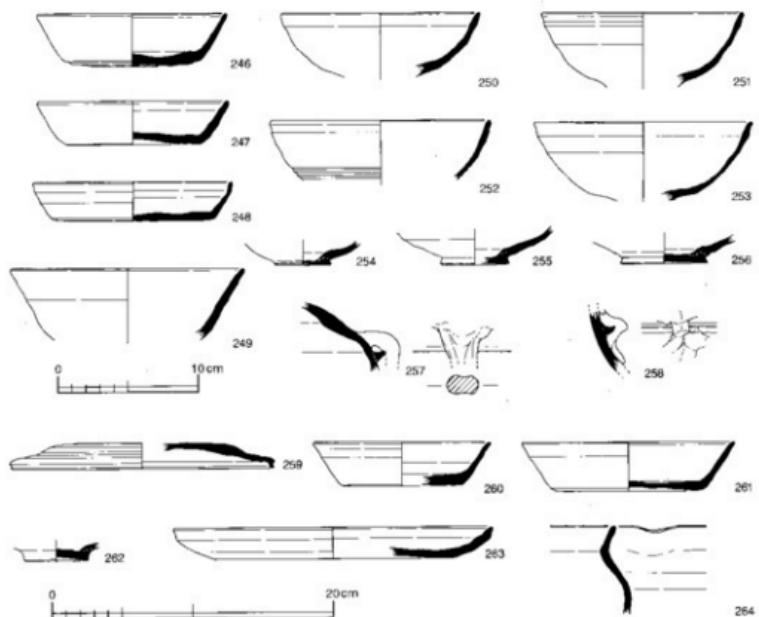
第42図 灰原 出土土器(1)



第43図 灰原 出土土器(2)



第44図 灰原 出土土器(3)



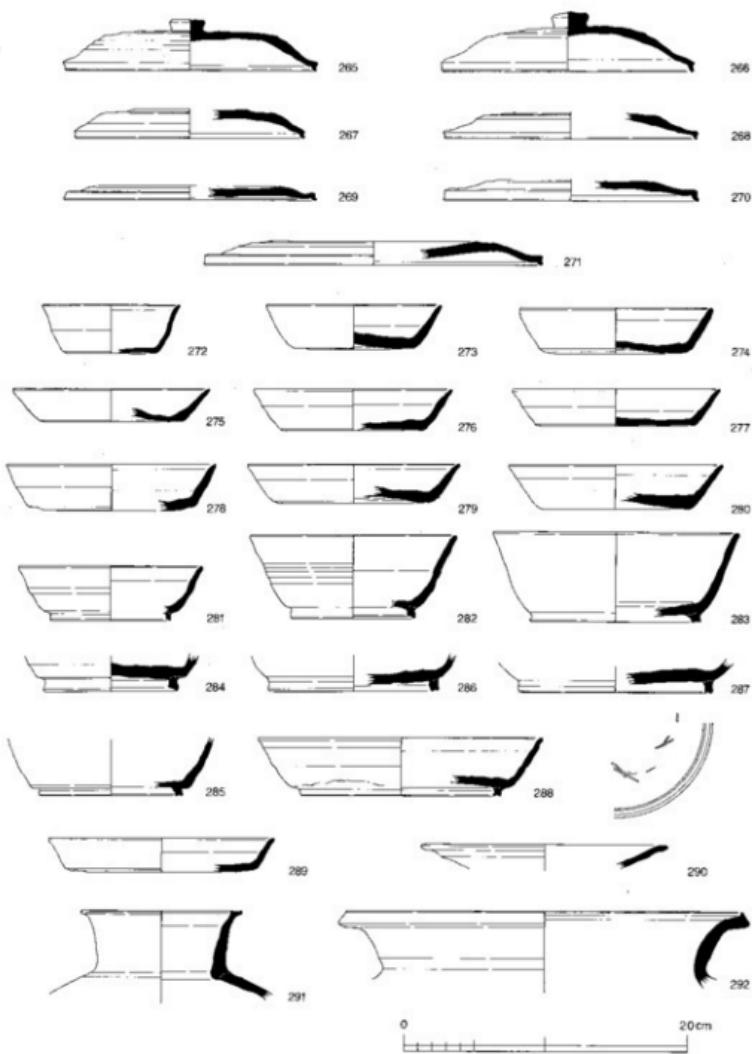
第45図 確認調査 出土土器(1)

上方に自然と終えるものがある。ヨコナデの技法によるものかも知れないが、(38)のように縁端部の下側外面にやや窪んだ箇所が認められる。それに伴って、その下の部分が突帯状に膨らんでいる。

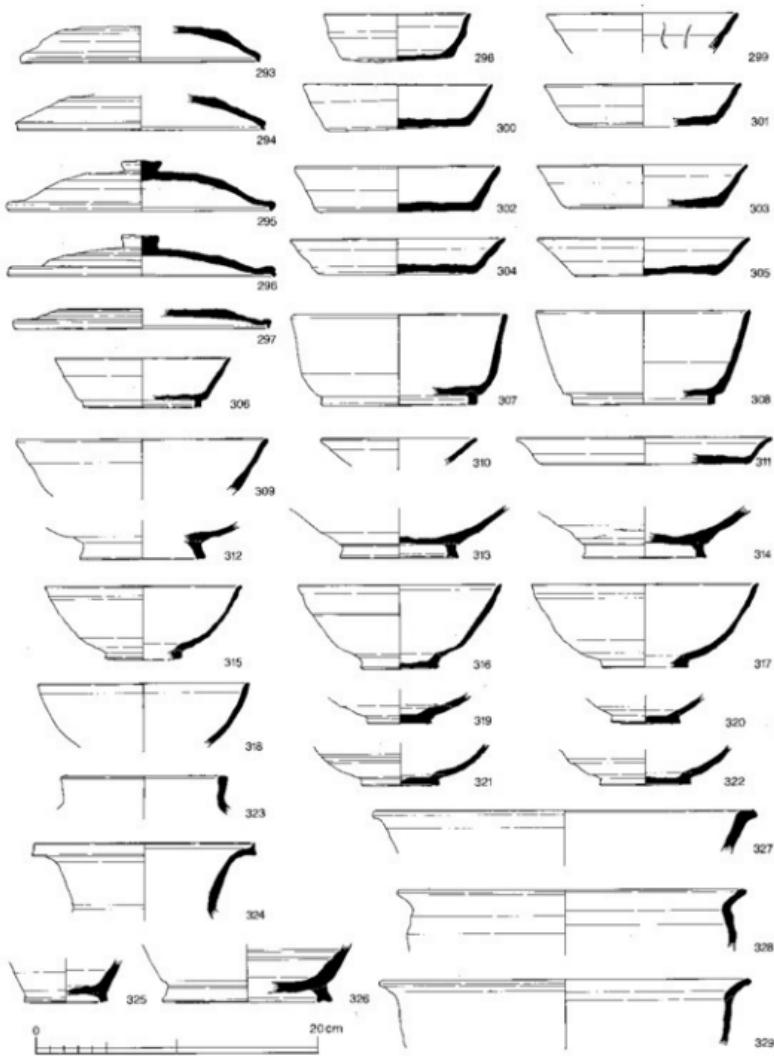
底部はやや大きめで、糸切りによって切り離されている。底部の上に体部を乗せるようにして製作している。粘土紐の継ぎ目が明瞭に看取される。底部は中央部分がやや薄くなっているものも少量ある。

鉢 (第29図44、第41図172~174、第47図329)

固化したものは5個と少数であることからも細分は意味がないかも知れないが、端部の形状は僅かに異なる。角張りぎみのもの(44)と外反ぎみに広がるもの(170)と丸くおさめるもの(329)がある。しかし、大きくは1タイプだけで分類は出来ないものかと思われる。



第46図 確認調査 出土土器(2)



第47図 表土出土土器・表面採集土器

鈴（第29図45）

柄部の一部を欠いている。焼成段階にすでに欠失していたものと思われる。全長9.1cm、柄部の長さ5.0cmで、鈴の幅(径)4.2cmで中央に切り込みがある。中には粘土塊を入れており音がなり、実用品である。精製品とはいはず、特に柄部はナデ成形で仕上げた手捏ねによるものである。

4. 小 緒

戸井町坪窯跡群は加西市倉谷町に所在する須恵器および瓦を焼成した窯跡群である。加古川市と加西市の境界となっている山塊の北側斜面に立地している。周辺は札馬窯跡群を中心とした東播磨中部窯跡群(志方窯跡群・播磨中東部窯跡群)の1支群である。現在5基の窯跡が確認されているが、増加する可能性が高い。谷入口部には釜ヶ池があり、窯跡群からの眺望は狭く視界は限られている。

戸井町坪1号窯は、他の4基とは異なる斜面に立地している。比較的緩やかな東向きの斜面に構築された登り窯である。天井部は残っていないが、床面はほぼ完全に残っていたことから平面規模は明確である。窯体南側には自然の溝が存在するが、北側には認められなかったことから、明らかな排水機能を有する外部施設は設けていなかったものと思われる。

戸井町坪1号窯の特徴は2時期にかけて煙を上げていることである。それが、継続したものではなく約150年の間を置いて使用していることにある。(古)段階のものは、平面規模は長さ6.5m、幅1.8mを測る。斜距離では7.15mあり、ほぼ同じ幅である。床面は舟底状を呈し、煙り出し部へ向かってやや急な斜面となっている。煙り出し部で0.8mの幅である。焚口部も同じ幅で狭めていない。前庭部は比較的大きく4.3×3.0mの平坦面を作り出している。焚口部前面のやや低い(窪んだ)部分には炭が堆積していた。(新)段階の床の整形のためか、床面の遺物は残存していなかった。(新)段階の構造は、平面形態を変えている。まず、窯体を0.4m短くし、焚口部の形状も変化している。両側壁を0.5mずつ縮小しており、それによって窯体と燃焼部を明瞭に分けている。燃焼部は礫を使って補強している。平面規模は長さ4.4m、幅1.8m(最大幅)を測る。僅かに床面は窪んでいるが、(古)段階のような明瞭な舟底ではない。(古)段階の舟底部分を粘土で貼床しているため、斜度は急になっている。約28度の勾配である。修復は多いところで3回行っていた。床面は一部旧状を残していた。椀・鉢と鈴が原位置で出土している。鈴は出土例として数少ないものであろう。手捏ねで精製品とは言えないが、興味深い資料である。

遺物は一般的な遺物が大半で、特殊なものと言えば、(新)段階床面出土の鈴と稜椀くらいであろう。ともに出土例の少ない資料で、今後の検討を必要とする遺物であろう。



第48図 戸井町坪1号窯調査風景

第2表 戸井町坪1号窯出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	高さ			
1	杯	(12.7)	3.2	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り、一部ナテ調整。	内面自然釉。高台付き土器との重ね焼痕あり。
2	杯	(12.8)	3.3	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り木調整。	内面灰かぶり。
3	杯	(12.9)	3.3	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部平底でやや厚い。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	外面と断面に自然釉。
4	杯	(13.2)	2.85	体部内側気味に外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り、一部ナテ調整。	内面ヘラ記号「/」。他土器片付着。内外面灰かぶり、焼き透みあり。
5	杯	(13.2)	2.85	体部開きながら外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りか?	焼成不良。
6	杯	(13.5)	3.2	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部めり丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りか?	内面ヘラ記号「/」あり。外面灰かぶり。
7	杯	(13.6)	2.1	体部開き気味に外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「/」あり。焼き透みあり。
8	杯	(13.6)	2.4	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部中央などに盛りあがる。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「X」か? 内面自然釉。ひだつき板。焼き透みあり。
9	杯	(13.6)	3.15	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「/」。内面灰かぶり、一部自然釉。
10	杯	(13.6)	3.6	体部外上方へのび、口縁端部やや外向きに尖り気味におさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼成不良。
11	杯	(13.8)	2.5	体部外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底で中央一部の器壁厚くなる。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りの後不定方向のナテ調整。	底部内面にヘラ記号「✓」あり。内面自然釉。口縁部歪みあり。化成灰に近い状態で焼成。
12	杯	(13.8)	3.25	体部外上方にのび、口縁端部外向きに尖り気味におさめる。底部平底。	回転ナテ調整。	焼成不良、表面磨滅。
13	杯	(13.9)	3.1	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り調整。	内外面、窓壁、他土器片付着。外面灰かぶり、焼き透みあり。
14	杯	(14.0)	3.0	体部外上方へのび、口縁部外反しながら丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りの後不定方向のナテ調整。	底部内面にヘラ記号「H」あり。外面ひだつき板。

法紙の()は復原形・残存高

No.	器種	法 量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
15	杯	(14.0)	2.9	体部外上方へのび、口縁端部外向きに尖り氣味におさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「/」。全面自然釉。底部重ね焼きの他土器片付着。
16	杯	(14.1)	2.9	体部わずかな段をもちながら外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。外面一部に自然釉。焼き歪みあり。内面他土器片付着。
17	杯	(14.3)	(2.9)	体部やや開き氣味に外上方にのび、口縁端部わざかに外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	焼成不良。
18	杯	(14.5)	2.55	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「/」。全面自然釉、外露灰かぶり。
19	杯	(14.5)	3.05	体部やや外反氣味に外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	全面、灰かぶり。
20	杯	(15.2)	3.7	体部まっすぐ外上方へのび、底部丸くおさめる。底部中央盛りがある。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内面ひだすき痕、外面自然釉。底部外露窓付着。焼き歪みあり。
21	杯	(15.2)	(3.3)	体部丸味をもって外上方にのび、口縁端部尖り氣味におさめる。	回転ナデ調整。	焼成不良。
22	杯	(15.4)	2.7	体部外上方にのび、口縁端部外向に丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面ヘラ記号「/」。全面自然釉。他土器片付着。
23	杯	(15.5)	2.65	体部開き氣味に外上方へのび、口縁部外反しながら丸くおさめる。底部中央などらかに盛りあがる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後一部ナデ調整。	
24	杯	(14.6)	2.95	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼き歪みあり。
25	杯	(16.2)	2.35	体部開き氣味に外上方にのび、口縁端部外向に丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内外露灰かぶり。焼き歪みあり。
26	杯	—	—	3個体とも体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りか?	東北燒3個体密着。全面自然釉。底部外露窓付着。
27	杯	底径(11.7)	(4.55)	体部外上方へのび、底部は平らで縁部に直立に下りる高台をもつ。	回転ナデ調整。	内外露自然釉。底部外露窓付着。
28	皿	(16.3)	2.1	体部短く外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後一部不定方向へのナデ調整。	
29	皿	(18.7)	1.5	体部短く外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内面中央ヘラ記号「/」。全面灰かぶり、一部自然釉。

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	枝法	備考
		直径	器高			
30	皿	(17.4)	1.95	体部短く外上方へのび、口縁端部やや尖り気味におさめる。底部中央盛りあがる。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内外面灰かぶり、一部自然釉。内面粘土塊付着、焼き歪みあり。
31	皿	(19.6)	1.5	体部短く外上方へのび、口縁端部やや尖り気味におさめる。底部中央盛りあがる。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内面中央ヘラ記号。焼き歪みの為ひび割れあり。外・断面自然釉。底部に粘土塊付着。
32	皿	(16.75)	4.2	体部浅く外上方へのび、口縁端部外側へつまみ出し丸くおさめる。底部は中央が凹み、「ハ」の字型のやや高い高台を付す。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナテ調整。	内面自然釉。
33	皿	(16.8)	3.2	体部浅く外上方へのび、口縁部外側につまみ出し丸くおさめる。底面には内外に瘤部を引き出す内相気味に丸い高台をもつ。	回転ナテ調整。底部不明。	内外面一部自然釉。底部焼き歪みの為ひび割れ。内面重ね焼痕跡残る。倒置状況で焼成。
34	皿	(16.8)	4.0	体部浅く外上方へのび、口縁部外側につまみ出し丸くおさめる。底面には内・外に瘤部を引き出す「ハ」の字型高台をもつ。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りの後ナテ調整。高台貼り付けの為のナテ調整。	
35	皿	(17.4)	3.9	体部浅く外上方へのび、口縁部外側につまみ出し丸くおさめる。底部には直立に近くおさめる高台を付す。	回転ナテ調整。底部不明。	外面全体的に自然釉。
36	皿	(19.9)	(2.2)	体部浅く外上方へのび、口縁部外側につまみ出し丸くおさめる。	回転ナテ調整。	
37	楕	(12.4)	5.25	体部は外上方に内側しながらのび、口縁端部は尖り気味にやや外反する。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	灰かぶり。
38	楕	(12.5)	5.4	体部は外上方に内側しながらのび、口縁端部は尖り気味に外反する。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	焼き歪みあり。
39	楕	(13.2)	5.5	体部は外上方に内側しながらのび、口縁端部は尖り気味にやや外反する。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	
40	楕	(11.9)	(3.8)	体部は外上方にやや丸味をおびてのび、口縁端部尖り気味に外反する。	回転ナテ調整。	
41	楕	(17.3)	6.0	体部ゆるやかに内側しながら外上方へのび、口縁端部は尖り気味に外反する。	回転ナテ調整。	
42	楕	底径 (5.4)	(2.5)	体部は開き気味にまっすぐ外上方へのびる。外面に2本の沈線溝る。	回転ナテ調整。底部回転糸切り。	灰かぶり。
43	楕	底径 6.1	(3.1)	体部外上方に丸味をもってのびる。	回転ナテ調整。底部回転糸切り。	灰かぶり。
44	楕	(26.6)	(5.3)	口縁部「く」の字状に外反。端部を丸くおさめる。	回転ナテ調整。	焼成不良。

No.	基種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	基高			
45	土鉢	—	—	はは球形の体部に残存長9cmの把手を付ける。中に直径0.8cmの土玉を2ヶ入れている。	手捏ねで仕上げる。	
46	盃	(15.2)	(0.85)	天井部から口縁部まで水平に低くのび、口縁部外下方向に丸くつまみ出す。	回転ナデ調整。	焼成やや不良。 つまみの有無不明。
47	杯	(12.2)	(2.7)	口縁部まっすぐ外上方にのび、端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	下半磨滅。
48	杯	(13.2)	2.85	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転糸切りの後不定方向のナデ調整。	内外面にひだすき痕。
49	杯	(13.5)	(2.75)	体部内側気泡に外上方にのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部不明。	底部内面にヘラ記号。 全面灰かぶり。
50	杯	(13.7)	2.9	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り後、不定方向のナデ調整。	底部内面にヘラ記号「/」。 外面やや灰かぶり。 内外面ひだすき痕。
51	杯	(14.1)	3.15	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部平底。やや中央が盛りあがる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内外面ひだすき痕。
52	皿	(13.7)	(2.1)	口縁部まっすぐ外上方にのび、端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
53	碗	(13.8)	(2.65)	口縁部外上方にのび、端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
54	碗	(14.0)	(3.25)	口縁部外上方にのび、端部外向きに丸く気泡におさめる。2条の沈線道。	回転ナデ調整。	
55	碗	(14.1)	(4.35)	口縁部まっすぐ外上方にのび、端部で両面に段をもち丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
56	碗	(14.2)	(3.85)	体部は外上方にのび、口縁端部外反する。体部半ばに1条の沈線道。	回転ナデ調整。	
57	碗	(14.5)	6.0	体部内側しながら外上方へのびる。口縁部は外向きを丸くおさめる。底部は平窓、内面には段をもつ。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台側面ナデ調整。	内外面ひだすき痕。
58	碗	(14.7)	(5.15)	体部は内側しながら外上方へのびる。口縁部は外面向きに丸くおさめる。体部半ばに浅い3条の沈線道。	回転ナデ調整。	内面ひだすき痕。
59	碗	(14.9)	(4.7)	体部は内側しながら外上方へのび、口縁部は外向きに丸くおさめる。体部半ばに浅い3条の沈線道。	回転ナデ調整。	

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
60	椀	(16.7)	(3.65)	体部は外上方にのびる。口縁部外反し、端部は丸くおさめる。体部半ばに1条の沈線巡る。	回転ナゲ調整。	
61	椀	底径(5.6)	(2.8)	体部は内側しながら外上方にのびる。底部平高台、内面には段をもつ。	回転ナゲ調整。外面摩滅の為不明。	焼成やや不良。
62	椀	底径(6.6)	(3.5)	体部は内側しながら外上方にのびる。底部平高台、内面には浅い段をもつ。体部半ばに1条の沈線巡る。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り、高台側面ナゲ調整。	
63	椀	底径(5.2)	(1.8)	底部平高台、内面には浅い段をもつ。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り、高台側面ナゲ調整。	
64	椀	底径(5.65)	(1.35)	底部内面に浅い段をもつ。	回転ナゲ調整。底部内面仕上げナゲ、外面回転糸切り。高台側面未調整。	底部にひび割れあり。
65	椀	底径(6.2)	(1.4)	底部内面に浅い段をもつ。中央や盛り上がる。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り、高台側面ナゲ調整。	
66	椀	底径(5.9)	(0.9)	底部いわゆるベタ高台。器壁は薄い。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り。	
67	椀	底径(5.5)	(0.9)	底部、いわゆるベタ高台。中央に穿穴あり。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り。	
68	椀	底径(5.9)	(1.75)	底部いわゆるベタ高台。	回転ナゲ調整。底部回転糸切り。	焼成やや不良。
69	小皿	底径(11.4)	(2.0)	体部低く外上方にのび、口縁部で外方に屈曲する。端部は丸い。	回転ナゲ調整。	内外画ひだすき底。
70	甕 (底部)	底径(9.0)	(4.1)	体部まっすぐ外上方にのび、底部平坦で「ハ」の字型高台を付す。	回転ナゲ調整。体部外面回転ヘラケズリ、底部回転糸切り未調整。高台貼り付けのナゲ調整。	
71	突唇甕	腹径(20.8)	—	体部内側しながら外上方へのびる。2条の突唇と耳を付す。	回転ナゲ調整。	
72	甕	(31.7)	(6.5)	頸部は外反し外上方にのび、口縁部丸く上方につまみあげる。	回転ナゲ調整。体部は外面縱方向のタタキ。	
73	杯	(9.05)	(2.95)	体部やや丸味をもってのび、口縁部でわずかに外反。端部は丸い。	回転ナゲ調整。	内面自然釉。外面重ね焼きの土器片付着。
74	杯	(9.8)	(2.9)	口縁部まっすぐ外上方へのびる。端部は丸くおさめる。	回転ナゲ調整。	

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	枝法	備考
		口径	器高			
75	杯	(9.8)	(3.25)	口縁部まっすぐ外上方へのびる。端部はやや外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
76	杯	(10.0)	(3.15)	体部半ばで微妙な凸部をもちながら外上方へのびる。口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面にひだすき痕。
77	杯	(11.9)	2.9	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部は外向きに尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
78	杯	(12.2)	(3.45)	体部まっすぐ外上方へのび。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	焼き済みあり。 内外面灰かぶり、自然釉。
79	杯	(12.5)	(2.5)	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部やや外向きに尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面ひだすき痕。
80	杯	(12.6)	2.8	体部開き気味に外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	外面灰かぶり。 内面窓壁付着。
81	杯	(13.0)	2.9	体部まっすぐ開きながら外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
82	杯	(13.1)	2.7	体部まっすぐ開きながら外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	若干焼き歪んでいる。
83	杯	(13.2)	3.0	体部やや丸味をもち外上方へのび口縁端部丸くおさめる。底部は平底。	回転ナデ調整。底部ヘラ切りの後ナデ調整。	
84	杯	(13.2)	3.25	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	焼成不良。
85	杯	(13.3)	3.15	体部まっすぐ外方にのび、口縁部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ、外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面ひだすき痕。
86	杯	(13.4)	3.45	体部やや丸味をもち外上方へのび口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼成不良。
87	杯	(13.5)	2.65	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内面ひだすき痕。
88	杯	(13.6)	(3.0)	体部半ばから内側気味に外上方へのびる。器壁は極めて薄い。口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面ひだすき痕。
89	杯	(13.6)	3.0	体部半ばから内側気味に外上方へのびる。器壁は極めて薄い。口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内側自然釉 外面他上器片付着。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	枝法	備考
		口径	高さ			
90	杯	(13.6)	3.2	2個体とも体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部や内向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切り。	重ね焼き。2個体が付着。
91	杯	(13.7)	2.9	体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部や内向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切り木調整。	内面灰かぶり。外面ひだすき。
92	杯	(13.8)	(2.7)	体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	外面ひだすき痕。
93	杯	(13.9)	(3.1)	体部などらかに外上方へのび、口緑端部外向きに尖り気味におさめる。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	外面ひだすき痕。
94	杯	(14.0)	(3.1)	体部などらかに外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部中央ゆるやかに凹む。	回転ナテ調整。底部内面仕上げナテ、外面回転へラ切り木調整。	外面自然輪、内面ひだすき痕。やや焼き垂みあり。
95	杯	(14.0)	(3.2)	体部丸味をもって外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部内面不定方向のナテ、外面回転へラ切りの後一部ナテ調整。	外面ひだすき痕。焼き垂みあり。
96	杯	(14.0)	(3.25)	体部内骨氣味に外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	外面ひだすき痕。
97	杯	(14.1)	(2.8)	体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	底部内面にヘラ記号「」あり。
98	杯	(14.1)	(2.95)	体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部外向きに尖り気味におさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りか。	焼成不良。
99	杯	(14.2)	2.9	体部開き気味にまっすぐに外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	
100	杯	(14.2)	2.8	体部まっすぐに外上方へのび、口緑端部や外向きに丸くおさめる。	回転ナテ調整。	
101	杯	(14.3)	3.25	体部開き気味に外上方へのび、口緑端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	底部内面へラ記号「」あり。内外面灰かぶり、ひだすき痕。
102	杯	(14.4)	(3.1)	体部内骨氣味に外上方へのび、口緑端部外反し丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	内面ひだすき痕。
103	杯	(14.4)	(3.1)	体部内骨氣味に外上方へのび、口緑端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切りの後ナテ調整。	内外面灰かぶり。
104	杯	(14.5)	3.3	体部開き気味にまっすぐに外上方へのび、口緑端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナテ調整。底部回転へラ切り木調整。	内外面灰かぶり。焼き垂みあり。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
105	杯	(14.6)	3.1	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内面ヘラ起毛「×」ひだすき痕。
106	杯	(14.7)	(3.05)	体部は内寄気味に外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内面白自然釉。
107	杯	(14.9)	(3.1)	体部開き気味にのび、外面中央に凹みをもつ。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後不定方向のナデ調整。	口縁部外外面に重ね焼き上器片付着。内面白自然釉。
108	杯	(15.2)	(3.05)	体部開き気味にのび、口縁端部は外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面自然釉。内面ひだすき痕。
109	杯	(15.4)	2.7	体部まっすぐ開き気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
110	杯	(15.8)	(3.1)	体部開き気味にのび、口縁端部は外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼成やや不良。
111	杯	(15.9)	2.85	体部開き気味に外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
112	杯	(13.9)	3.65	体部まっすぐ外上方にのび、口縁端部や外向外に丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼成やや不良。
113	杯	(16.2)	2.6	体部開きながら外上方にのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
114	杯	(16.8)	2.65	体部開きながら外上方にのび、口縁端部外向外にやや尖り気味におさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
115	蓋	(15.1)	(1.7)	天井から口縁部までなだらかに下り、端部外下方につまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転ヘラケズリの後にナゲ、つまみ貼り付けの為のナデ調整。	つまみ欠損。
116	蓋	(15.8)	(1.35)	口縁部までなだらかに下り、浅い凹部をもつ。端部は尖り気味に短く、わずかに外向外につまみ出す。	回転ナデ調整。	
117	蓋	(16.8)	(2.4)	天井部ふくらみをもち、なだらかに口縁部までのびる。端部は下におりこみ、外向外に尖り気味におさめるが、小さな凹部を作る。	回転ナデ調整。天井部回転ヘラケズリの後ナデ調整。	外面灰かぶり。つまみの有無不明。
118	蓋	(17.5)	(1.55)	天井部平坦で口縁部へ段を生じながら下る。端部は外下方に向り気味につまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転ヘラケズリの後ナデ調整。	口縁部に重ね焼き痕。
119	蓋	(17.9)	(1.45)	口縁部まで丸味をおびて下り、段をもつ。端部はわずかに外下方に尖り気味につまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転ヘラケズリ。	焼き重みあり。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
120	蓋	(17.9)	(1.15)	口縁端部下方に丸くつまみ出す。	回転ナナ子調整。	
121	蓋	(18.0)	(1.8)	天井部からなだらかに外下方にのび、口縁部で込み、端部は外下方へ折りこみ丸くおさめる。	回転ナナ子調整。天井部回転へラケズリの後ナナ子調整。	口縁部重ね焼き板。
122	蓋	(18.1)	(1.55)	平坦な天井部から口縁部までやや外反しながらのび、端部は短く下方に丸くおさめる。	回転ナナ子調整。天井部回転へラケズリ。	つまみの有無不明。
123	蓋	(18.7)	(1.25)	口縁部や狭い段をもち、端部は下方に丸くおさめる。	回転ナナ子調整。	外面灰かぶり。
124	蓋	(19.2)	(1.7)	天井部からなだらかに口縁部にのび、端部は下方に折りこみ丸くおさめる。	回転ナナ子調整。天井部回転へラケズリ。	
125	杯	(12.7)	4.15	体部まっすぐ外上方にのび、口縁部は丸くおさめる。平らな底部に直立する高台を付す。	回転ナナ子調整。体部下半回転へラケズリ、底部切り離しの後ナナ子、高台貼り付けのナナ子調整。	全体的に灰かぶり。 高台端部に窓壁付着。
126	杯	(14.4)	(4.65)	口縁部まっすぐ外上方にのび端部は丸くおさめる。	回転ナナ子調整。体部下半回転へラケズリ。	外面灰かぶり。
127	杯	(14.8)	(5.65)	体部内側気味に外上方へのび、半ばで外反する。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナナ子調整。	
128	杯	(14.4)	(5.85)	体部外反気味に外上方にのび端部丸くおさめる。	回転ナナ子調整。	
129	杯	(15.8)	(4.9)	体部や内側気味に外上方へのび、半ばで外向きにまっすぐのびる。口縁端部丸くおさめる。	回転ナナ子調整。	
130	杯	(16.8)	6.9	体部内側しながら外上方へのび、半ばで外向きにまっすぐのびる。口縁端部丸くおさめる。底部には「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ子調整。体部下半回転へラケズリ、底部内部不定方向のナナ子、外画面転へラカタリ未調整。高台貼り付けの為のナナ子調整。	外面自然釉。 高台焼き垂み。
131	杯 (口縫)	(18.8)	(2.9)	口縁部まっすぐ外上方へのび端部は丸くおさめる。内面に回線をもつ。	回転ナナ子調整。	内外面灰かぶり。
132	杯 (底部)	底径 (9.4)	(1.5)	底部に外上方に短くおりる高台を付す。端部に1条の溝を作る。	摩減の為調整不明。	焼成不良。
133	杯 (底部)	底径 (10.3)	(3.6)	平らな底部に外下方に短くおりる高台を付す。端部は面を作る。	回転ナナ子調整。高台貼り付けの為のナナ子調整。底部灰かぶりの為不明。	内外面灰かぶり。
134	杯 (底部)	底径 (5.6)	(2.35)	平らな底部に「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ子調整。体部下半回転へラケズリ、底部回転へラカタリ未調整。	全面自然釉。内面重ね焼き板、やや焼き過んでいる。高台に窓壁付着。

No	法 量(cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
	基 種	口 径	器 高			
135	櫻	(16.0)	(3.6)	体部半ばで明瞭な棱縞をもち、外上方へ外反しながらびる。口縲端部は外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内外面灰かぶり。
136	皿	(15.9)	(2.1)	体部まっすぐ外上方に短くのび、口縲端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。
137	皿	(16.1)	(2.1)	体部まっすぐ外上方にのび、口縲端部は丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面灰かぶり、一部自然灰。底部に陶土器片付着。
138	皿	(17.95)	(1.85)	体部まっすぐ外上方に短くのび、口縲端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	
139	皿	(18.4)	(2.05)	体部まっすぐ外上方へ短くのび、口縲端部は丸くおさめる。底部中央などらかに盛りあがる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内面やや灰かぶり。焼き正みあり。
140	皿	(16.4)	3.7	体部浅く外上方へのび、口縲端部は丸くおさめる。底部にはやや内側へふんばる高台を付す。	回転ナデ調整。高台貼り付けの為のナデ調整。	
141	皿	(20.2)	(2.2)	体部浅く外上方へ内側気味にのび、口縲端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。体部下半回転ヘラケズリ。	内面自然釉。外面灰かぶり。
142	皿	底径 (8.6)	(2.5)	平らな底部にやや高い「ハ」の字型高台を付す。端部は内・外下方につまみ出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ、高台貼り付けのナデ調整。	外面一部灰かぶり。
143	皿 (底部)	底径 (9.4)	(2.35)	平らな底部にやや高い「ハ」の字型高台を付す。端部は内・外方に短くつまみ出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナデ調整。	外面一部灰かぶり。
144	皿 (底部)	底径 (10.0)	(2.3)	底部にはやや高い「ハ」の字型高台を付す。端部は内・外に短くつまみ出し丸くおさめる。	回転ナデ調整。高台貼り付けのナデ調整。	
145	楕	(11.9)	(4.4)	体部内側しながら外上方にのび、口縲端部薄く外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
146	楕	(13.1)	(4.8)	体部内側しながら外上方にのび、口縲部外反する。端部薄く外向きに丸くおさめる。体部半ばに1条の沈線と浅い段差。	回転ナデ調整。	焼き正みあり。外面ひだすき底。
147	楕	(13.6)	(3.45)	体部内側しながら外上方にのび、口縲端部外向きにやや屈曲する。端部は丸く、器壁薄い。	回転ナデ調整。	
148	楕	(13.6)	(4.4)	体部内側しながら外上方にのび、口縲端部外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	焼き正みあり。
149	楕	(14.2)	(3.3)	口縲部まっすぐ外上方にのび、端部外向きに尖り気味におさめる。	回転ナデ調整。	内外面ひだすき底。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	高さ			
150	椀	(13.9)	(5.45)	体部内側しながら外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。体部半ばに1条の沈線ある。	回転ナヂ調整。	内外面ひだすき底。
151	椀	(14.9)	(4.45)	体部やや内側しながら外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。	回転ナヂ調整。	
152	椀	(15.2)	(4.65)	体部内側しながら外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。器壁かなり薄い。	回転ナヂ調整。	
153	椀	(15.3)	6.2	体部やや内側しながら外上方へのび、口縁端部尖り気味におさめる。底部平高台で内面に段をもつ。器壁は薄い。	回転ナヂ調整。底部条切り底。高台側面ナヂ調整。	外面灰かぶり?
154	椀	底径 (5.4)	(3.7)	体部は内側しながら外上方へのびる。底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
155	椀	底径 (5.4)	(4.0)	体部は内側しながら外上方へのびる。底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	底部一部ひびがはいる。
156	椀	底径 5.5	(2.65)	体部やや浅く内側しながら外上方へのびる。底部は平高台、内面に段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
157	椀	底径 (6.0)	(3.15)	体部丸みをおびて外上方へのびる。底部平高台。	回転ナヂ調整。底部不明、高台側面ナヂ調整。	
158	椀	底径 6.0	(3.2)	体部は内側ながら外上方へのびる。底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
159	椀	底径 6.0	(3.35)	体部は内側ながら外上方へのびる。底部は平高台。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
160	椀	底径 (6.1)	(2.35)	体部は丸みをおびて外上方へのび、底部は平高台。内面に段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
161	椀	底径 4.2	(1.1)	底部平高台、内面に段をもつ。底径かなり小さい。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
162	椀	底径 (5.2)	2.0	体部やや丸みをおびて外上方にのびる。底部平高台で内面には段をもつ。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	全体的に灰かぶり。
163	椀	底径 (6.0)	(1.65)	底部平高台。	回転ナヂ調整。底部回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	
164	椀	底径 (6.0)	(1.9)	体部は浅く外方にのび、底部は平高台。内面には浅い段をもつ。	回転ナヂ調整。底部内面仕上げナヂ、外面回転糸切り、高台側面ナヂ調整。	全面灰かぶり。

No	器種	法 葉(cm)		形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高			
165	椀	底径 6.2	(1.6)	底部平高台、内面には段をもつ。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台側面ナデ調整。	
166	椀	底径 5.65	(1.1)	底部いわゆるベタ高台で、そのまま体部へとのびる。	回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
167	壺	(9.5)	(2.85)	口縁部はナデ肩の体部から短く垂直に立ちあがり、端部は内・外上方に丸くつまみ出し頭を作る。	回転ナデ調整。	口縁端部に自然釉。
168	壺	(19.0)	(1.25)	口縁部は外上面に外反し、端部はさらに外下方におり、外上方に丸くつまみあげる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。 焼き亞みあり。
169	鉢	(13.9)	(3.35)	口縁部まっすぐ外上方にのび、端部は丸くおさめる。器壁はやや厚い。	回転ナデ調整。	焼成不良。
170	鉢	(21.7)	(6.3)	体部は内側しながら上方にのびる。口縁部「く」の字状に外反し、端部は外向きに丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
171	鉢	(22.6)	(5.1)	口縁部「く」の字状に外反し、端部はやや外下方向に丸くおさめる。体部に1条の沈線巡る。	回転ナデ調整。	
172	鉢	(25.8)	(4.8)	口縁部は「く」の字状に外反し、端部外下方向に丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
173	鉢	—	(5.8)	口縁部は「く」の字状に外反し、端部外方向に丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
174	鉢	—	(4.6)	口縁部「く」の字状に外反し、端部外方向に丸くおさめる。端部上方に1条の沈線巡る。	回転ナデ調整。	
175	蓋	(18.0)	(1.9)	天井部、ややふくらみをもち、口縁部との間に段を生じる。端部はやや尖り氣味に直角におりこむ。	天井部回転ヘラケズリの後ナデ調整。その他回転ナデ調整、内面もその後ナデ調整。	つまみの有無不明。
176	蓋	(18.6)	(2.8)	平坦な天井部と口縁部との間に段をもつ。口縁端部は外方向につまみ出す。	天井部回転ヘラ切り未調整。その他は回転ナデ調整。	つまみの有無不明。 外面重ね焼き痕、自然釉。
177	蓋	(16.7)	(3.5)	天井部からゆるやかに口縁部におりる。端部は外方向につまみ出す。	天井部回転ヘラケズリ、その他回転ナデ調整。	内外面自然釉。 焼き亞みあり。
178	蓋 (つまみ)	つまみ径 (2.8)	(1.95)	環状のつまみで、わずかに外方向に立ちあがる。	回転ナデ調整。つまみ貼り付けの為のナデ調整。	
179	蓋	(16.6)	(2.8)	ほぼ水平な天井部より口縁部へ直角におりる。端部は面をもつ。	天井部外側回転ヘラ切り、内面不定方向のナデ調整。その他回転ナデ調整。	外面自然釉。

No.	器種	法量(cm)		形態の特徴	枝法	備考
		口径	器高			
180	杯	(9.2)	(3.3)	体部ゆるやかに外上方へのびる。口縁部やや外方向に丸くおさめる。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後にナチ調整。	底部内面にヘラ記号「 」あり。外面部かぶり。自然釉。
181	杯	(9.6)	(3.8)	体部まっすぐに外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	外面部自然釉。
182	杯	(13.1)	3.0	体部まっすぐに外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後一部ナチ調整。	底部内面にヘラ記号「 」内外面にひだすき釉。
183	杯	(13.8)	(3.65)	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部また外向きに丸くおさめる。器壁や厚い。平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	
184	杯	(14.0)	(2.95)	体部まっすぐに外上方へのび、口縁部やや外向きに丸くおさめる。平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後不定方向のナチ調整。	外面部かぶり。
185	杯	(14.0)	3.4	体部やや引き気味にまっすぐ外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。平底。	回転ナチ、底部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	外面部ひだすき釉。外面部下部かぶり。
186	杯	(14.3)	(3.1)	体部まっすぐに外方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	外面部ひだすき釉。
187	杯	14.3	3.35	体部や立ちあがり気味に外上方へのびる。口縁端部丸くおさめる。平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	やや歪みあり。
188	杯	(14.9)	2.35	体部開き気味に外上方へのび。口縁端部は外向きに丸くおさめる。底部は平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	昔しい焼き蒸し。外面部灰かぶり。底部にヒル器片付着。
189	杯	(14.8)	3.05	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部外向きへ尖り気味におさめる。底部平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	底部内面にヘラ記号「/」。外面部、部分的に自然釉。
190	杯	(14.9)	3.55	体部下半に開みの段をもち、まっすぐ外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめ、底部は平底。	回転ナチ調整。底部内面仕上げナチ、外面部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	底部内面にヘラ記号「/」。外面部、部分的に自然釉。
191	杯	(15.0)	2.75	体部開き気味に外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部は平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼き蒸みあり。全体的に灰かぶり。外面部一部に自然釉。内面部にヒル器片付着。
192	杯	(15.3)	2.9	体部外上方へのび、口縁端部は外向きにやや尖り気味におさめる。底部は平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切りの後ナチ調整。	外面部にひだすき釉。
193	杯	(15.8)	3.1	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部やや外向きに丸くおさめる。底部は平底。	回転ナチ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	外面部自然釉。内面部ひだすき釉、砂粒付着。
194	杯	(11.0)	3.7	体部はまっすぐ外上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。底部には直立に立つる高台を付す。	回転ナチ調整。底部高台貼り付けの為のナチ調整。	外面部灰かぶり。

No.	器種	法 算(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
195	杯	(16.2)	6.65	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部はやや外向きに丸くおさめる。底部には直立氣味におりる高台を付す。	回転ナナ調整。底部高台貼り付けの為のナナ調整。	外面一部自然釉。
196	杯	(16.4)	6.5	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部はやや外向きに丸くおさめる。底部は平らで「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切りの後ナナ調整。高台貼り付けの為のナナ調整。	外面自然釉。
197	杯	(16.7)	7.0	体部やや内擽氣味に外上方へのび、口縁端部は外向きに丸くおさめる。底部には「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部高台貼り付けの為のナナ調整。	内外面灰かぶり。
198	杯	(16.6)	7.7	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部九くおさめる。底部は平らで「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切りの後ナナ調整。高台貼り付けの為のナナ調整。	底部内面へラ記号「×」あり。
199	櫛碗	(16.6)	(4.0)	体部半ばで明瞭な棱線をもち、そこから外反する。口縁端部は丸くおさめる。	回転ナナ調整。	外面自然釉。 内面灰かぶり。
200	櫛碗	(17.4)	(4.05)	体部半ばで棱線をもち外上方へのびる。口縁端部外につまみ出す。	回転ナナ調整。	外面灰かぶり。
201	皿	(17.8)	2.65	体部開き氣味にまっすぐのび、口縁端部は丸めり、面をもつ。底部「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部高台貼り付けの為のナナ調整。	内面自然釉。 外面灰かぶり。
202	皿	(22.05)	(2.6)	体部低くなだらかに外上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。	回転ナナ調整。	内面自然釉。 外面灰かぶり。
203	皿	底径 (8.3)	(1.9)	底部は平坦でやや高い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部外側切り難いの後ナナ調整。高台貼り付けの為のナナ。	外面灰かぶり。
204	皿	底径 (8.6)	(2.9)	底部平坦でやや細長い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナナ。	外面灰かぶり。
205	皿	底径 (8.7)	(2.65)	底部にやや高い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナナ。	内面灰かぶり。 外面自然釉。
206	皿	底径 (8.9)	2.6	底部内面浅い段をもち、やや高い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナナ。	内外面灰かぶり。 高台に移動付着。
207	皿	底径 (9.0)	3.5	底部平坦でなだらかに体部へのびる。やや高い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナナ。	内外面灰かぶり。
208	皿	(9.4)	(3.7)	底部平坦でなだらかに体部へのびる。やや高い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナナ調整。	外面自然釉。 底部外側重ね焼きの他上器片着。
209	蓋	(6.2)	(2.0)	口縁部外反しながらのび、縁部は内上方へつまみあげる。	回転ナナ調整。	内面灰かぶり。 外面自然釉。 やや重んでいる。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
210	壺	(8.7)	2.3	口縁部外反し、端部外下方に丸く、外上方に尖り氣味に引き出す。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
211	壺	(8.9)	2.5	口縁部ゆるやかに外反する。端部上下方に短く引き出し、面をつくる。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
212	壺	(8.9)	(2.1)	口縁部外反し、端部上下方に引き出し、面をつくる。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
213	壺	(9.4)	(2.4)	口縁部外反しながらのび、端部上下方に尖り氣味に引き出す。	回転ナナ調整。	内面自然釉。 外面灰かぶり。
214	壺	(9.1)	(4.9)	口縁部外反しながら外上方へのび端部尖り氣味に上方につまみあげる。	回転ナナ調整。	内外面灰かぶり。
215	壺	(15.2)	(5.1)	口縁部外反しながら外上方へのび、端部上方へ尖り氣味につまみあげる。	回転ナナ調整。	内面自然釉。 外面灰かぶり。
216	壺	(19.9)	(1.9)	口縁部開き氣味に外反しながらのびる。端部厚めに丸くおきめながら上方につまみあげる。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
217	壺	(25.2)	(8.15)	口縁部外反しながら外上方へのび、端部上と外に丸くつまみ上げる。	回転ナナ調整。	内面灰かぶり。 外面自然釉。
218	壺	—	(9.0)	体部はまっすぐ立ち上がり氣味に外上方へのびる。明瞭な継ぎをもち、内側に屈曲し、颈部までのびる。	回転ナナ調整。	全面灰かぶり。
219	壺	(14.05)	(8.1)	体部上半丸味をもち内上方へのびる。口縁端部上方へつまみ上げる。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
220	壺	14.5	(12.5)	体部まっすぐ外上方へのび、口縫部をもち内側に屈曲する。颈部は外反しながら外上方へのび、口縁端部は上方に屈くつまみ上げる。	回転ナナ調整。	内外面自然釉。
221	壺	—	(13.3)	体部まっすぐ外上方へのび、颈部明瞭な継ぎをもち内側に屈曲する。颈部やや外反しながら外上方へのびる。体部に1条の沈線違る。	回転ナナ調整。	内面自然釉。 外面灰かぶり。 焼き歪みあり。
222	壺 (底部)	底径 (11.5)	(4.0)	底部平底。体部まっすぐ外上方へのびる。	回転ナナ調整。体部外周回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリの後ナナ調整。	内外面灰かぶり。
223	壺 (底部)	底径 (13.2)	(6.75)	底部平底。体部やや外反しながら外上方にのびる。	回転ナナ調整。体部外周回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリの後ナナ調整。	内面灰かぶり。 外面自然釉。
224	壺 (底部)	底径 (6.0)	(5.2)	体部内擡しながら外上方へのびる。底部には底立氣味により高台を付す。	回転ナナ調整。高台貼り付けの為のナナ調整。	

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	筋高			
225	壺(底部)	底径 (11.0)	(7.35)	体部外上方へまっすぐのびる。底部には「へ」の字型高台を付す。底部下に沈線2本みとめられる。	回転ナデ調整。体部下半回転ヘラケズリ。底部高台貼り付けの為のナデ調整。	内面自然釉。外面灰かぶり。
226	壺(底部)	底径 (11.1)	(8.35)	体部外上方へまっすぐのび、底部には「へ」の字高台を付す。	回転ナデ調整。体部下半回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナデ調整。	内外面自然釉。
227	壺(底部)	底径 (12.0)	(6.8)	体部や外反気味に外上方へのびる。底部は平らで「ハ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。体部下半回転ヘラケズリ。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。高台貼り付けの為のナデ。	内外面自然釉。底部内面突起付着。焼き重みあり。
228	壺(底部)	底径 (11.1)	(6.0)	体部はまっすぐ外上方へのび、平らな底部に「へ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。体部下半回転ヘラケズリ。高台貼り付けの為のナデ調整。	内面灰かぶり。外面白自然釉。
229	壺(底部)	底径 (15.0)	(4.9)	体部内側気味に外上方へのび、底部には「へ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。体部回転ヘラケズリ。高台貼り付けの為のナデ調整。	
230	壺(底部)	底径 (14.5)	(3.45)	底部は中央回む。「ハ」の字型高台を付す。	内面不定方向のナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けの為のナデ調整。	外面灰かぶり。焼き重みあり。
231	壺(底部)	底径 (15.4)	(4.2)	体部内側気味外上方へのび、底部には高い「へ」の字型高台を付す。内面浅い段をもつ。	回転ナデ調整。体部回転ヘラケズリ。高台貼り付けの為のナデ。	
232	無頸壺	(15.8)	(3.6)	内傾した口縁で、器壁は厚い。端部は丸く面を作り、1条の沈線が巡る。	粘土紐巻き上げ成形。回転ナデ調整。	
233	無頸壺	(18.4)	(5.15)	口縁内傾しながらまっすぐ上方へのびる。端部は面を作り1条の沈線が巡る。	粘土紐巻き上げ成形。内面タキのあとナデ消し、外面横方向のタキ。	外面灰かぶり。
234	短頸壺	(10.95)	2.4	口縁部はややナデ肩の体部から短く垂直に立ちあがり、端部は水平に面を作る。	回転ナデ調整。	全体的にやや灰かぶり。
235	短頸壺	(9.95)	(3.45)	口縁部はナデ肩の体部から短く垂直に立ちあがり、端部は水平に面を作る。	回転ナデ調整。	全体的にやや灰かぶり。
236	短頸壺	(10.9)	(3.3)	口縁部はややナデ肩の体部から短く垂直に立ちあがり、端部は水平に面を作る。	回転ナデ調整。	内面自然釉 外面灰かぶり。
237	短頸壺	(10.1)	(2.15)	体部外反し、張った肩をもち、口縁はすぐ短く垂直に立ちあがる。端部水平に面をもつ。	回転ナデ調整。	体部外面白自然釉。
238	鉢	(21.6)	(5.3)	体部内側しながら上方へのび、口縁部内傾し面を作る。いわゆる鉄鉢型。	回転ナデ調整。外面口縁近くまで回転ヘラケズリ調整。	焼成不良。
239	鉢	—	(4.6)	体部は外上方へまっすぐのび、口縫端部は面を作る。	回転ナデ調整。	外面やや灰かぶり。

No	器種	法量(cm)	形態の特徴	技法	備考
		口径 器高			
240	壺	(11.2) (4.75)	口縁部外上方へやや外反気味にのび、端部外につまみ出し、水平の面を作る。	回転ナデ調整。	内外面灰かぶり。
241	壺	(11.0) (4.0)	口縁部は肩の張った体部からやや外反気味に上方へのび、端部は丸味をおびた面をもち1条の沈抜がある。	回転ナデ調整。体部内面その後ユビおさえ。	内外面灰かぶり。
242	甕	(23.6) (5.3)	頸部は外反し口縁部はさらに関外へ屈曲し、腹部は丸くつまみあける。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。 外面自然釉。 外面ヘラ記号「×」。
243	甕	(25.5) (10.2)	頸部はナデ肩の体部から外反しながら上方へのびる。口縁部外下方につまみ出し丸くおさめる。	粘土紐巻きあげ成形。回転ナデ調整。体部外面横方向の平行タタキ、内面タタキの後ナデ消し。	外面自然釉。
244	甕	(28.0) (10.6)	頸部はナデ肩の体部から外反しながら上方へのびる。口縁部さらに外方へ屈曲し、腹部は内方に短くつまみあげ、丸くおさめる。	粘土紐巻きあげ成形。回転ナデ調整。体部外面横方向の平行タタキ、内面タタキの後ナデ消し。	外面自然釉。
245	甕	(31.0) (6.0)	頸部は外反しながら上方へのび、口縁部さらに外方へ屈曲する。腹部は上に丸く氣味に短く引き出し、面を作る。	粘土紐巻きあげ成形。回転ナデ調整。体部外面横方向の平行タタキ、内面タタキの後ナデ消し。	内外面灰かぶり。
246	杯	(13.2) 3.7	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部丸くおさめる。底部平底で、体部に比べてやや厚い。	回転ナデ調整。底部内面仕上げナデ、外面回転ヘラ切りの後ナデ調整。	外面灰かぶり。
247	杯	(13.3) 3.1	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部丸くおさめる。底部平底でやや中央盛り上がり。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	
248	杯	(13.8) 2.8	体部外上方へのび、口縁部立ち上がり氣味に丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切りの後ナデ調整。	内外面自然釉。 焼き歪みあり。底部外面側上部片付着。
249	杯	(16.2) (5.05)	体部まっすぐ外上方へのびる。	回転ナデ調整。	
250	椀	(13.7) (4.55)	体部内壁しながら外上方へのび、口縁部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
251	椀	(14.0) (5.4)	体部内壁しながら外上方へのび、口縁外には凹みがあり、端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	
252	椀	(15.4) (4.3)	体部内壁しながら外上方へのびる。口縁外間に凹みがあり端部は丸い。体部半ばに3条の沈抜を施す。	回転ナデ調整。	
253	椀	(15.0) (5.6)	体部内壁しながら外上方へのびる。口縁外間に凹みがあり、端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内面他上器片付着。
254	椀(底部)	底径 4.0 (1.7)	底部や小振りで内面には凹部をもつ。平高台。	回転ナデ調整。底部回転未切り、高台側未調整。	

No.	器種	法 基(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
255	椭(底部)	底径 (4.9)	(2.7)	体部開き気味にのび、底部平高台で内面に凹部をもつ。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台側面未調整。	
256	椭(底部)	底径 (6.1)	(2.0)	体部開き気味にのび、底部平高台で内面に浅い凹部をもつ。	回転ナデ調整。底部回転糸切り、高台側面未調整。	
257	壶(突唇)	—	—	1条の突唇と耳をもつ。突唇部近から内側しながらのびる。耳は下半を欠損。	回転ナデ調整。外側突唇貼り付け後にナデ、耳はユビでナデて貼り付け。	内外面自然釉。
258	壶(突唇)	—	—	1条の突唇と耳をもつ。まっすぐの突唇部に突唇が溢る。耳は突唇部に密着し、平面的には四角く、小さい。	回転ナデ調整。外側突唇貼り付け後はナデ、耳はユビでナデて貼り付け。	外面自然釉。
259	蓋	(18.2)	(1.8)	天井部平らで口縁部にむかってなだらかにおり、端部は下方におりこみ、やや外向きに尖る。	天井部回転へラ切り、その後は回転ナデの後、一部ナデ調整。	
260	杯	(12.4)	3.1	体部外上方にのび、口縁部外向外に丸くおさめる。底部は平底でやや厚い。	回転ナデ調整。底部回転へラ切りの後ナデ調整。	内外面ひだすき痕。
261	杯	(15.0)	3.5	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部わざわざに外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転へラ切り未調整。	底部外側にヘラ記号「」あり。
262	椭	底径 3.2	1.25	平底。底部内面に浅い段をもつ。	底部内面ユビナデ調整。外側回転糸切り高台側面ナデ調整。	焼成不良。
263	皿	(22.5)	2.2	体部ゆるやかに外方向へのび、口縁部から外上方にのびる。邊部は上方につまみあげる。	回転ナデ調整。	内面灰かぶり。 外面自然釉、窓壁付着。
264	片口鉢	—	—	体部内側しながら上方にのび、口縁部で外反する。端部は丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内外面灰かぶり。
265	蓋	(17.6)	3.6	ほぼ水平な天井部よりわずかに外反しながら外下方向へ下る。口縁部は下部へおりこみ丸くおさめる。	回転ナデ。天井部回転へラ切り、回転へラケズリの後ナデ調整、つまみ貼り付けのナデ調整。	口縁部外面自然釉、窓ね焼き痕。
266	蓋	17.6	4.2	天井部ややふくらみ、ゆるやかに外下方に下る。口縁部は下方へおりこみ丸くおさめる。	回転ナデ調整。片口部回転へラ切り、回転へラケズリの後ナデ調整、つまみ貼り付けのナデ調整。	口縁部外面自然釉、窓ね焼き痕。
267	蓋	(16.0)	(2.1)	ほぼ水平な天井部からゆるやかに外下方に下る。口縁部は外下方へつまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転へラ切りの後ナデ調整、内面上げナデ。	口縁部外面自然釉、窓ね焼き痕。天井部内面重ね焼き痕。
268	蓋	(17.7)	(1.9)	天井部からなだらかに口縁部に下り、廟部は外下方向に短くつまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転へラ切り、回転へラケズリの後ナデ調整。	内外面重ね焼き痕。
269	蓋	(17.6)	(1.0)	天井部平坦で低く、口縁部との間に段を生ず。口縁部は外下方向につまみ出す。	回転ナデ調整。天井部回転へラ切りの後ナデ調整。	内外面灰かぶり、一部自然釉、つまみ欠損。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
270	蓋	(17.8)	(1.45)	天井部平坦で低く、口縁部やや外反しながら下る。端部外下方に向かって丸くつまみ出す。	回転ナナ調整。天井部回転ヘラケズリの後ナナ調整。	つまみ欠損。
271	蓋	(23.5)	(1.7)	天井部は中央凹み、半ばで盛りあがり口縁部までなだらかに下る。端部は下方に向かって丸くおさめる。	回転ナナ調整。天井部回転ヘラカズリ、ケズリの後ナナ調整。	焼き痕みあり。
272	杯	(9.6)	(3.45)	体部は内側気味に外上方へのび、口縁部は外向きに丸くおさめる。底部平底器壁は全体に薄い。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ未調整。	内外面自然釉。焼き痕みあり。
273	杯	(12.2)	3.2	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部尖り気味におさめる。底部平底でやや厚い。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ未調整。	底部内面にヘラ記号「/」、内面ひだすき痕。
274	杯	(13.4)	3.2	体部まっすぐ外上方へのび、端部丸くおさめる。底部平底でやや中央盛りがある。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリの後、不定方向のナナ調整。	内面にひだすき痕あり。
275	杯	(13.8)	2.4	体部開き気味にまっすぐのび、端部丸くおさめる。底部平底で中央盛りがある。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ未調整。	内外面灰かぶり。底部自然釉。
276	杯	(13.9)	2.95	体部開き気味にまっすぐのび、口縁部を丸くおさめる。底部平底。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ後不定方向のナナ調整。	
277	杯	(14.55)	2.6	体部開き気味にまっすぐのび、口縁部丸くおさめる。底部平底。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ未調整。	
278	杯	(14.7)	(3.3)	体部まっすぐ外上方へのび、口縁部丸くおさめる。底部平底。	回転ナナ調整。底部灰かぶりで不明。	内外面灰かぶり。底部高台の有無は不明。
279	杯	(14.9)	2.8	体部は開き気味にまっすぐ外上方へのび、口縁部丸くおさめる。底部平らでやや中央盛りがある。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ?	全面灰かぶりで著しく器表面あれある。内面に窓跡付着、焼き痕みあり。
280	杯	(15.0)	3.15	体部は開き気味にまっすぐ外上方へのび、口縁部はやや外向きに丸くおさめる。底部平らで中央盛りありあり、やや厚い。	回転ナナ調整。底部回転ヘラカズリ、ナナ調整。	
281	杯	(12.9)	3.9	体部は内側気味に外上方へのび、口縁部やや外向きに丸くおさめる。底部にはほぼ直立する高台を付す。	回転ナナ調整。底部高台貼り付けの為のナナ調整。	全面灰かぶり。内面一部自然釉。
282	杯	(14.4)	5.95	体部は内側気味に、半ばからまっすぐ外上方へのびる。口縁部丸くおさめる。底部にはほぼ直立する高台を付す。	回転ナナ調整。底部高台貼り付けのナナ調整。	
283	杯	(17.0)	6.4	体部わずかに内側気味に外上方へのび、口縁部やや外向きに丸くおさめる。平底な底部には、低い「ハ」の字型高台を付す。	回転ナナ調整。底部ヘラカズリ後不定方向のナナ、高台貼り付けのナナ調整。	全面灰かぶり。
284	杯 (底部)	底径 9.5	(2.7)	ほぼ平坦な底部に直立する高台を付す。	回転ナナ調整。底部ヘラカズリ未調整。高台貼り付けのナナ調整。	底部内面ヘラ記号「ハ」あり。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技法	備考
		口径	器高			
285	杯 (底部)	底径 (10.1)	(4.1)	体部内壁気味に外上方へのび、底部には低い「ハ」の字型高台付す。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り後、ナダ。高台貼り付けのナダ調整。	
286	杯 (底部)	底径 (11.9)	(2.7)	ほぼ平坦な底部に直立する高台を付す。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り未測定。高台貼り付けのナダ調整。	底部外面にヘラ記号「小」あり。内・外・表面に自然釉。内部に後土器片、窓壁付着。
287	杯 (底部)	底径 (13.6)	2.45	平坦な底部に直立する高台を付す。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り後、一部ナダ調整。	底部外面にヘラ記号「大」とつめ型圧痕あり。
288	杯	(19.9)	4.15	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部には低く直立する高台を付す。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り後ナダ、高台貼り付けのナダ調整。	
289	皿	(15.9)	(2.35)	体部短く外反しながら外上方へのび、端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り未測定。	内外面自然釉。外面部縁付着。焼き垂みあり。
290	皿	(16.8)	(1.7)	体部低く外上方へのび、口縁端部やや外反し丸くおさめる。	回転ナダ調整。	外面灰かぶり。口縁部内面重ね焼痕。
291	壺 (口縁)	(11.2)	(6.3)	頸部はナデ肩の体部から外上方にやや外反しながらのびる。口縁端部は外向きにつまみ出し、水平の面を作る。	回転ナダ調整。	内外面灰かぶり。やや焼き垂みあり。
292	甕	(27.5)	(5.35)	頸部外反しながら外上方へのび、端部は内上方にわずかにつまみあげる。	回転ナダ調整。	全面灰かぶり。火ぶくれあり。
293	蓋	(16.8)	(2.5)	天井部ややふくらみ、ゆるやかに外下方に下る。口縁端部は下方へ折りこみ外向きに尖り気味におさめる。	回転ナダ調整。天井部回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り未調査。つまみ貼り付けのナダ調整。	内面にヘラ記号。内・外・口縁部に自然釉。外面部重ね焼痕。つまみ欠損。
294	蓋	(17.5)	(2.5)	天井部ややふくらみ、ゆるやかに外下方に下る。口縁端部外下方へ尖り気味につまみ出す。	回転ナダ調整。天井部回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り後ナダ調整。	口縁部外面灰かぶり自然釉。天井部に後土器片付着。
295	蓋	(18.55)	3.7	天井部ややふくらみ、ゆるやかに外反しながら外下方に下る。口縁端部内下方に折りこみ丸くおさめる。中央がやや高い扁平なつまみを有す。	回転ナダ調整。天井部回転ヘラ切り後ナダ調整。つまみ貼り付けのナダ調整。	天井部内面にヘラ記号「/」。口縁部外面自然釉。重ね焼痕、焼き垂みあり。
296	蓋	(19.0)	2.95	天井部からなだらかに外下方に下り、口縁部でわずかに外反し段を作す。端部は外下方に丸くおさめる。扁平なつまみを有す。	回転ナダ調整。天井部回転ヘラケズリ、ヘラ切りナダ調整。つまみ貼り付けのナダ調整。内面往上げナダ。	
297	蓋	(18.05)	(1.45)	天井部低く平坦にのび、口縁部との間に段をもつ。端部は下に尖り気味につまみだす。	回転ナダ調整。天井部回転ヘラケズリ、ヘラ切り未調査。つまみ貼り付けのナダ調整。	内面灰かぶり。外面白自然釉。焼き垂みあり。
298	杯	(10.25)	3.5	体部内壁気味に外上方へのび、口縁部やや外反しながら丸くおさめる。	回転ナダ調整。底部回転ヘラ切り未測定。	外面一部灰かぶり。焼き垂みあり。
299	杯	(13.3)	(2.85)	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナダ調整。	内面にヘラ記号「！」複数あり。外面部灰かぶり。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		日径	基高			
300	杯	(13.3)	3.2	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	焼き垂みの為、中央に大きくなりびが入る。外面ひだすき板。
301	杯	(13.8)	3.05	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部や外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り後不定方向のナデ調整。	外面ひだすき板。
302	杯	(14.4)	3.3	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。内面、仕上げナデ調整。	
303	杯	(14.85)	3.1	体部やや開き気味にまっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	外面ひだすき板。
304	杯	(15.0)	2.6	体部開き気味にまっすぐ外上方へのび、口縁端部や外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。	内外面灰かぶり、自然釉。底部外面窓ね焼き痕、内面には窓壁付着。
305	杯	(15.0)	2.75	体部開き気味に外上方へのび、口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り後不定方向のナデ調整。	内外面灰かぶり。一部自然釉。底部外面窓壁付着。
306	杯	(12.2)	3.6	体部まっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。平坦な底部に直立する高台を付す。器壁全体的に薄い。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナデ調整。	内面灰かぶり、外面一部自然釉。焼き重みあり。口縁端部に窓壁付着。
307	杯	(15.0)	7.6	体部は丸くおびて外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。平坦な底部にはやや内側にふんばる高台を付す。	回転ナデ調整。底部切り離し後ナデ調整。高台貼り付けのナデ調整。内面仕上げナデ調整。	内外面灰かぶり。底部内面自然釉。焼き垂みあり。
308	杯	(14.9)	6.7	体部は丸くおびて外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部には直立するやや低い高台を付す。	回転ナデ調整。高台貼り付けのナデ調整。	
309	杯	(17.8)	(4.1)	体部はまっすぐ外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	外面自然釉。
310	小皿	(11.0)	(1.9)	体部やや丸くおびて外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナデ調整。	内外面灰かぶり。
311	皿	(17.9)	(1.95)	体部外反しながら外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。底部平底。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り後不定方向のナデ調整。	
312	皿	底径 (8.9)	(2.6)	底部に高い「ハ」の字型の高台を付す。	回転ナデ調整。	内外面灰かぶり、自然釉。
313	皿	底径 (8.4)	(3.8)	体部やや開き気味にまっすぐ外上方へのびる。ほぼ平らな底部に、「ハ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナデ調整。	全面灰かぶり、外面に窓壁付着。
314	皿	底径 (8.8)	(3.7)	体部やや開き気味にまっすぐ外上方へのびる。底部中央や盛り上がり、「ハ」の字型高台を付す。	回転ナデ調整。底部ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナデ調整。	全面灰かぶり。

No	器種	法量(cm)		形態の特徴	技 法	備 考
		口径	器高			
315	椀	(13.8)	(5.3)	体部は内擣しながら外上方へのび、口縁端部は外向きに丸くおさめる。底部平高台。器壁は薄い。	回転ナテ調整。底部回転糸切りか?	やや歪みあり。
316	椀	(14.4)	6.05	体部下まで聞き気味にのび、そこからまっすぐ外上方へのびる。口縁端部外向きに丸くおさめる。底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナテ調整。底部回転糸切り。高台側面ナテ調整。	内外面ひだすき底。
317	椀	(16.0)	(6.0)	体部内擣しながら外上方へのび、口縁端部丸り気味におさめる。底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナテ調整。底部分明。	内面ひだすき底。焼成や不良。
318	椀	(14.9)	(4.65)	体部は内擣しながら外上方へのび、口縁端部丸くおさめる。	回転ナテ調整。	内面ひだすき底。
319	椀	底部 4.5	(2.2)	底部平高台。内面には浅い段をもつ。	回転ナテ調整。底部回転糸切り。高台側面未調整。	
320	椀	底径 4.95	(1.8)	底部平高台。内面わずかに浅い段をもつ。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	内面灰かぶり。
321	椀	底径 5.6	(3.05)	体部内擣しながら外上方へのびる。底部平高台、内面には浅い段をもつ。体部下半に2条の沈線道る。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	
322	椀	底径 (6.5)	(2.8)	体部内擣しながら外上方へのびる底部平高台で内面に段をもつ。	回転ナテ調整。底部回転糸切り、高台側面ナテ調整。	内外面ひだすき底。
323	壺 (口縁)	(11.0)	(2.8)	頸部は直立し、口縁端部は倒を作る。	回転ナテ調整。	
324	壺	(15.6)	(5.45)	頸部は外反しながら外上方へのびる。口縁端部は上方へつまみあげる。	回転ナテ調整。	内面自然釉。外表面灰かぶり。
325	壺 (底部)	底径 (5.95)	(3.1)	体部まっすぐ外上方へのびる。底部、中央やや回み、「ハ」の字型の高台を付す。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切り未調整。高台貼り付けのナテ調整。	
326	壺 (底部)	底径 (12.1)	4.2	平坦な底部に「ハ」の字型高台を付す。	回転ナテ調整。底部回転ヘラ切りの後ナテ調整。高台貼り付けのナテ調整。	外表面自然釉。
327	鉢	(27.0)	3.2	体部は外上方にのびる。口縁端部は外方へつまみ丸くおさめ、上部に水平な面を作る。	回転ナテ調整。	全面灰かぶり。
328	鉢	(25.2)	(4.4)	体部は内擣しながらのび、頭部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部丸くおさめる。	回転ナテ調整。	内外面一部灰かぶり。
329	鉢	(26.0)	(4.8)	体部内擣気味に立ち上がり、頭部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部丸くおさめる。	回転ナテ調整。	

V. 戸井町坪遺跡の調査

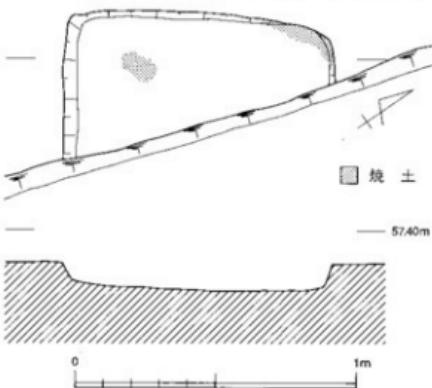
戸井町坪窯跡群の調査によって、窯跡以外に焼土壙を4地区で確認している。それゆえ、戸井町坪遺跡として報告する。

焼土壙は、A-I地区で3基、A-II地区で1基、D地区とE地区で各1基、F地区で2基の合計8基を確認している。検出した地区は異なるが、造構の性格は同種のものと思われるので、合わせて報告するものである。

1. SK01 (A I 地区)

確認調査によって確認された土壙である。戸井町坪1号窯の北東部に位置する。谷奥部へ延びる里道で削平されており、全容は不明である。窯跡の立地する斜面が緩やかになる地形変換点に築かれており、標高57.25mの等高線に直交するように構築されている。残存部は0.6mと僅かである。他の土壙と同じく焼土が見られ、炭が充満しており、同種の造構と考えられる。ただ、小口部に見られる突出部は認められなかった。小口部の幅は0.95mで、深さは他の造構と同じように浅く5cm前後である。最も比高差のあるところでも0.15mである。近接してSK02が築かれている。

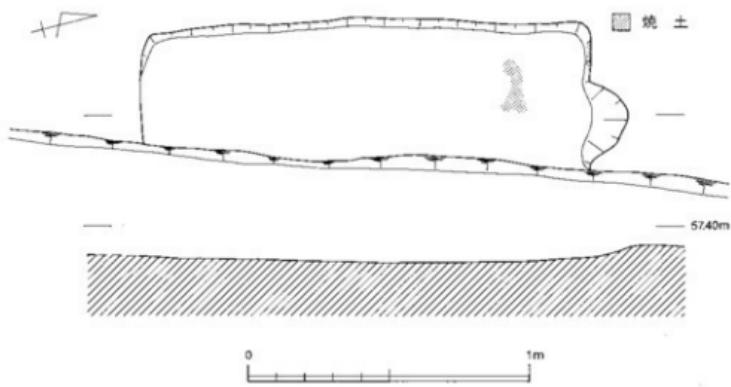
確実に造構に伴う遺物は検出されなかった。



第49図 SK01実測図

2. SK02 (A I 地区)

確認調査によって確認された土壙である。SK01と同じ戸井町坪1号窯の北東部に位置する。SK01と異なり等高線にはほぼ平行に築かれている。SK01の南側に位置しており、1.2mと近接して築かれている。やはり、里道によって削平を受けているが、全体像は推測できる程度の損壊である。現状での長さ1.8m、幅0.55mを測る。北側小口に突出部が認められる。径0.3mの半円形の突出部である。ただ、幅はもちろんのこと、長さもやや増える可能性はある。焼土面は南側には広がっていない。SK01と比べると、焼土は少なく、また炭も全体に包含しているわけではない。



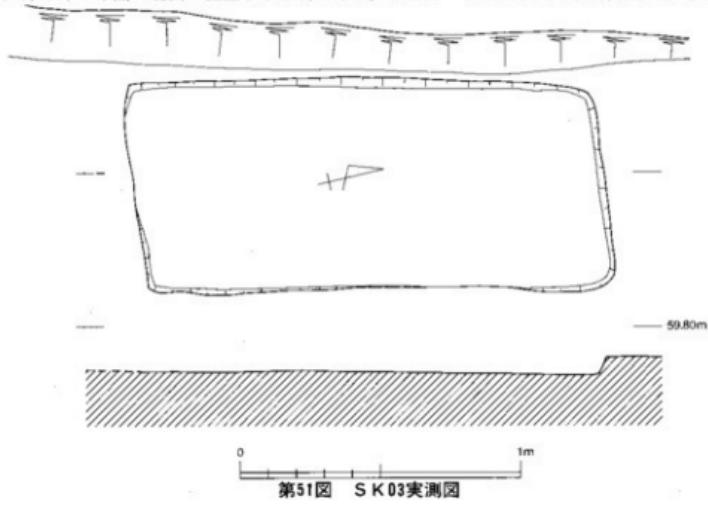
第50図 SK02実測図

深さは浅く、3～5cmである。長軸を主軸とした方位は、N13°Eである。

造構に確実に伴う遺物はないが、「小」のヘラ書きのある杯はSK02の東側から出土している。

3. SK03 (A I 地区)

戸井町坪1号窯の北側に位置する土壙である。SK01・SK02と異なり斜面上に立地してい



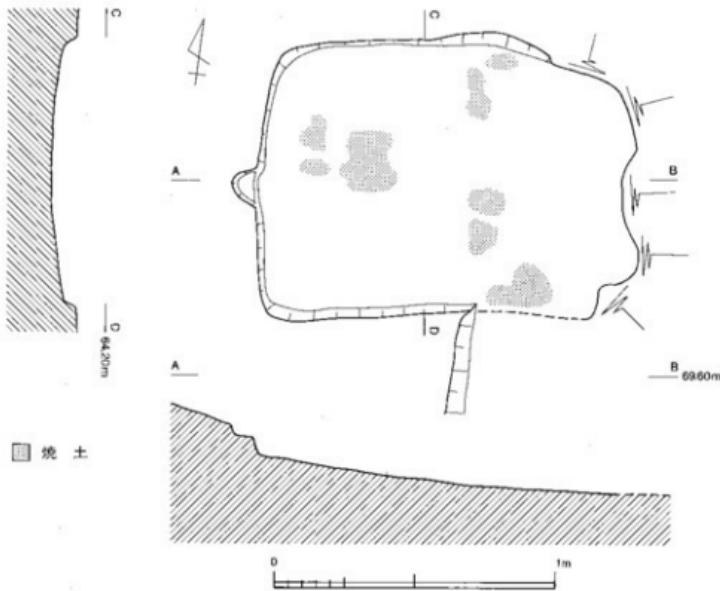
第51図 SK03実測図

る。ただ、斜面上ではあるが、緩やかな部分に占地している。標高59.50mに築かれている。水平距離でSK02と5.5m離れている。SK01と異なり等高線には平行に築かれているが現在の地形には即していない。主軸を東に振っている。戸井町坪1号窯の前庭部に接して築かれており、窯構築に伴う地形の変化による等高線に平行に築かれている。そのため、構築時期が戸井町坪1号窯より後の時期と考えられるのも可能かと思われる。斜面上に立地していることから、自然流失によって損壊を受けている。現状での長さ1.7m、幅0.8mを測る。突出部は認められない。ただ、流失していることから、長さはやや増える可能性はある。焼土は少ないが、炭は全体に広がっている。深さは浅く、3~5cmである。主軸方位はN14°Eである。

遺構に確実に伴う遺物はない。

4. SK04 (A-II地区)

A-II地区西側、斜面上方に位置し、標高は63mを測る。調査区の東側、斜面下方には炭窯が近接する。土壤は表土を除去した段階で検出され、土壤東側は後為的な土砂の流出によって消失している。土壤は傾斜角17°の緩斜面に4×3mの規模で平坦面を削り出し、その後土壤を



掘削している。平面形は遺存状況が悪く不明瞭であるが、他の土壙出土例から判断して、斜面上方、西側の短辺に半円形の突出部をもつ隅丸長方形を呈すると考えられる。土壙底面は斜面上方に向かって7°の傾斜で上がり、土壙西端で段差をもって突出部へ移行する。突出部底面は平坦である。規模は、遺存するもので短軸方向0.97m、長軸方向1.3mを測り、検出面からの深さは20cmを測る。長軸方向はほぼ東を向く。

土壙内の埋土は2層確認された。上層は炭・焼土混じりの土で、下層は炭が5~10cmの厚さで堆積していた。炭層を除去した土壙底面には8箇所の焼土塊が確認され、土壙内で火を使用していたことが窺える。遺物は出土しなかった。

5. SK05 (D地区)

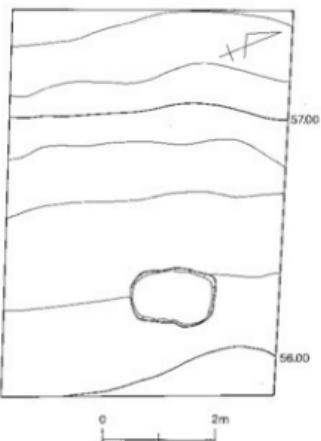
D地区は北東側に張り出した尾根の先端、東側斜面裾部に位置する。土壙はこの約20°の勾配をもつ斜面から平坦面への移行部に掘削されている。標高は56.25mを測る。

土壙は表土を除去した段階で検出された。土壙の平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。長軸方向1.48m、短軸方向1.0mを測る。深さは東側で2cm、西側で6cmを測り、斜面側が深い。主軸方位はN27°Eである。

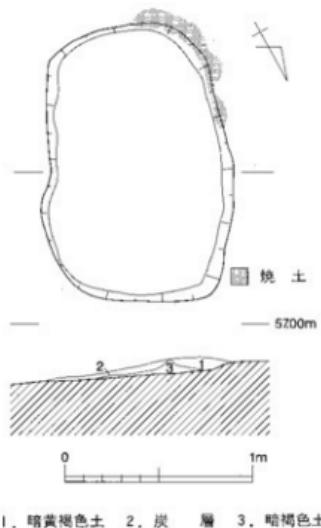
D区南壁の土層観察では土壙は人為的な削平を受けていると推察される。土壙の南西隅周壁は長さ90cmにわたって赤化し、土壙内で火を使用したことが窺える。土壙底面には火を受けた痕跡は認められなかった。

土壙内の埋土は3層に別れる。上層と下層は焼土混じりの埋土で、間層には炭層が堆積している。

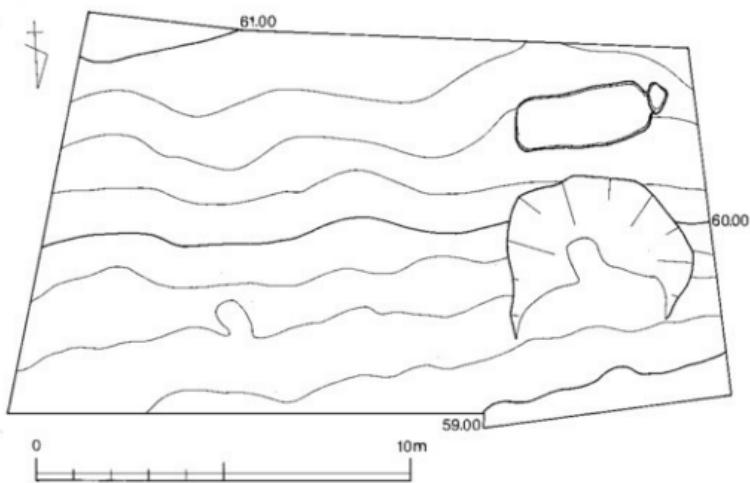
遺物は上層より須恵器の細片が出土したが、器種



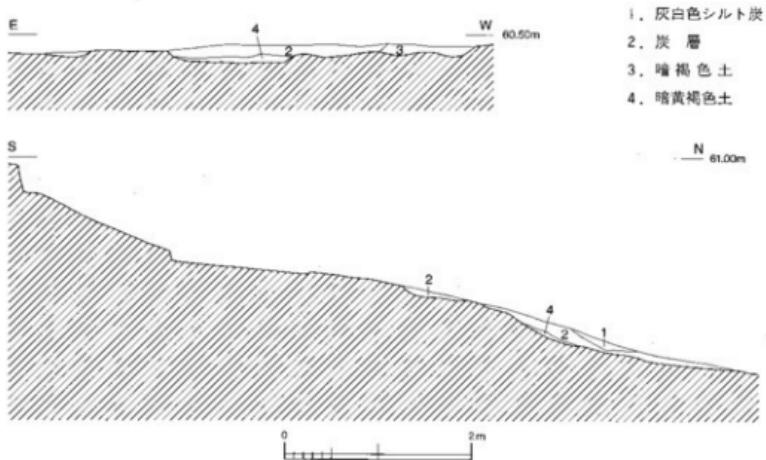
第53図 D地区 地形測量図



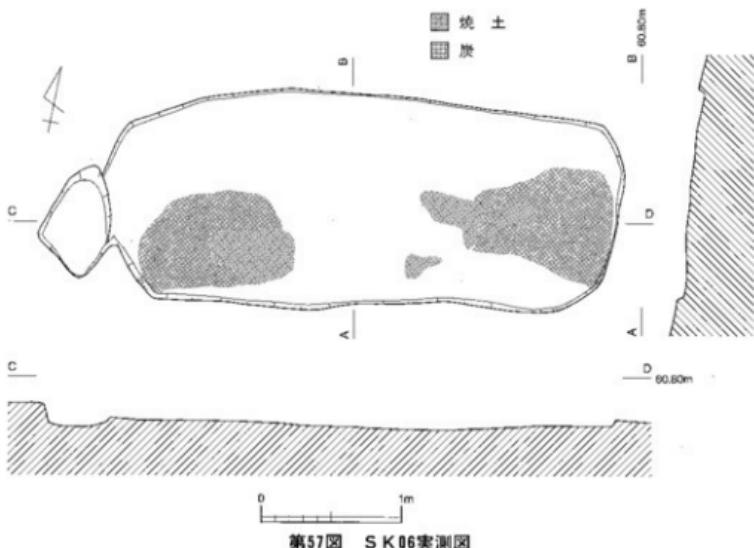
第54図 SK05実測図



第55図 E地区 地形測量図



第56図 SK06 土層断面図



第57図 SK 06実測図

等は不明である。

6. SK 06 (E地区)

東側に張り出した尾根の東向き斜面裾部に立地する。約22°の勾配をもつ斜面を幅4m、長さ7.5mの範囲で平坦に削り出し、等高線と平行して土壙を掘削している。標高は58.5mを測る。土壙は表土を除去した段階で検出された。

土壙の平面形は西側に不整円形の突出部をもち、東西方向に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸方向4.06m、短軸方向1.55mで、検出面からの深さは10~20cmを測る。長軸方向はほぼ東西方向を向く。土壙底面は東西方向にはほぼ平坦で、突出部で6cm深くなっている。南北方向は約10°の傾斜で斜面下方に傾く。土壙底面の東隅は1×0.7mの範囲、西隅は1.4×0.7mの範囲で赤化・黒化している。また周壁も部分的に赤化しており、土壙内で火を使用したことが窺われる。土壙内の埋土は3層に分かれる。上層は炭・焼土層が堆積し、下層の2層は焼土・炭片を含む褐色の土が堆積する。

土壙の北側斜面には平面形が半円状の灰原が確認され、灰原のなかには炭・灰層が15~20cmの厚さで堆積している。灰原の規模は2.5×2.0mを測る。

土壙内から遺物は検出されなかったが、土壙北側の灰原より須恵器の細片が1点出土してい

る。土壌北側の灰原は、土壤内で火を使用した痕跡あること、土壤との位置関係から判断して土壤内で生じた炭等の廃物を焼き出した痕跡と考えられる。

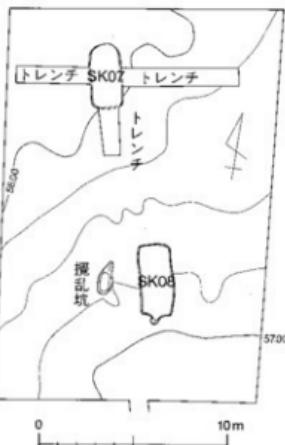
1. SK07 (F地区)

B地区谷部からの土砂の堆積によって形成された扇状地の先端部に位置する。土壤は表土を除去した段階で検出され、標高56mを測る等高線に直交して掘削されている。同調査区内では約7m南側にSK08が位置する。

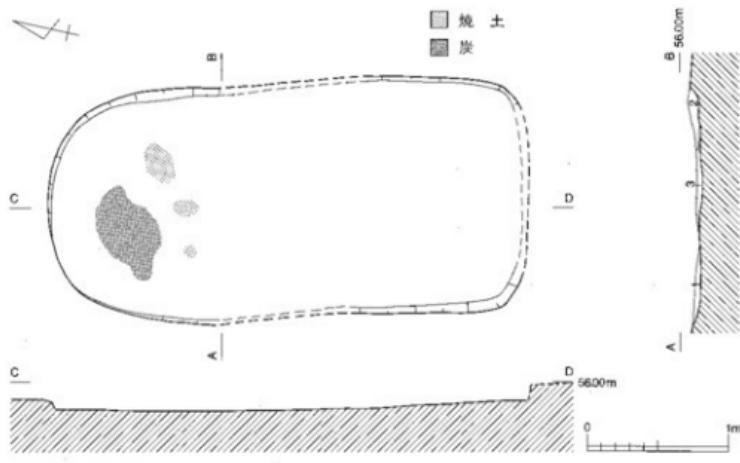
土壤は木の根等の擾乱を受け、遺存状況が悪く、平面形・規模等に不明瞭な点を残す。平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈していると考えられる。突出部の有無については確認できなかった。

土壤の規模は長軸方向3.4m、短軸方向1.68mを測り、検出面からの深さ8cmと比較的浅い。

長軸を主軸とした方位はN12°Wである。土壤底面は多少凹凸をもつ。土壤内の埋土は3層に分かれ、いずれも炭・灰・焼土を多量に含んでいる。土壤内北側には焼土塊、小さな炭化材が

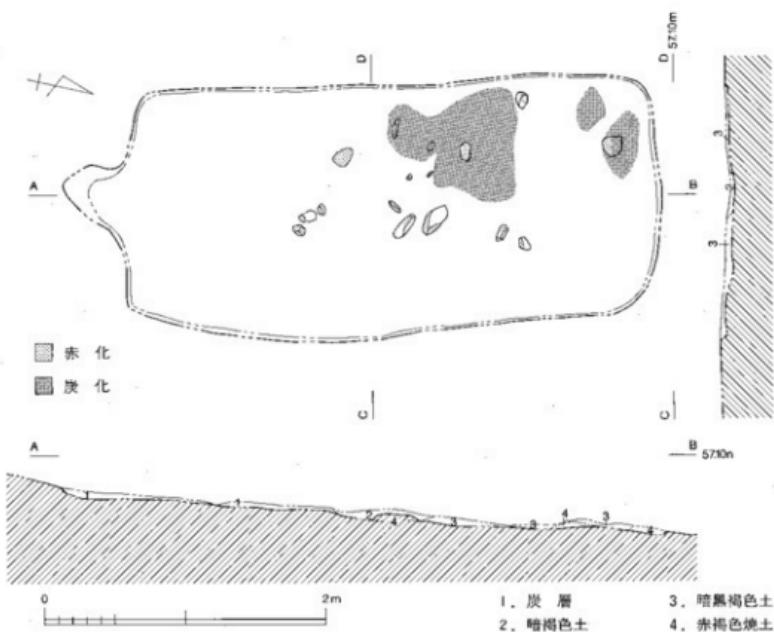


第58図 F地区 地形測量図



1. 黒褐色炭層 2. 噴褐色炭灰混じり 3. 棕色土炭混じり

第59図 SK07実測図



第60図 SK08実測図

密集しており、他の土壤と同様、土壤内で火を使用したことが窺える。

遺物は出土しなかった。

B. SK08 (F地区)

扇状地の先端部に位置し、SK07よりも高位にある。土壤は表土を除去した段階で検出され、標高56.75mの等高線に直交する形で掘削されている。

土壤の平面形は南辺に半円状の突出部をもつ、隅丸長方形を呈する。

土壤の規模は突出部を含めた長軸方向が2.2m、短軸方向が1.81mを測る。検出面からの深さは最深部で10cmと浅い。長軸方向を主軸とした方位はN12°Wである。

土壤底面は南側突出部に向かって約4°の勾配で上がり、そのまま突出部に続く。土壤底面は地山礫が露出し、凹凸が著しい。

土壤内の埋土は4層に分かれ、いずれも炭・焼土を多量に含み、下層には炭層が堆積している。土壤の北半には、炭および焼土の密集した範囲が数箇所認められ、周辺の露呈した地山礫

は火を受け赤化している。他の土壌と同様、土壌内で火を使用したことが窺える。
土壌内から遺物は出土しなかった。

9. 小 結

戸井町坪遺跡からは、8基の土壌が検出された。検出された土壌は、いずれも焼土塊・炭を多量に含み、また土壌内周壁・底面が赤化あるいは黒化した状態が認められ、土壌内で火を使用しているという共通点がある。土壌の形状は2つに大別される。

I. 平面形が不整な橢円形を呈する小型の土壌。

II. 平面形が隅丸長方形を呈する土壌。短辺に1箇所の半円形の突出部をもつものもある。

Iは本遺跡ではSK05の1例のみの出土である。長さ1.48m・幅1.0mと検出された土壌のなかでは小型である。IIは、突出部の有無でさらに細分される可能性をもつが、土壌の遺存状況が悪く、両者の区別が明確にできないため、ここではIIのなかに入る。IIは戸井町坪遺跡出土土壌群の主流をなす土壌である。規模は一定ではなく長さ1.7mから4mの土壌まで多様である。この一群にはいる土壌は、SK05を除くSK01・03・07の土壌と、上述したように半円形の突出部をもつSK02・04・08の土壌がある。これらの土壌の立地は、SK07・08のように谷部緩斜面に構築されている土壌もあるが、多くは尾根部付近に集中する。さらに細かく見ていくとSK03・04・06のように斜面に構築される土壌と、SK01・02・05のように急斜面から緩斜面への移行部付近緩斜面側に構築される土壌とに分れる。土壌の向きは、SK01・07・08のように高等線に直交するものもあれば、SK02・03・05・06のように平行して構築されているものもある。土壌の立地については、類似性を求めるることはできない。

戸井町坪遺跡検出の土壌群のなかでも、SK06は特異な検出状況を呈する。E地区で検出されたSK06は北側斜面下方に灰原をもち、その位置関係からSK06で生じた廃物を搔き出した痕跡と理解している。このような灰原を伴う例は、本遺跡ではSK06の1例のみで、他の土壌では確認されていない。あるいは、流出・削平等の人为的な擾乱により消失した可能性も考えられるが、この点については調査で明らかにできなかった。したがって、土壌と灰原が伴うものが本遺跡の土壌の通常のあり方かどうかについては断定できない。

土壌内に炭・灰・焼土等をもつこれらの土壌は、焼成遺構と呼ばれ、県内では淡路・東播地区で発見されている。とくに神戸市西区、加西市に集中して発見されている。この焼成遺構の性格については、従来中世火葬墓、素焼き用土器窯、焚き火等の機能が考えられてきた。これについて神崎勝氏は、これらの焼成遺構に脂肪酸分析の結果、および藤原学氏などの研究を踏え、「炭窯」としての機能を想定している。この見解について筆者は、異議を唱えるものではないが、「炭窯」としての位置づけについて問題点をあげてみる。ひとつは、脂肪酸分析の結果についてである。報告によると第1焼成遺構と第2焼成遺構内に加熱処理後の骨粉がわずかでは

あるが混在する可能性が指摘されている。^④さらに試料点数が少なく、造構の性格・用途を認定するには精度に多少問題が残るとあり、神崎氏の言う「…脂肪酸分析の結果もこの推定（木炭窯）を指示している。」とは矛盾している。

もうひとつは、短辺に半円形の突出部をもつタイプの焼成造構は、富山県石太郎C遺跡から近似したものが出土し、製鉄炉の基礎部分として報告されている。また穴澤義功氏は、この土壤を長方形竪炉I型d類に分類し、製鉄炉として位置づけている。筆者は、焼成造構を「木炭窯」と位置づけることは基本的には賛成であるが、上記した2つの問題点を含め炭窯と断定するにはなお検討すべき課題が多い。

（註）

- ① 市橋重喜・別府洋二・平田博幸他 「大森谷遺跡一談路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」 兵庫県教育委員会 1985
- ② 藤原 学 「木炭窯をめぐって一大師山検出の5・6号焼土壙に関する考察ー」 『河内長野大師山』 関西大学文学部考古学研究第5冊 1977
- ③ 神崎 勝 「焼成土壙について」 『神出III 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』 妙見山麓遺跡調査会 1987
- ④ 中野益男他 「神出古窯址群の焼成造構の土壤に残存する脂肪の分析」 『神出III 神出古窯址群に関連する遺跡群の調査』 妙見山麓遺跡調査会 1987
- ⑤ 闕 清他 「石太郎C遺跡」 『県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』 富山県教育委員会 1983
- ⑥ 穴澤義功 「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」 『季刊考古学第8号』 1984

VI. 炭窯の調査

1. 位置

A-II地区は調査区の北側を東西方向に張り出す尾根の付け根、南向き斜面に立地し、東側は1号窯跡が検出されたA-I地区と隣接している。

炭窯は標高62~64mの間に位置し、傾斜角18°の斜面に構築されている。等高線に直交する形で構築されている。炭窯の上方にはSK04が近接する。東側はA-I地区と隣接し、1号窯跡と平行に並んでいる。

炭窯は第3層を除去した段階で検出され、地山を直接掘り込んで構築している。

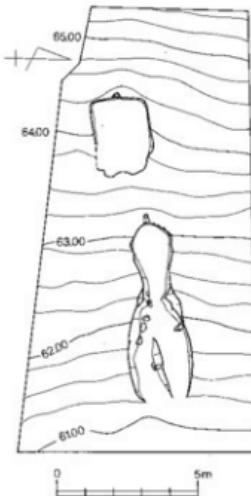
2. 遺構

炭窯は、窯体とそれに付随する作業場が良好な形で遺存していた。窯体は炭化室、煙道部、点火室、窓口部より構成される。炭化室は平面形がイチジク形を呈し、点火室付近で狭くなっている。窓口部はさらに狭まっている。炭化室から窓口部までの長さは下端で2.89mで、炭化室の最大幅は1.34m、点火室付近は幅60cm前後と一定しており、窓口部は幅40cmと狭くなっている。窓口部は幅1.5mの規模で掘削され、その後両脇に礫混じりの土を3層積み上げ袖部を構築している。さらに窓口部の西側には、0.15×0.25m前後の河原石を積んで補強している。窓口部の掘方床面は火を受けて赤化し、数回修復されていると推察される。

炭化室の床面は、煙道部に向かって約4°の勾配で傾斜し、点火室は浅く掘り窪められている。検出面からの深さは、煙道部付近で1.2m、点火室付近で0.7mを測る。炭化室の検出面からの深さは、0.7~1.2mを測り、点火室側が浅くなる。点火室~窓口部の深さは、0.25~0.7mを測る。

煙道部は炭化室の奥壁中央に径0.25cm、高さ0.7mの半円柱状に約80°の角度をもって掘削され、そこからさらに上部に径10cmの煙道を割り貫き、排煙口としている。吸入口は半円柱状に掘り込んだ部分を玉縁部を上にした丸瓦で塞ぎ、瓦の下端に石を置き空隙を作っている。

炭化室の底面から周壁下位、および煙道部は黒化し、周壁中位から点火室付近にかけては赤

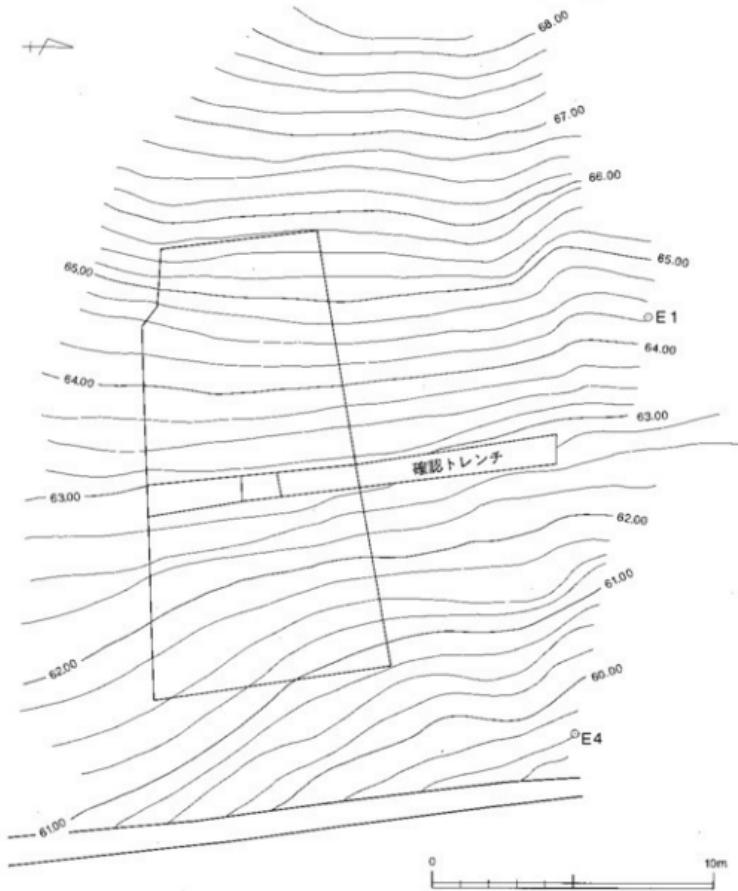


第61図 A-II地区 遺構配置図

化している。窯体の主軸方位はN81°Eで、ほぼ東西方向を向く。

炭化室内の埋土は大きく3層に分かれる。下層の10~12層は細かい炭化材を含む層、中粒砂層の8・9層は天井崩落土層、3~7層は炭窯操業終了後の堆積層である。

作業場は窯口部の南側に地山を3.5×2.2mの規模で楕円形に削平して造られている。窯口部付近は水平に削平されるが、作業場の西側は約10°の傾斜をもって下がる。



第62図 A-II地区 地形測量図

作業場の窓口付近の両立ち上がり部分には数個の偏平な河原石が検出された。また作業場の南西側底面には焼土塊が検出された。

作業場の埋土は2層に分かれ、下層は炭層・焼土層、上層は炭窯廃絶後の堆積層と考えられる。

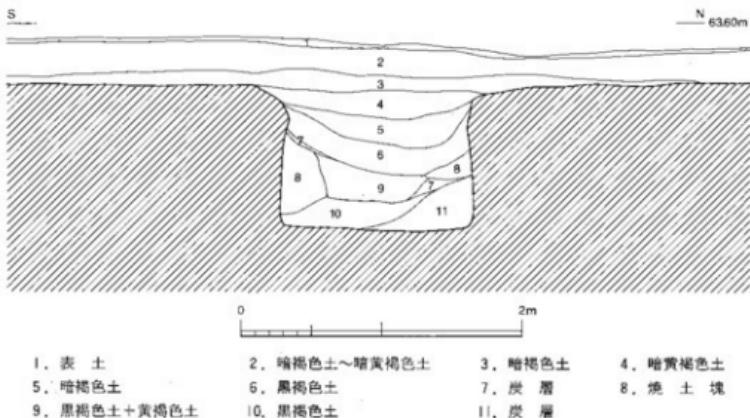
3. 遺物

遺物は丸瓦、平瓦、須恵器が検出された。出土位置は1の丸瓦が煙道部より、平瓦2は作業場埋土第2層焼土層より出土し、3・4は炭化室天井崩落土8・9層中より出土した。これらの瓦はおそらく炭窯天井部補強材としての機能を果たしていたと考えられる。須恵器は窯体内第6層、作業場埋土中より数点出土したが、すべて細片で図化できるものはなかった。

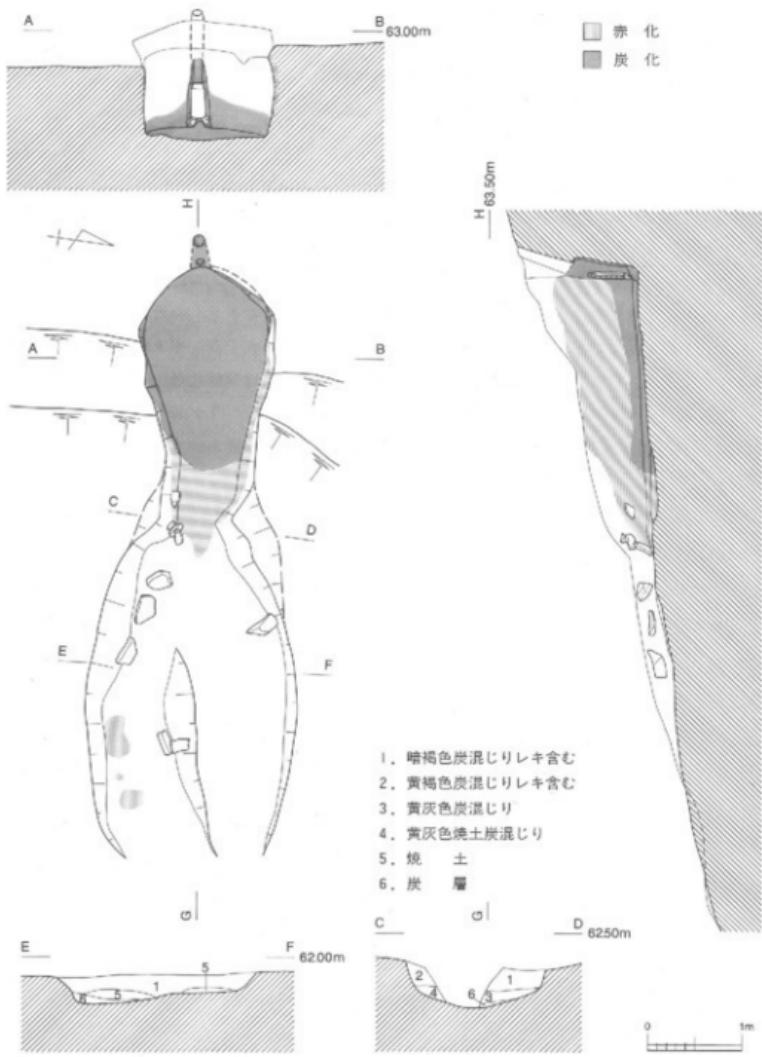
1は玉縁式の丸瓦である。凸面は炭化室に面していたため、火を受け剥落が著しい。凹面はナデ調整が丁寧に施され、叩き目の痕跡を残さない。凹面は筒部から玉縁部に布目圧痕を残し、筒部から玉縁部まで同時に成形されている。筒部の側面はヘラケズリ調整が行われ、凹面側に面取りを行う。凹面側玉縁部・筒部先端部には面取り様の横方向のヘラケズリ調整が認められる。

法量は筒部長31.5cm、玉縁長4.5cm、筒部径12.5cm、玉縁部径9cm、厚さ1.5~2.7cmを測る。胎土は粗砂~礫を含む。

2は両端部幅にはほとんど差のない長方形を呈する平瓦である。凸面は2次的に火を受け剥落が著しく、部分的にタールが付着する。1辺1.5cmの斜格子叩きが施された後、ナデ調整によつ



第63図 炭窯土層断面図



第64図 炭窯実測図

て部分的に叩き目を消している。凹面は布目圧痕を削り様の強いナデによって粗く消している。凹凸面側端部にヘラケズリによる面取りが行われる。側縁はヘラケズリ調整を行う。

法量は全長37.5cm、広端幅21.0cm、狭端幅19.0cm、厚さ1.8~2.3cmを測る。

3は一部を欠損し、全容は不明瞭であるが、2と同様両端部幅にほとんど差のない長方形を呈すると考えられる。凸面は2次的に火を受け剥落が著しい。一辺1cmの斜格子叩きを施した後、叩き目を粗く消している。ナデ調整は端部付近が丁寧である。凹面は布目圧痕を横位のナデ調整で粗く消している。四面側両端部にヘラケズリによる面取りが行われる。

法量は、全長36.1cm、端部幅20.0cm、厚さは1.8~2.2cmを測る。

4は一端を欠損し、全容は不明瞭である。凸面は一辺1.5cmの斜格子叩きを施し、その後縦位のナデ調整によって部分的に叩き目を消している。凹面は細かい布目圧痕を残す。ナデ調整は認められない。四面端部はヘラケズリによる丁寧な面取りを行う。2次的な火は受けていない。

法量は残存する端部幅が21.0cm、厚さ1.7~2.4cmを測る。

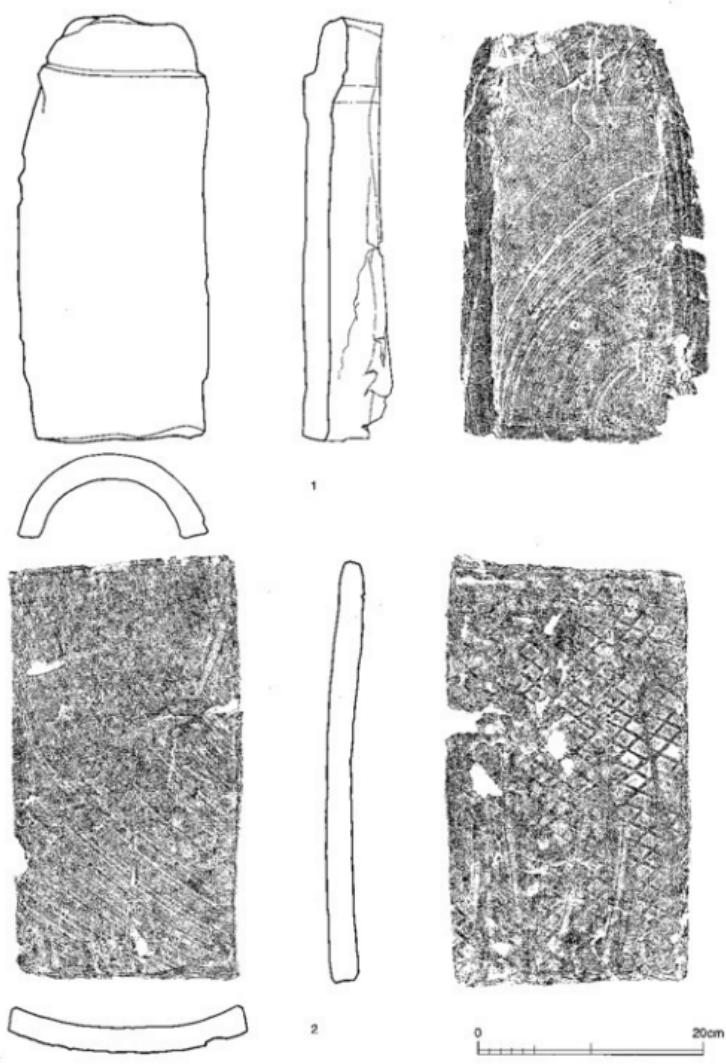
4. 小 結

これまで概要を述べてきた炭窯の特徴をまとめてみると、以下の通りである。

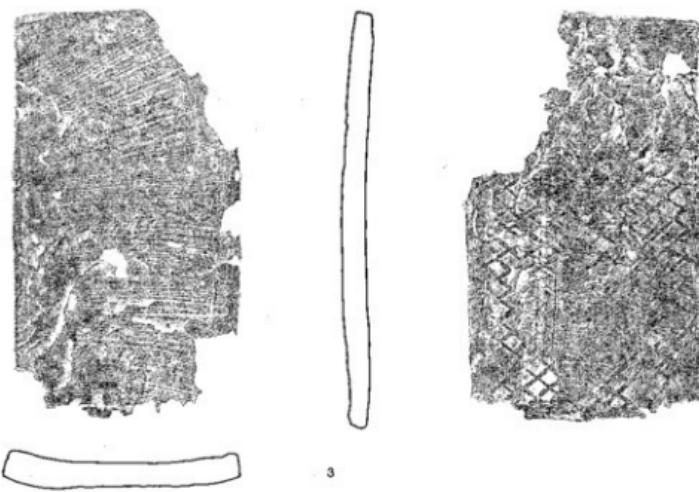
1. 斜面に直接掘り込んで窯体をつくり、天井を覆う構造である。
2. 窯体の平面形は、炭化室中央より煙道側に最大幅をもち、窯口付近が狭まったイチジク形を呈する。
3. 炭化室と点火室に障壁・段等の区切りがない。
4. 煙道部は半円柱状に掘り込み丸瓦で塞ぎ、排煙口は直接地山を削り抜いている。
5. 吸入口は小さく、炭化室奥壁下位に作られる。
6. 炭化室床面~周壁下位は黒化し、周壁中位、点火室付近は火を直接受け赤化している。
7. 炭化室周壁は高温で焼かれ、固く焼き締まっている。
8. 窯口部前面に作業場をもつ。

また、窯体等から、瓦、須恵器等が出土し、須恵器窯としての可能性も指摘される。そこで本窯の機能を炭窯と認識した理由を少し述べてみたい。まず構造的な点については、藤原氏の研究に依った。藤原氏は近・現代の炭窯の構造を観察し、以下のような炭窯の構造的特徴を挙げている。

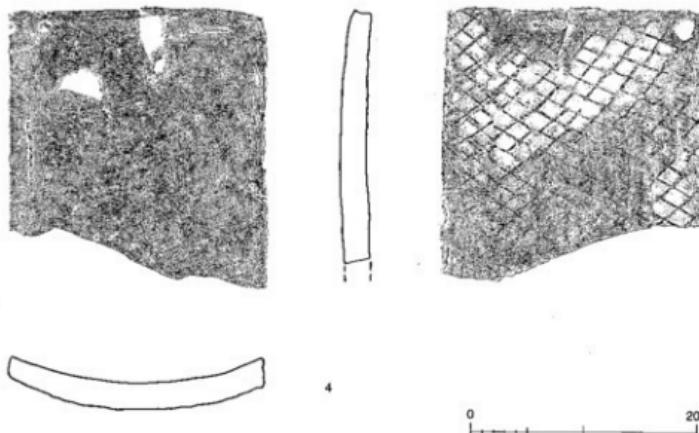
- ① 焼成室・燃焼室（部）の区別がないこと。
- ② 煙道・焚口に構造上の特徴がみられる。
- ③ 平面形（円・楕円・逆三角形など）が特異であること。
- ④ 窯体の焼土が著しく、須恵器窯なみである。
- ⑤ 側壁に窯口をあけるものもある。



第65図 瓦 実測図(1)



3



4



第66図 瓦 実測図(2)

以上の構造的な特徴を本窯に照らし合わせると①～④の特徴が該当し、本窯は炭窯としての構造的特徴を具備している。これ以外に本窯の6の特徴として挙げた窯体内の熱の受け方が注目される。すなわち点火室付近は火を直接受け赤化しているのに対し、炭化室底面は火を直接受けず、炭素が付着し黒化している。この熱の受け方の相違は兼康氏の指摘するように、原木を置く部分とそうでない部分との違いであろうと考えられる。また周壁下位に幅20cmの黒化した部分が認められる。これについては兼康氏が民俗例で紹介しているように、窯詰の際に床面に枝木を敷き、その上に原本を並べたことと符号する。しかし「在来窯」の窯詰は床面には枝木を敷かず、直接原本を置いている例もあり断定はできない。いずれにしても窯体内に原本の存在を想定できる事象で、炭窯としての機能を補強するものである。

瓦は作業場埋土中、窯体内天井崩落土中、煙道部から出土し、作業場埋土中より出土した平瓦を除き、二次的に火を受けている。おそらく窯体の構造物として使用されていたと推察される。須恵器については、窯体内天井崩落土の上層より出土し、窯体内に伴う須恵器は出土していない。遺物の出土状況から判断しても須恵器窯の機能を示す積極的な根拠は見当らない。多少くどい感があるが、本窯が炭窯として機能していたことは間違いないところであろう。

窯址から出土した格子叩きをもつ平瓦は平安時代中～後期の特徴をもつ。出土状況からすれば炭窯はこの時期に比定されるが、炭窯の形態は上記したように近・現代的な要素を具備しており、窯の時期については問題を残す。ここではあえて時期的な判断は避けたい。

炭窯は生産する炭の種類によって「黒炭窯」、「白炭窯」に分かれる。黒炭・白炭の製炭技術の違いは、黒炭が窯内で自然消火させるのに対し、白炭は窓外に炭材を搔き出し、消火することにある。この観点で本窯址を考えた場合、作業場の構造・規模は窓外に炭材を搔き出し灰・土等をかけて消火するには狭小である。窓外に炭材を搔き出すため多量の屑炭が生ずるが、その痕跡は調査した限りでは確認できなかった。これらの事実から判断して、本窯は黒炭窯としての機能をもつと考える。

菱田哲郎氏には本窯出土の瓦について有益な御教授を受けた。文末ではあるが深謝する次第である。

註)

①藤原 学 「木炭窯をめぐって一大師山検出の5・6号焼土塗に関する考察一」『河内長野大師山』関西大学文学部考古学研究第5号 1977

②兼康保明 「古代白炭焼成炭窯の復原」『生業・生産と技術』日本考古学論集5 1986

③ 同 上

④六車 功 「大川郡における炭窯と習俗について」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要第1号』 1984

大川郡内では古くから広く分布する「在来窯」の築窯技術、製炭技術を紹介している。

VII. おわりに

戸井町坪窯跡群ならびに戸井町坪遺跡の調査は、確認調査の日数を足しても30日にも満たない26日間の短い調査である。調査の結果、須恵器窯跡を5基確認し、1基の全面調査を行った。また、性格不明の焼成土壙を8基と炭窯を1基合わせて調査した。

年度末の慌ただしい時期に行った調査で、しかも調査に着手する日が契約などの遅れから大幅に遅れたことから、当初予定期間も確保出来ない状況であったが、最小限ながらも一応無事事故もなく悉なく調査を完了出来たことを関係者に感謝したい。暖冬による気象条件などの天候が味方したことが良い方向へと向いた要因と言える。整理作業も十分な状態で行えなかったが、同様に刊行出来たことは喜ばしいことである。しかし、調査担当者の力量不足から十分に咀嚼出来たかどうか心配である。

戸井町坪窯跡群は、現在のところ5基の窯跡が確認されている。さらに谷奥部に窯跡が残存している可能性は十分に考えられる。大きく2時期に分けられ、9世紀前半と10世紀後半の両時期である。9世紀前半は1号窯（古）段階と2・3号窯で、10世紀後半は1号窯（新）段階と4・5号窯である。4・5号窯は須恵器以外に瓦も焼成している。札馬窯跡群でも瓦を焼成している窯は少ないことから貴重な例と言えよう。4・5号窯の全面調査は行っていないことから、2基ともに瓦を焼いているのか、いずれか1基だけが焼いているのかは明らかでない。

戸井町坪1号窯は通有の登り窯である。窯体の規模や構造なども一般例とはほとんど変わりなく通有の形態を示している。ただ、特徴的なことは操業時期にある。長期間使用され続いている窯は見られるが、戸井町坪1号窯のように150年前後の休業期間を持っている例は少ないものと思われる。しかも補修も最小限で燃焼部周辺に新たに床を張っているにすぎず、連錠と焼成を行っている窯と同じ程度の補修で使用している。補修は、燃焼部を中心に床を貼り直している程度である。その最大が3面で、補修回数（使用回数）と同じものは言えない。また、補修は床を貼るもので、下層に面を検出したことから、9世紀前半以降では床面を削り下げる補修は行っていなかった。灰原などから9世紀前半を測る遺物が出土していないことから、補修は床の貼り直しだけであったろうと思われる。2時期の操業期間も長い期間は考えられない。特に10世紀後半の時期は土器量も少ないとなどから1回の使用ということも考えられる。戸井町坪窯跡群全体もこの両時期しか操業していないようで、谷の両側を移動して操業していたのであろう。

戸井町坪1号窯の出土遺物は、さほど多い量ではないが、興味ある資料も提出されている。まず、古段階では金属器を模倣したと言われる稜椀と突岸壺がある。稜椀出土遺跡は年々増加

しており、戸井町坪1号窯周辺でも多数出土している。消費地は官衙造構に伴うものとされており、それに準じた遺跡（吉田南遺跡・ハゼの木遺跡・家原堂の元遺跡など）から出土している。窯跡では、戸井町坪1号窯周辺の札馬窯跡群・投松窯跡群・西ノ池窯跡群などで出土しており、また加古川上流域の大伏窯跡群でも出土しており、当窯跡周辺が一大生産地であった可能性が高くなりつつある。それを補強する1資料を加えたことになろう。

新段階では床面出土の鈴が挙げられる。鈴の出土例そのものも少ないものであるが、出土状態が窯床面であることから、さらに数少ない例となろう。茨城県・木の葉窯跡例など僅かな例しかないようで、興味深い資料である。

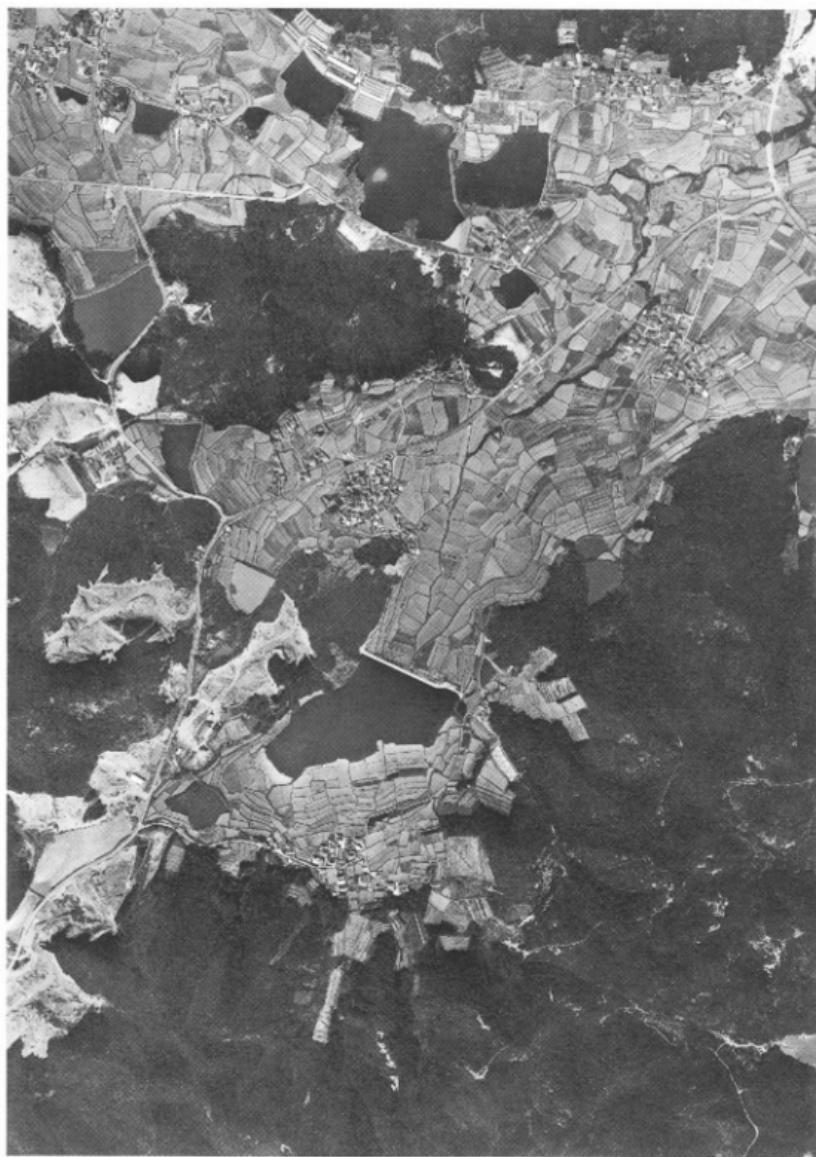
出土遺物が示す年代は、古段階が陶邑IV型式2段階・札馬I型式に対応するものと思われ、ほぼ9世紀初頭を示す時期かと思われる。新段階は陶邑V型式2段階・札馬III型式に対応するものと思われ、ほぼ10世紀後半を示す時期かと思われる。その間の休業期間を持っていることも大きな問題である。それは、戸井町坪窯跡群全体を通しての休業期間の可能性が高い。休業期間を持っている例は、三重県・七和2号窯跡の300年など上回る例があるものの、一般的な在り方ではない。この期間この谷が使用されなかった理由を考えるべきであろうが、その理由は不明である。周辺ではその時期も焼成していることから、焼成に必要な事象によるためであろうと思われる。

僅かな期間の調査ではあったが、予想以上に多くの問題点を含んでいることが明らかとなつた。それをより拡大すべきであろうが、その責を果たすことは出来なかつた。僅かな報告から活用戴くことを望むものである。

図 版



古段階床面出土土器



戸井町坪1号窓周辺 空中写真(国土地理院撮影)



調査地遠景(北西から)



調査地全景(気球写真)

戸井町坪1号窯

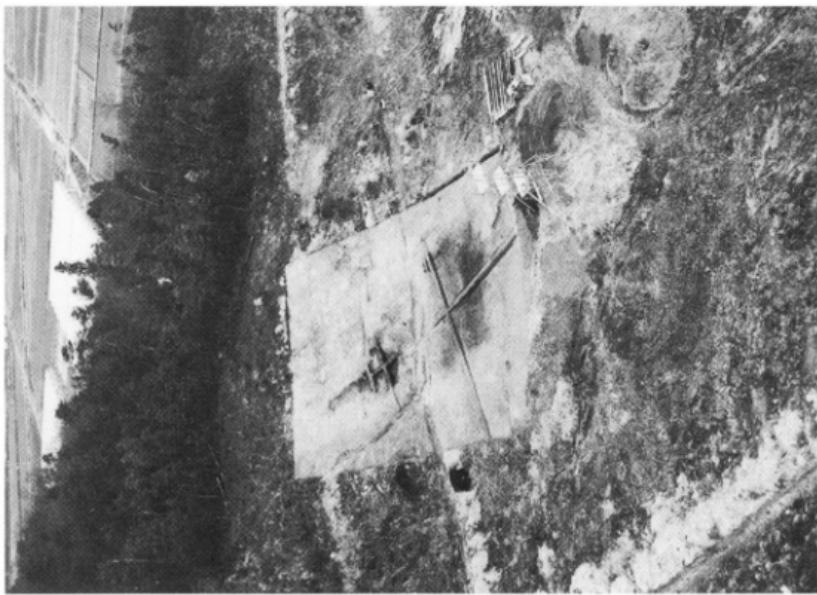


遠景(調査前、東から)

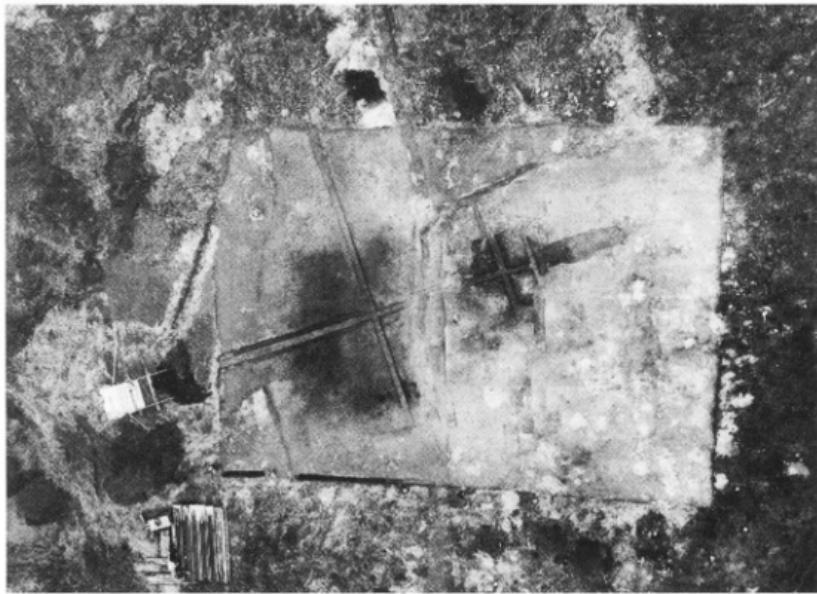


調査前全景

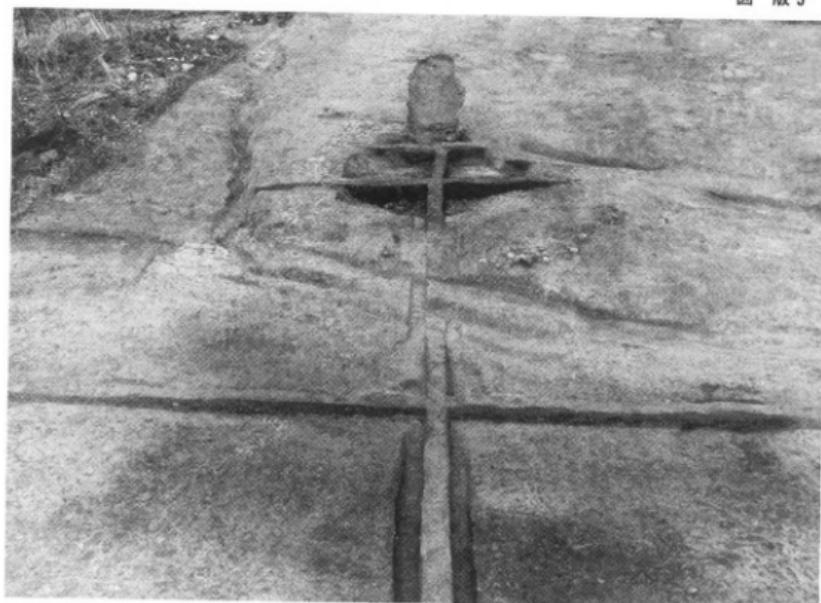
図版4 戸井町坪1号窯



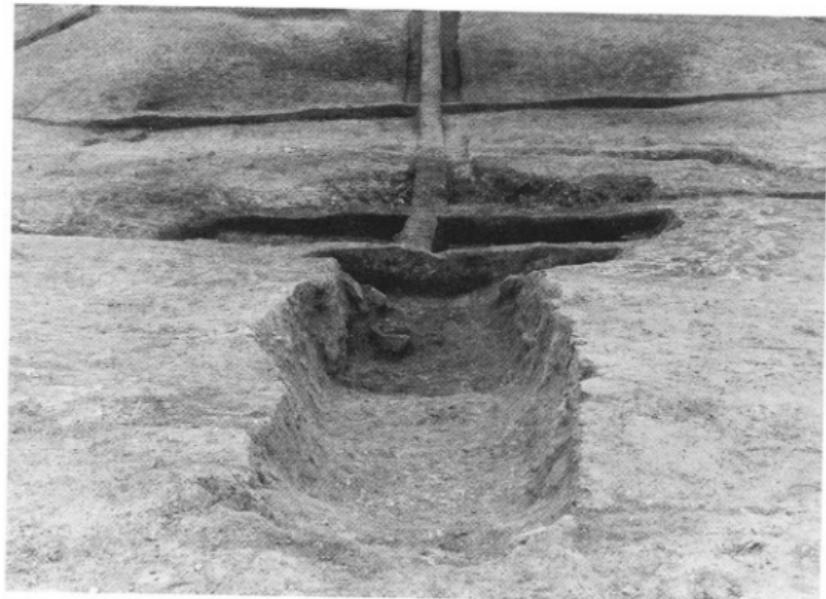
全 景(気球写真)



全 景(気球写真)



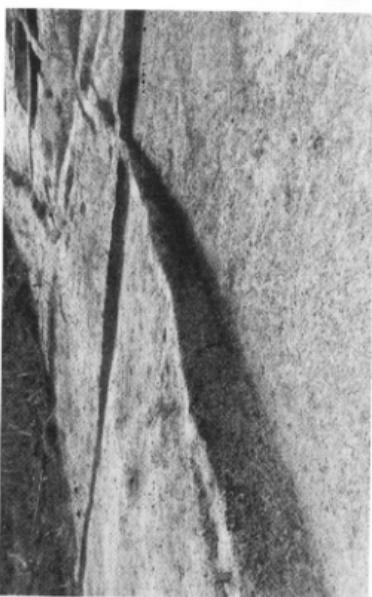
土層堆積狀況



同 上

図版6 戸井町坪1号窯

灰原堆積状況

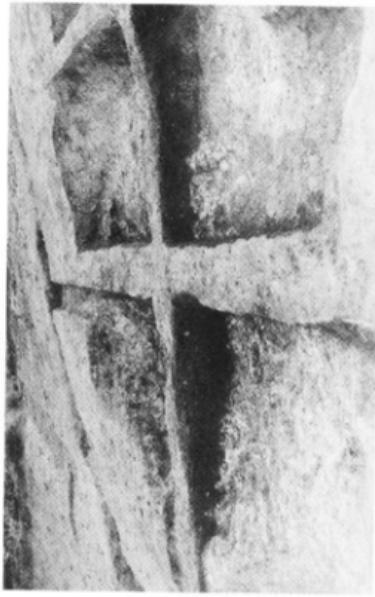


前庭部堆積状況

窯体焼断堆積状況

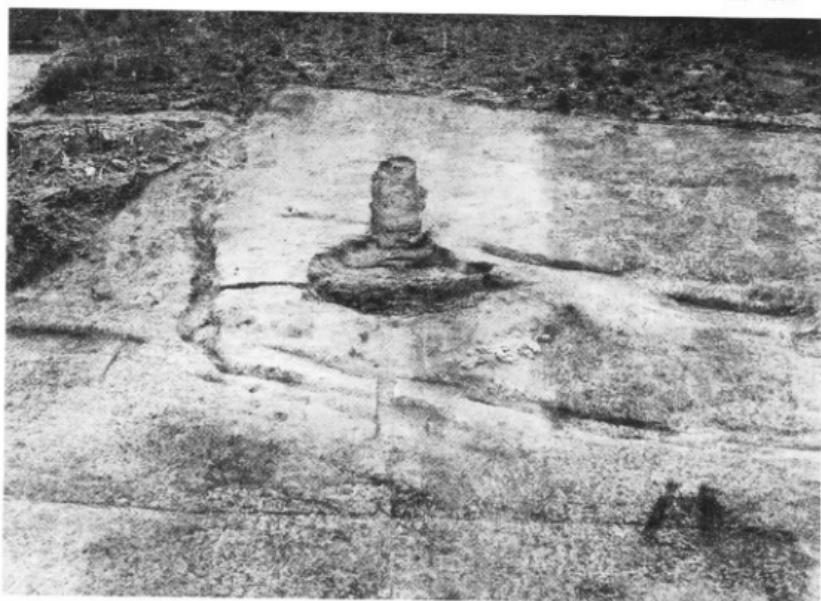


窯体焼断堆積状況

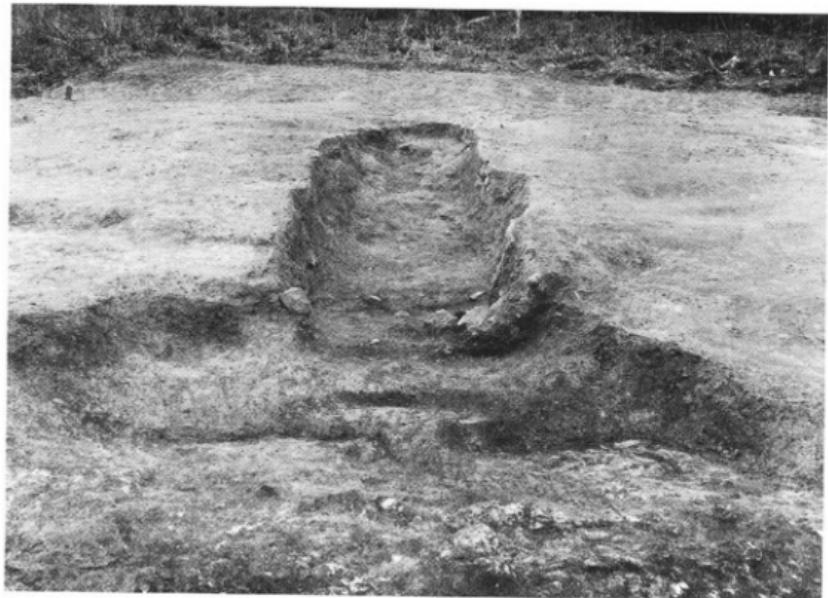


前庭部堆積状況

戸井町坪1号窯



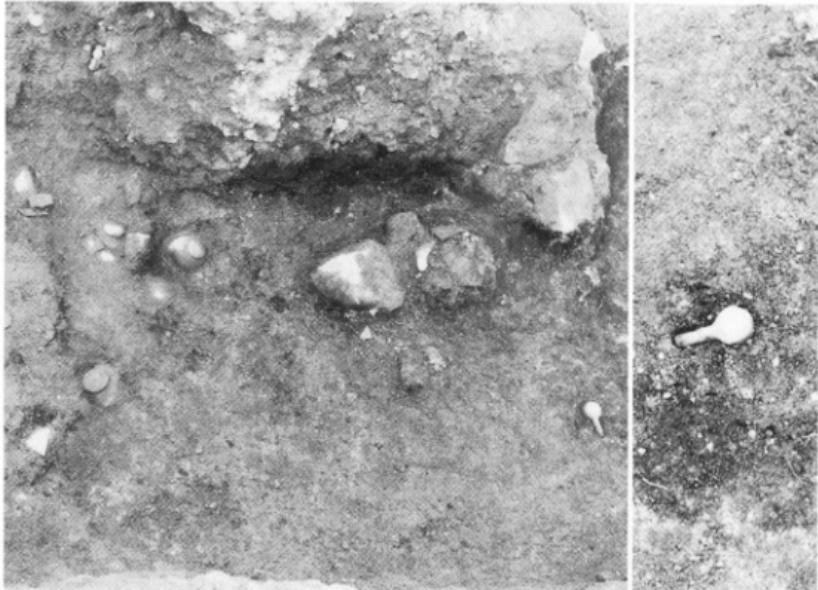
全景



窯体全景



第2次(新段階)床面遺物出土状況



第2次(新段階)床面遺物出土状況

戸井町坪1号窯



窯体全景



窯体断面

戸井町坪2-5号窯



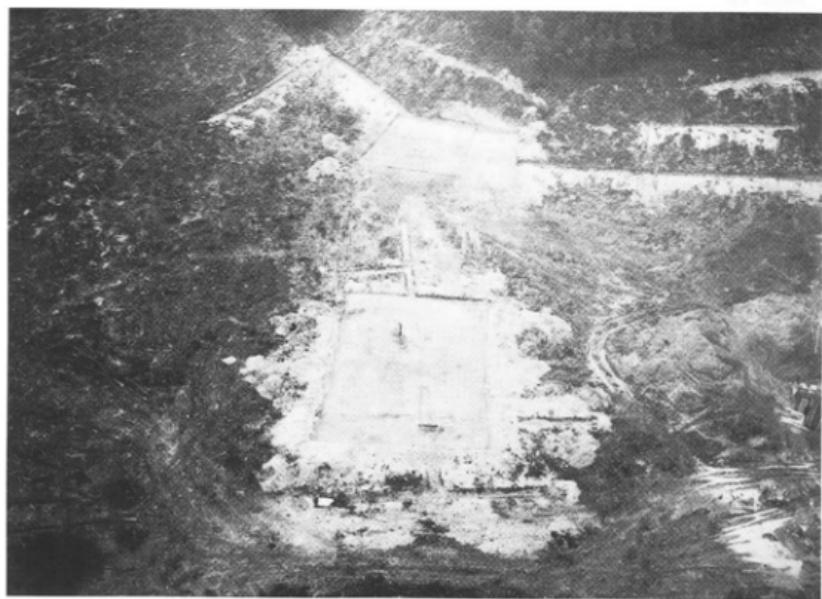
遠景



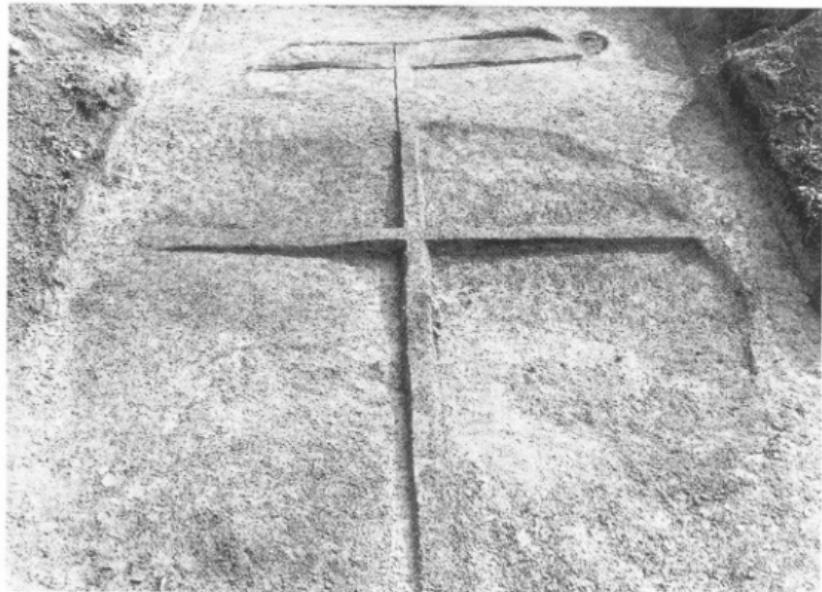
3号窯



4号窯



E・F 地区全景(気球写真)



SK06 全景



S K 06 全 景(南から)



S K 06 全 景(西から)

図 版13 戸井町坪遺跡



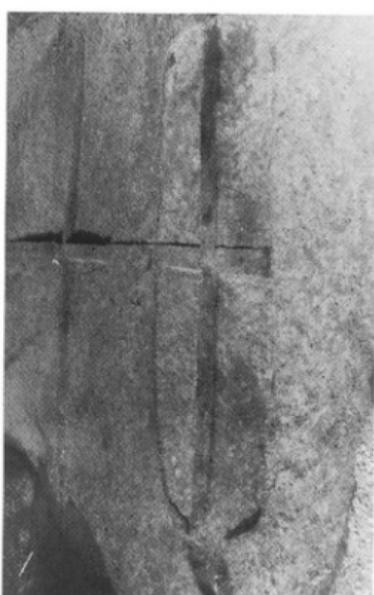
S K06 突出部



S K05



S K06 全景

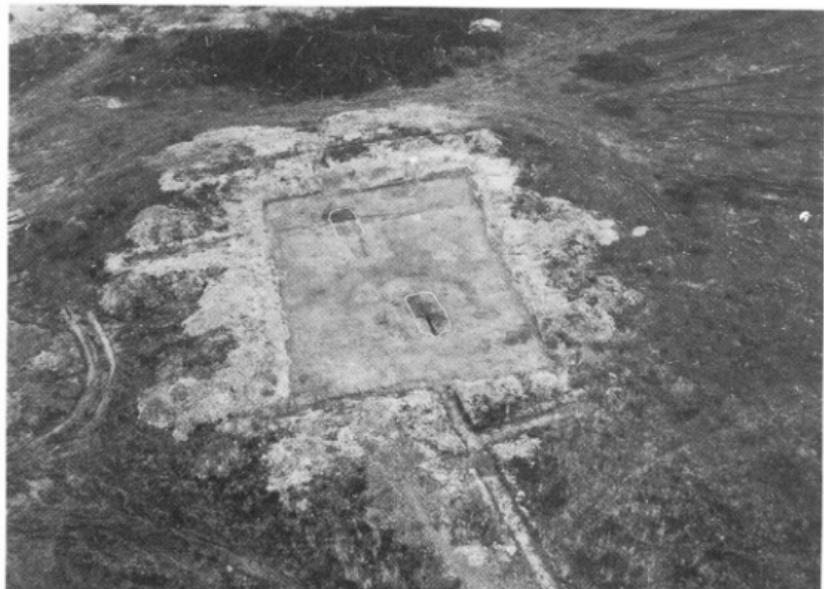


S K06 断面

戸井町坪遺跡



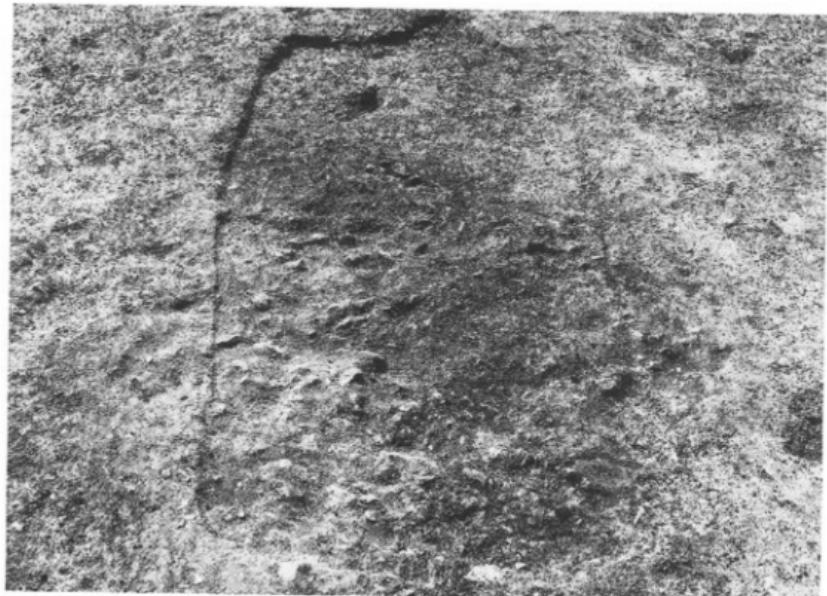
SK07・SK08 全 景



SK07・SK08(F地区) 全 景(気球写真)



S K 07



S K 08

炭
窯



遠 景



全 景

図版17 炭窯

焚口部



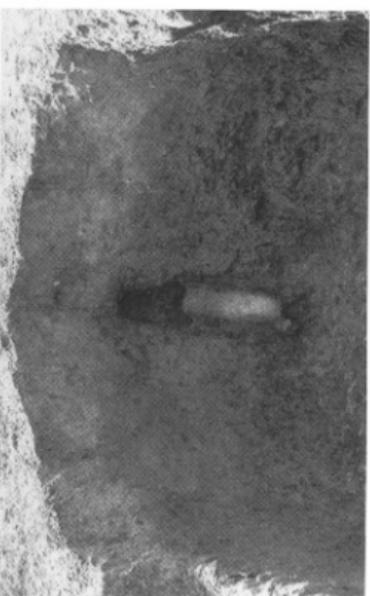
焚口部

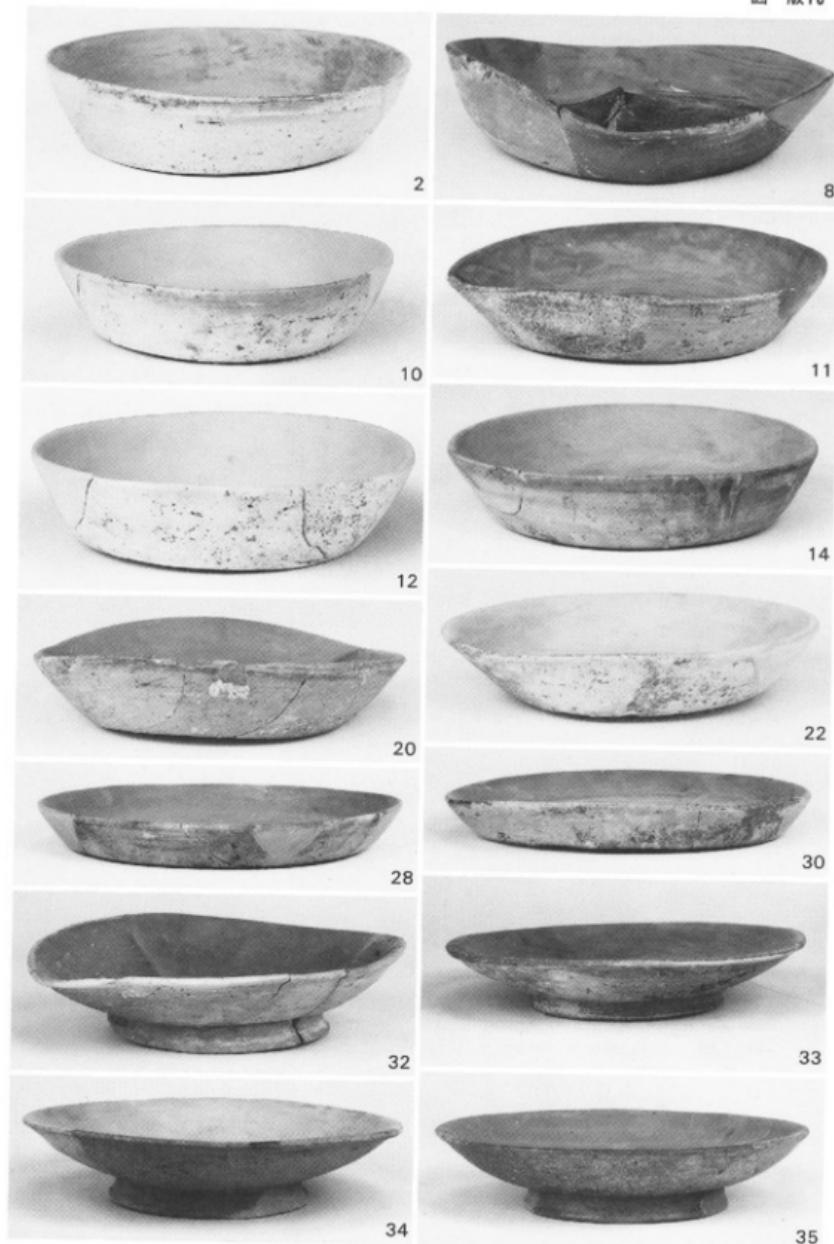


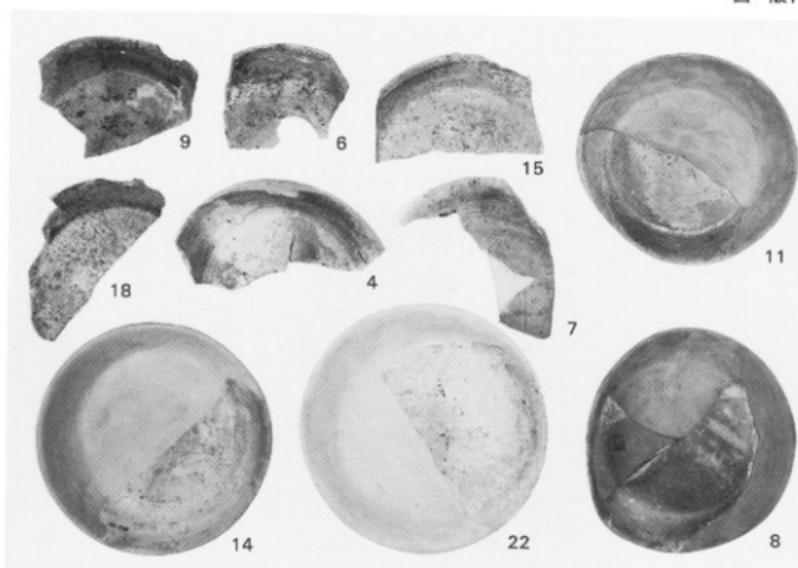
奥壁



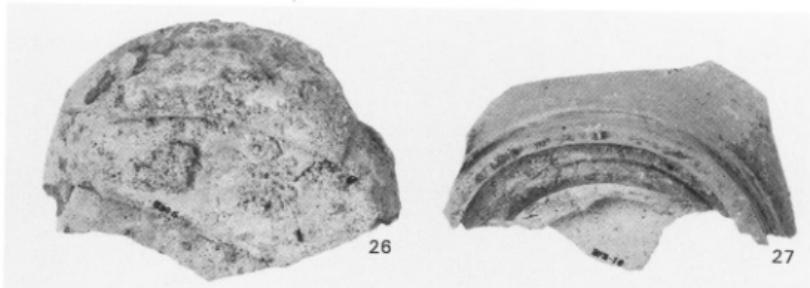
土層堆積状況



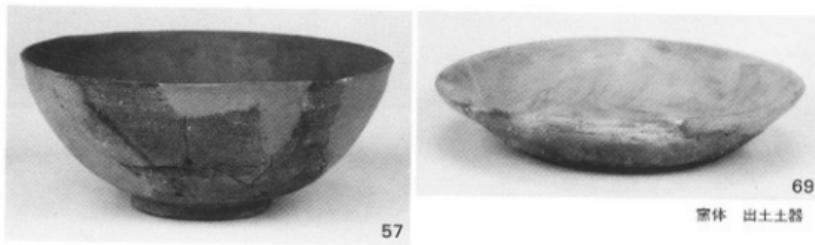




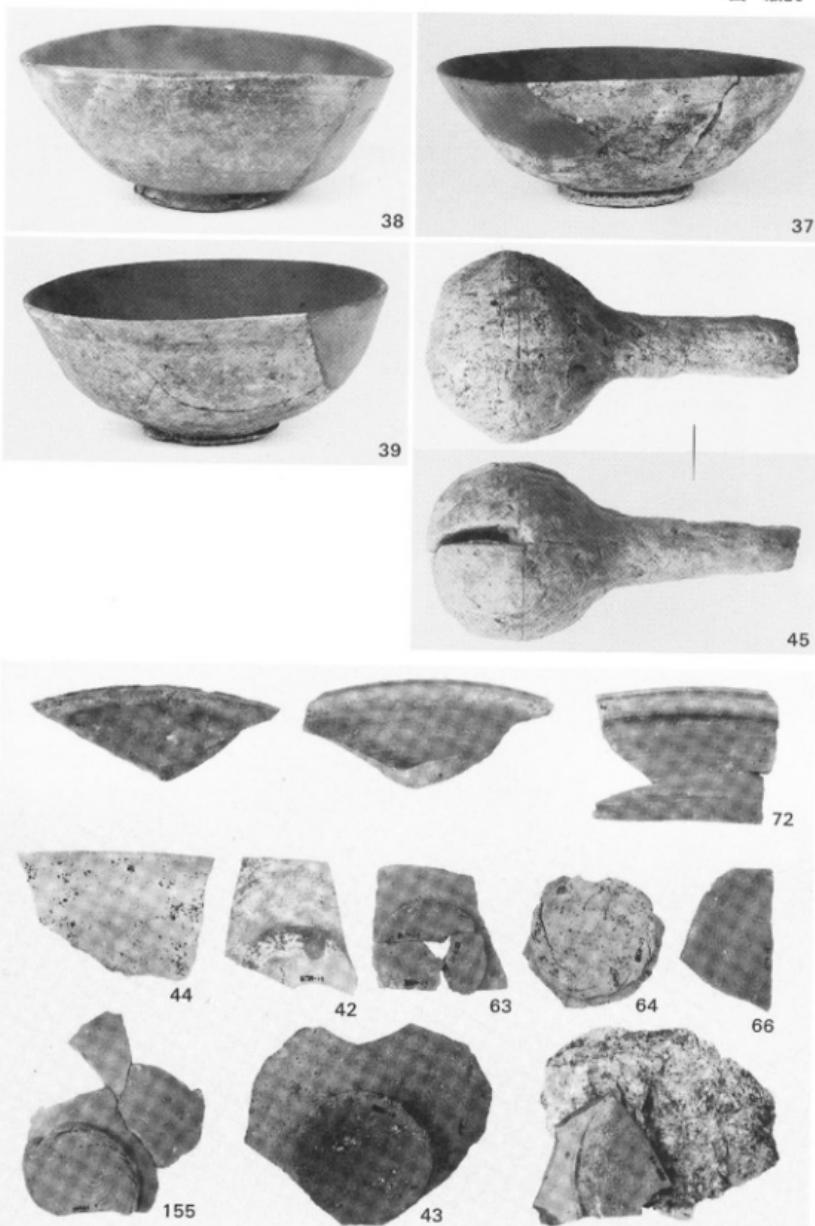
第1次床面 出土土器



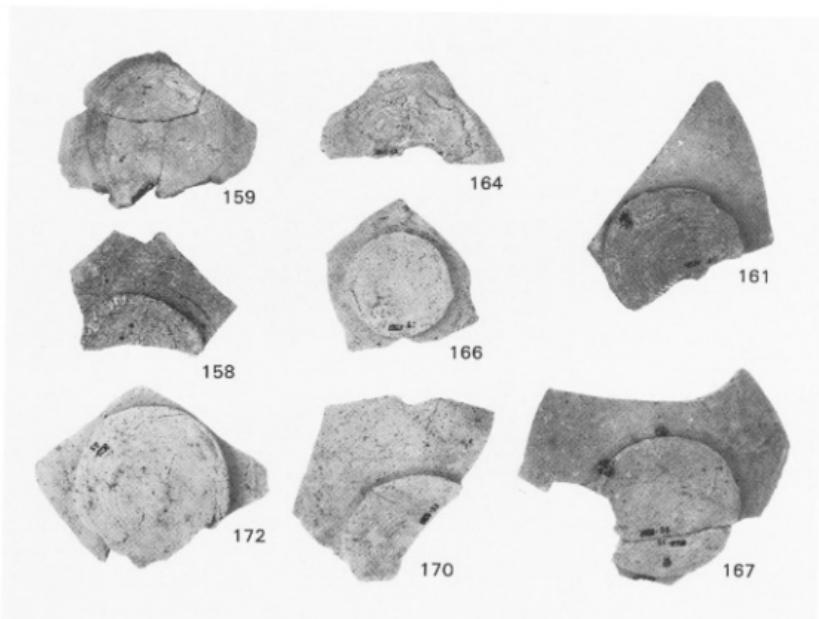
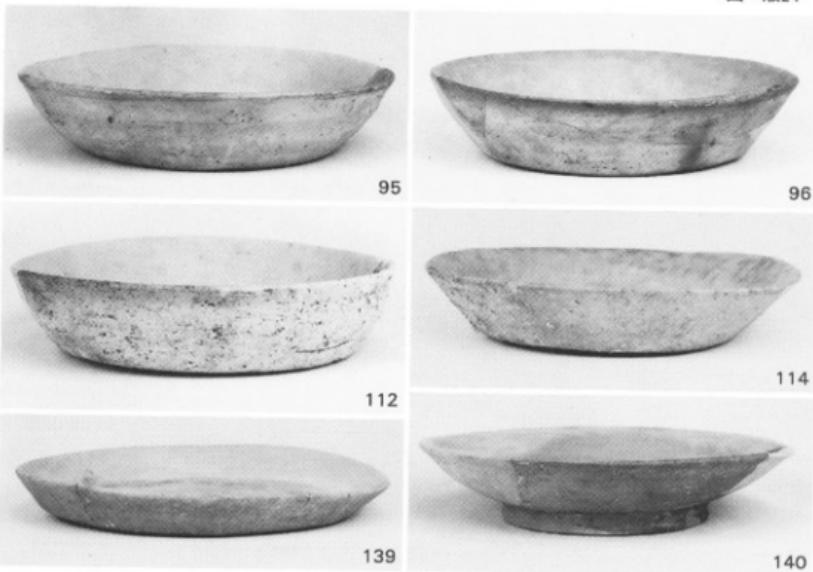
第1次床面 出土土器



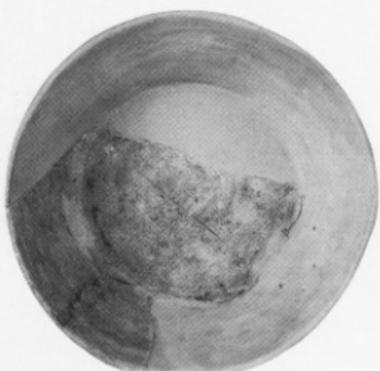
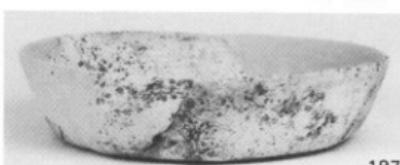
窓体 出土土器

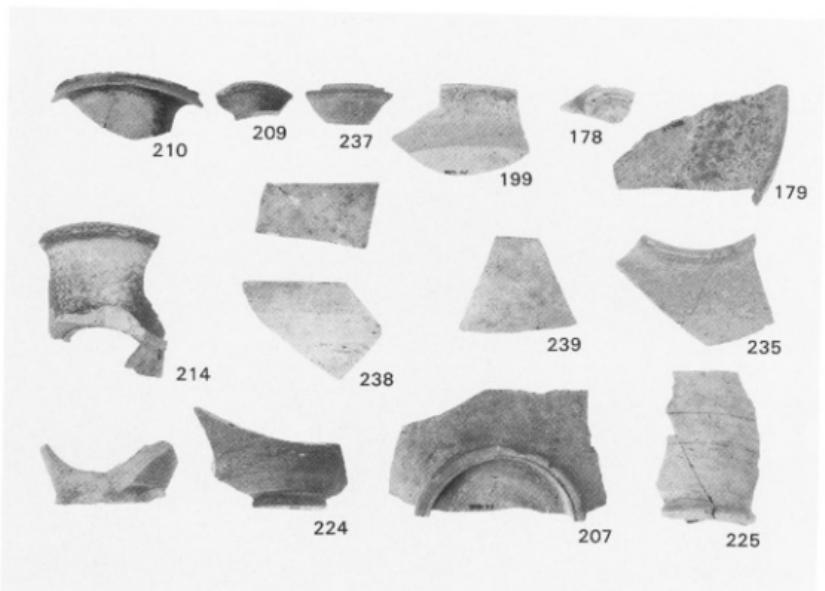
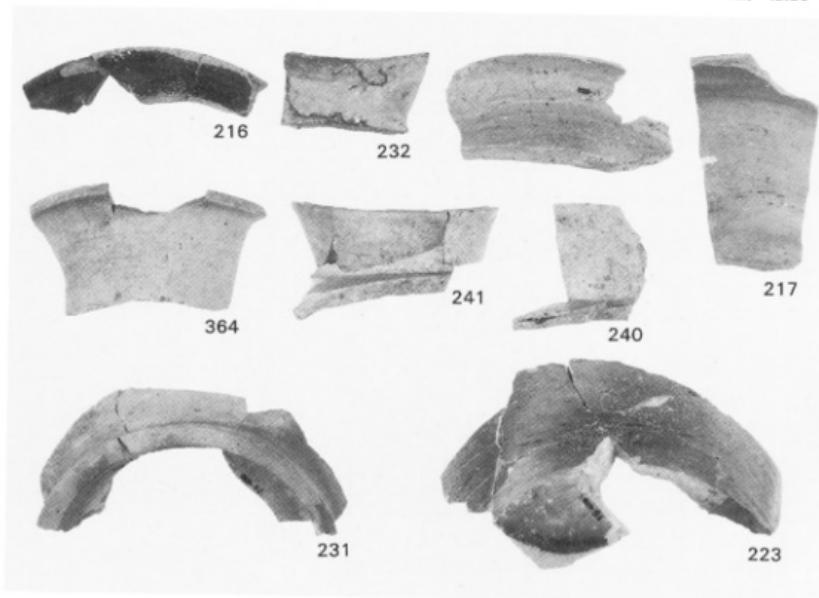


第2次 床面 出土土器

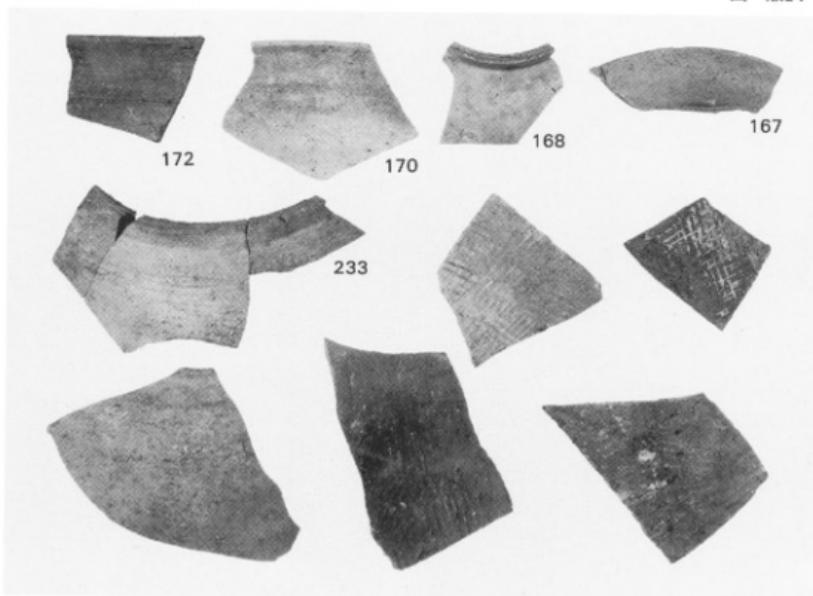


戸井町坪1号窯

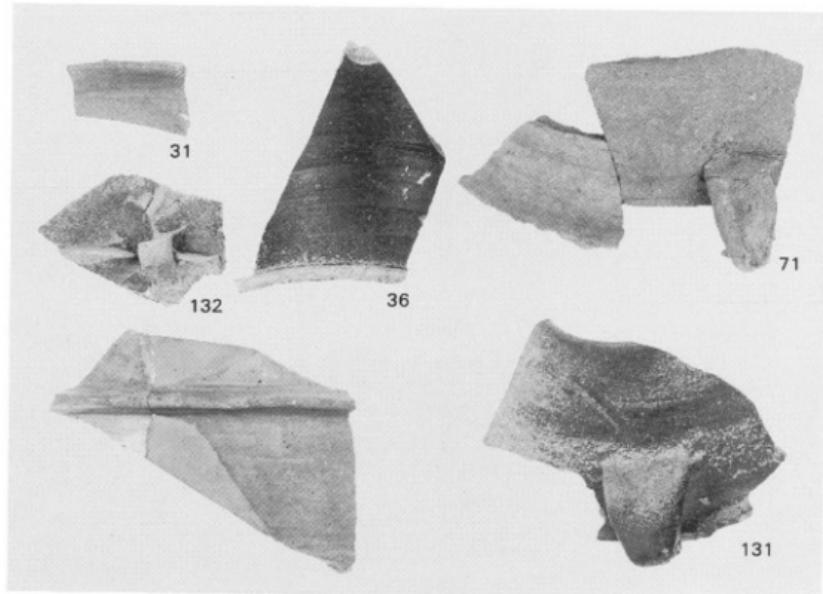




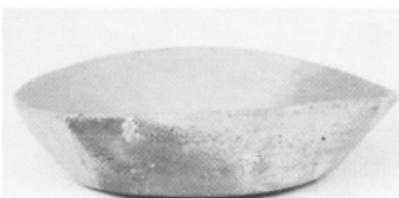
戸井町坪1号窯



壺・甌・鉢 他



尖底壺



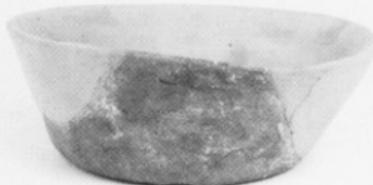
246



265



266



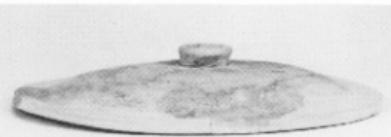
272



295



291



296



300



298

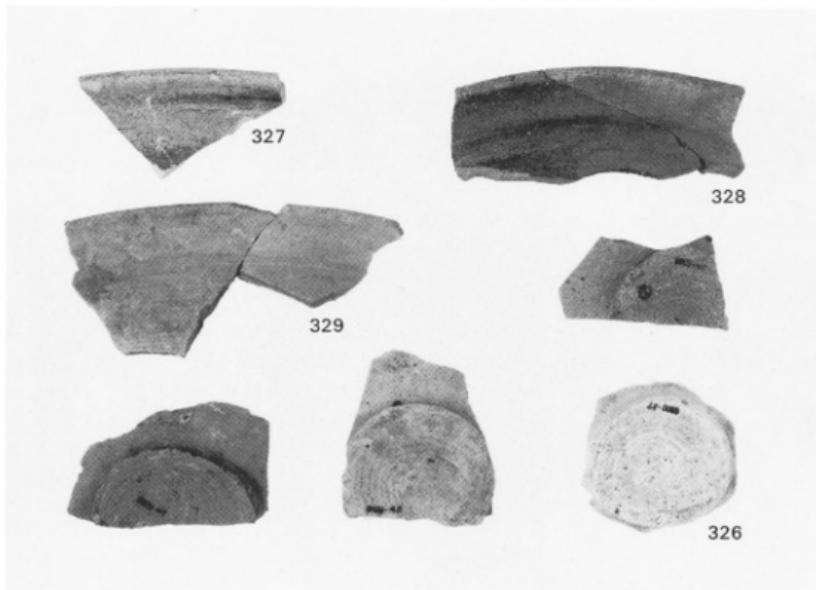


305

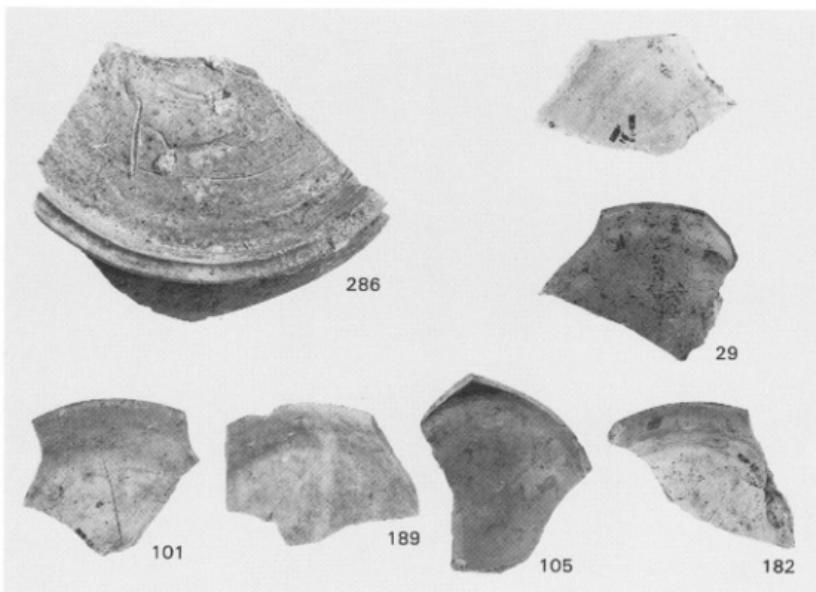


306

戸井町坪1号窯

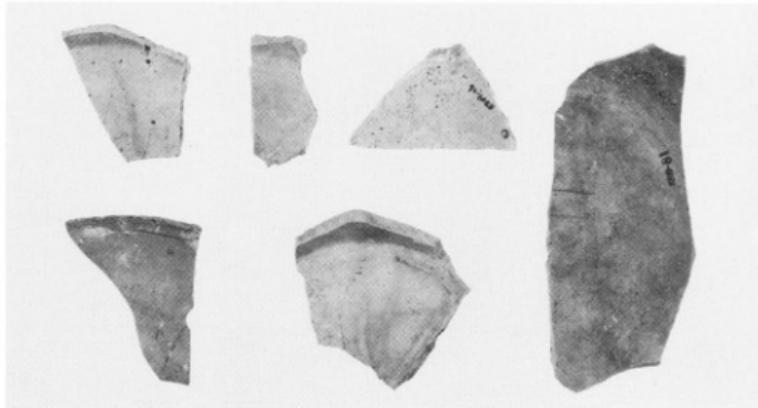
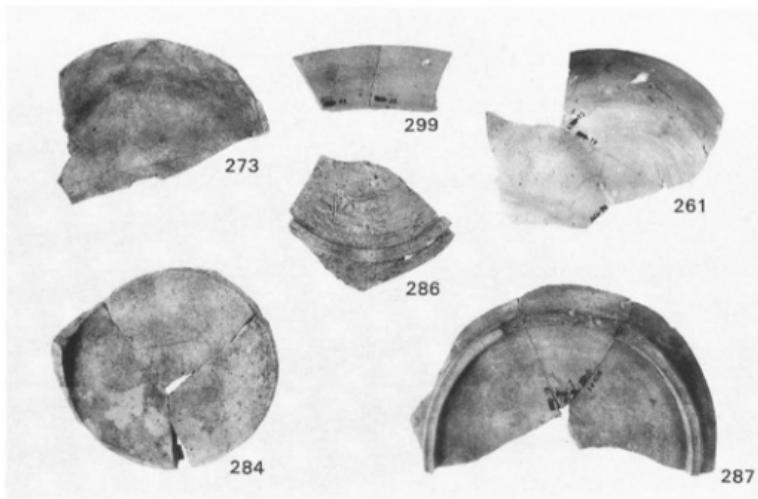
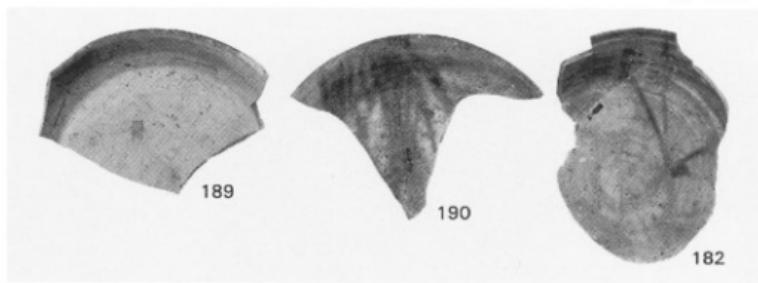


表土出土採集土器



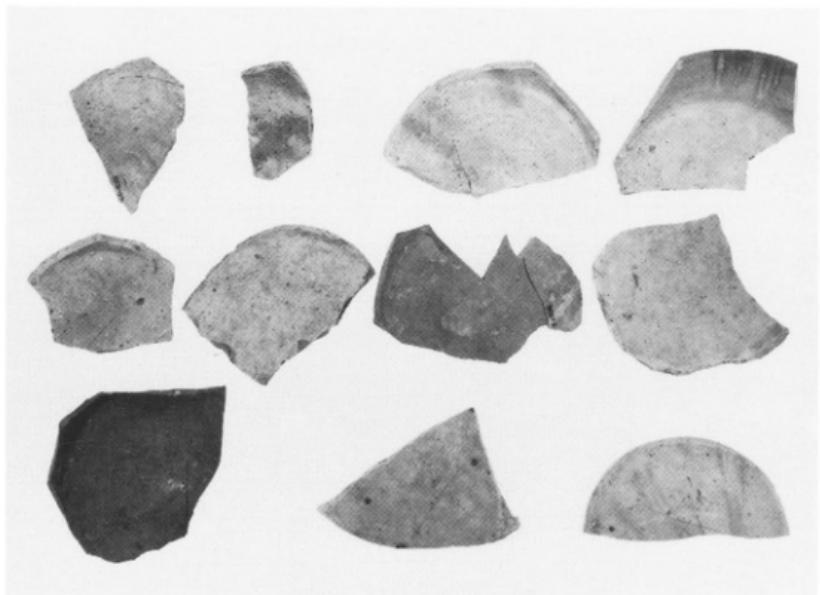
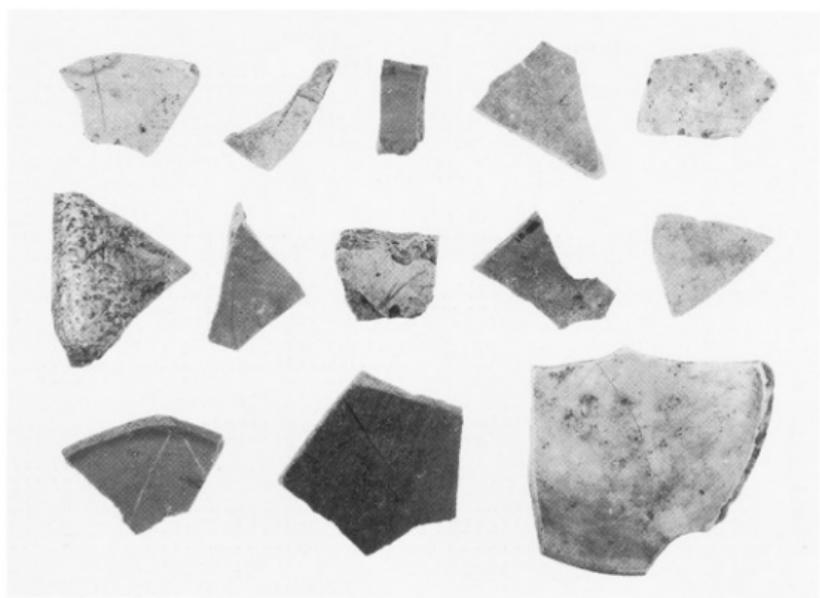
ヘラ記号

戸井町坪1号窯

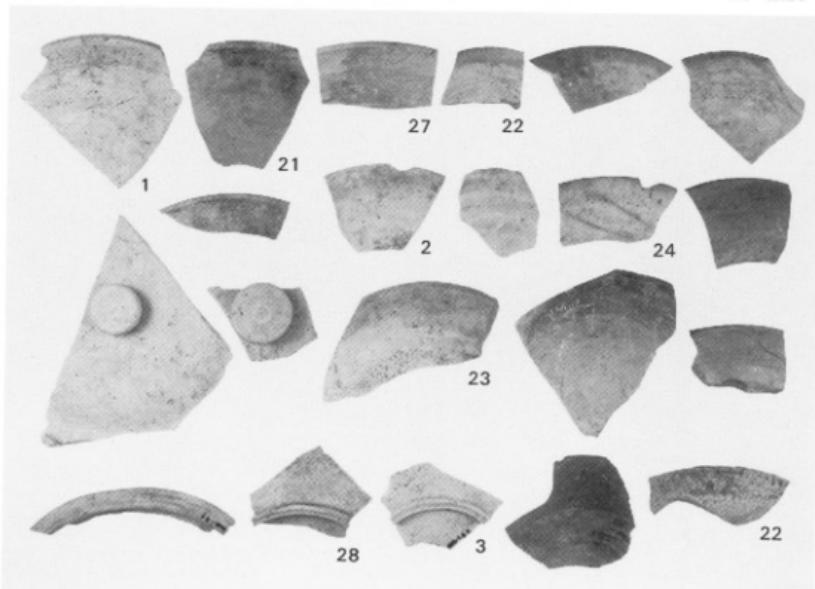


ヘラ記号

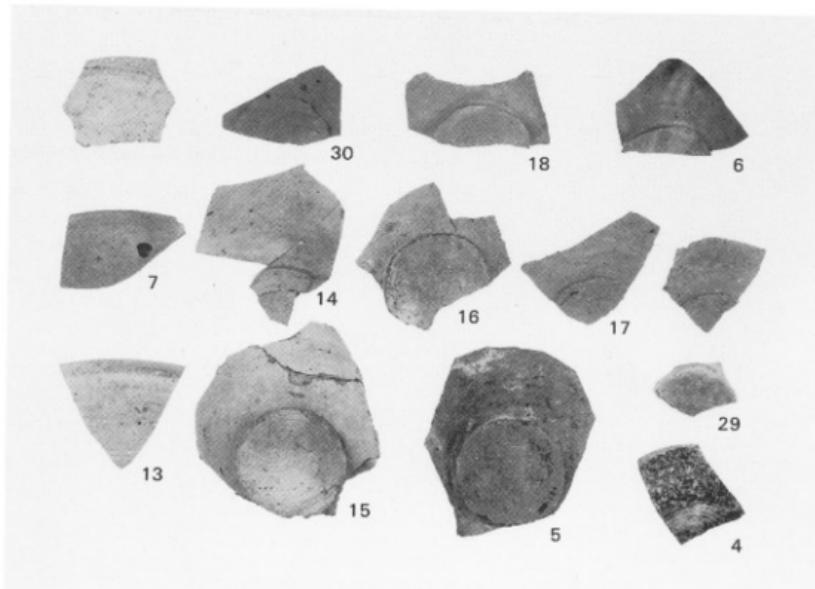
戸井町坪1号窯



ヘラ記号

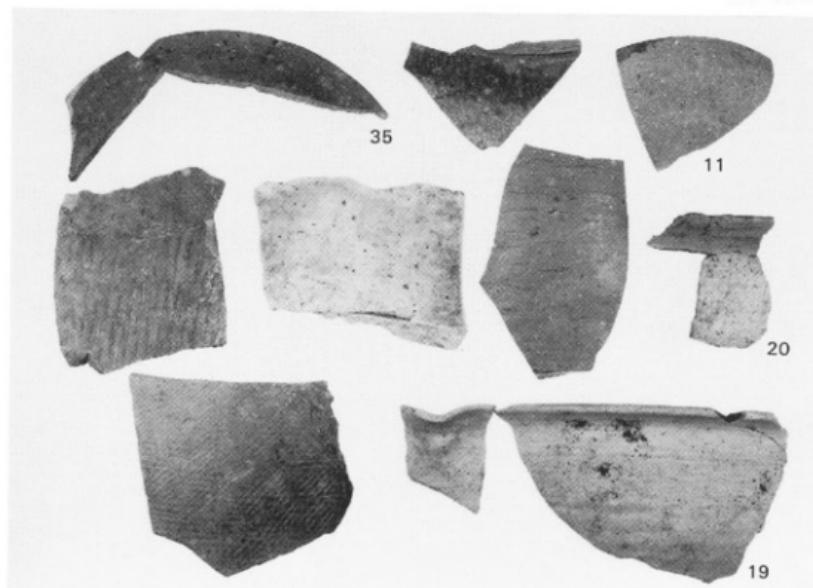
戸井町坪
255号窯

古段階 盖・杯

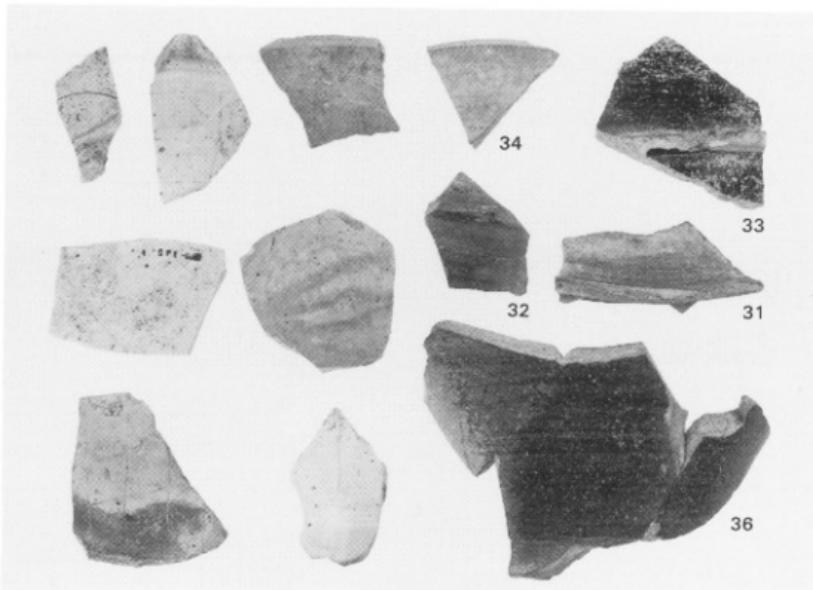


新段階 梗

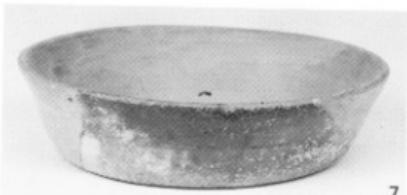
戸井町坪2-5号窯



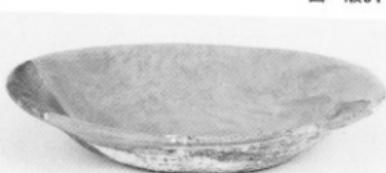
唐・鉢



ヘラ記号 突基壺

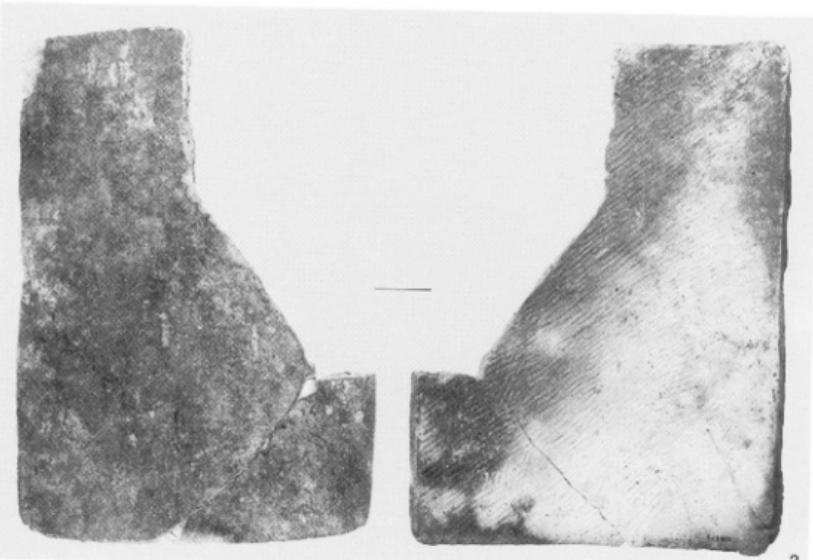


7

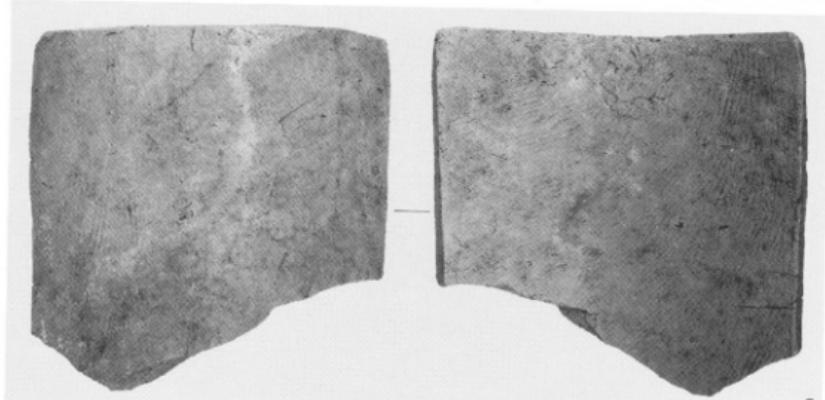


9

出土土器



2



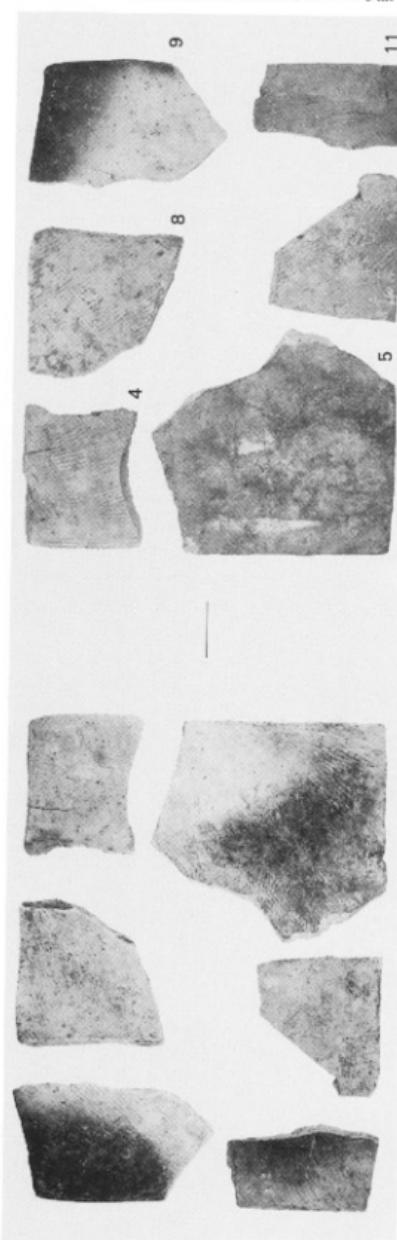
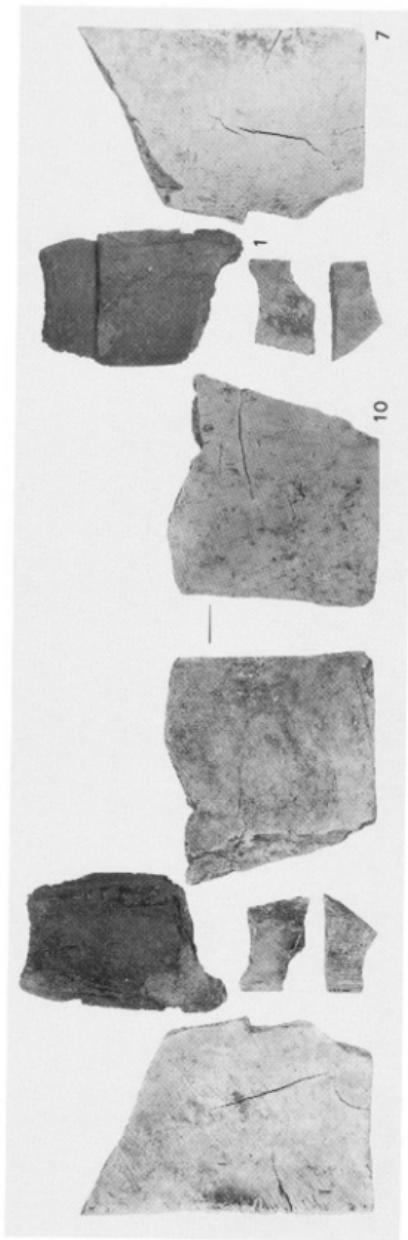
6

出土瓦

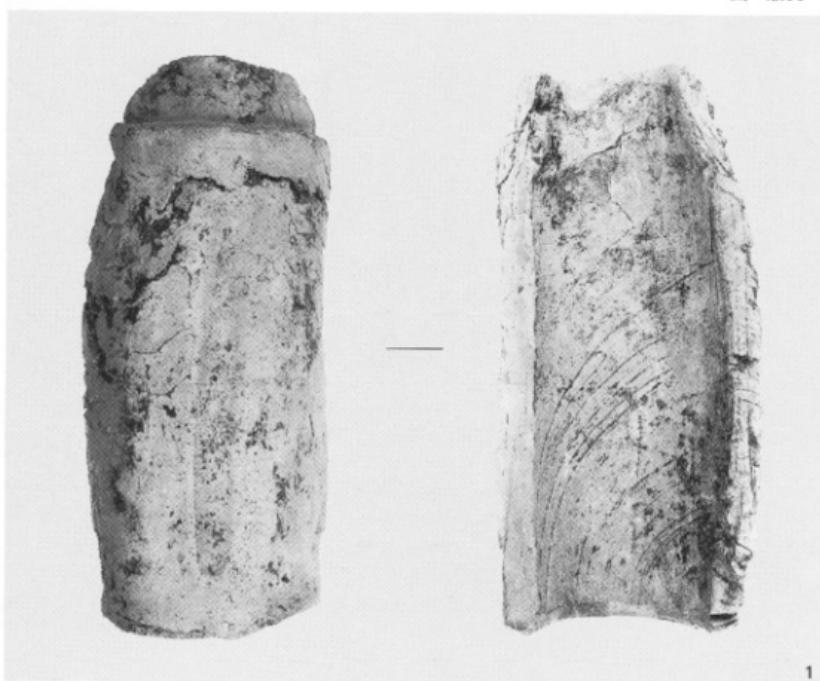
戸井町坪4・5号窯

図版32 戸井町坪4・5号窯

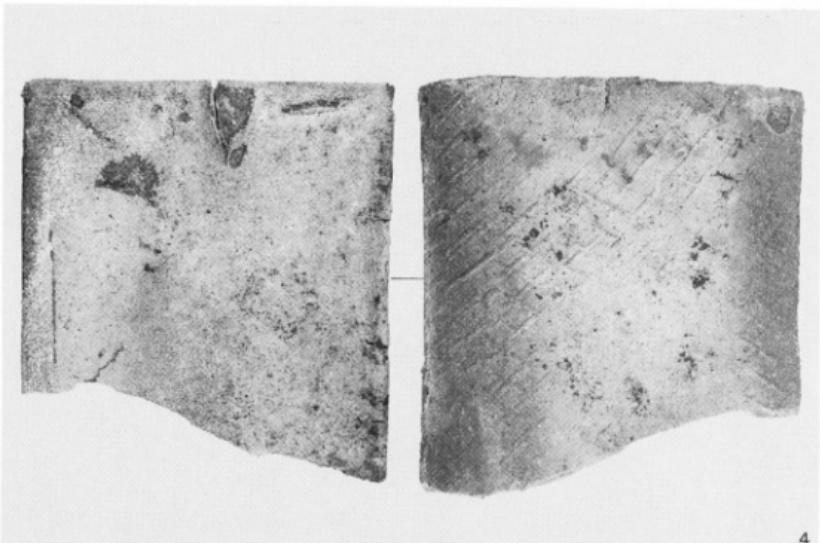
出土瓦



炭
窯



1



4

出土瓦



2



3

出土瓦

兵庫県文化財調査報告 第74冊

1990年3月30日発行

戸井町坪1号窯

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵 庫 県 教 育 委 員 会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL (078) 341-7711

印刷 丸 山 印 刷 株 式 会 社
〒676 高砂市米田町神爪57-1
TEL (0794) 32-1511
